
輝く星に 時の誘い

アクア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輝く星に 時の誘い

【Nコード】

N1967X

【作者名】

アクア

【あらすじ】

いつものように海岸に来た三匹。そこには一匹のポケモンが倒れていた。そのポケモンは自分の名前と元人間ということしか覚えていなくて…。そしてひょんなことから四匹は探検隊を結成することに。それが全ての始まりだった…。

プロローグ

ピシャンツッ！！

「うっ！？」

鋭い音がし、黒い光が放たれる。

「おい、大丈夫か！？」

「だ…大丈夫…！」

男の声に反応した弱々しい声は少女のものだ。

「あと…あと少し…！」

少し光が見えてきた。二人は悟った。

もう、そこだ！！

二人の気が緩んだ瞬間だった。

ピシャンツッ！！

「うわっ！？」

「きゃっ！？」

あの光が再び、二人を襲う。少女は男の方を見た。先程の光を喰らったように苦痛で表情を歪めている。

(早く…！)

少女は願った。そして顔を男の方に向け、声をかけようとする。

その時、男の後ろから、黒い光が見えた。

「危ないっ！！」

少女は咄嗟に男を突き飛ばし、光を喰らった。

「~~~~！！」

男が少女に向かって叫ぶが、少女は既に気を失っていた。

その時、一瞬少女の首もとの何かが光った

そして、光が二人を包む

ザーン……

静かな波の音。周りにも何もないので波の音しか聞こえない。そ

れに誰もいないのでとても静かな海だ。

その海の海岸に、一匹のポケモンが倒れていた。

「う……」

（此処は…何処…？）

そのポケモンは確かめるために目を開こうとするが

（意識が…）

だんだんと意識が朦朧としてきた。そして、そのポケモンは意識を手放した。

プロローグ（後書き）

はじめまして！アクアと申します

初投稿で上手くできているかわかりません…

まだまだ未熟者ですが読んでいただけたら嬉しいです
では！

一話 始まりの出会い

時間は夕方より少し前

3匹のポケモンが可愛らしいプクリンの形をした建物の前に立っていた。

「シアオ…早くしろ」

と呆れたような口調で言うのはピカチュウ。表情も呆れ顔だ。

「わ、わかってるよ！」

シアオと呼ばれたポケモン、リオルは体が震えている。そんなリオルを見て、ピカチュウはため息をついた。

(今日は宝物持ってきたし…大丈夫！)

決意し、シアオは恐る恐る格子の上に足をのせる。すると

「ポケモン発見！ポケモン発見！」

「ひいつ!?!」

格子の下から元気な声が聞こえた。シアオはビクツと情けない声と共に反応する。そんなシアオも気にせず声は続ける。

「誰の足形？誰の足形？足形は」

「やっぱ無理!?!」

そう言ってシアオは慌てて格子から飛び退いた。格子のほうからは

「見失いました…」

「またか…」

と言う声が聞こえた。また、ということはまだもう何度もきているの
だろう。ピカチュウはまたため息をつく。先程よりも大きいものを。

「うう…またやっちゃた…」

ガクツと肩を落とし、シアオは顔をうつむかせる。すると

「何してんのよ！この馬鹿っ！！」

バシンッ！！

鋭い声とともに、シアオの頭を赤い何かが叩いた。そして大きな
音が響く。

「いったー！！何するんだよ、フォルテ！！」

「黙りなさい！これで何回目だと思ってる訳！？付き合ってるこっ
ちの身にもなりなさいよ！！」

気が強そうな声。先程の赤い物はフォルテと呼ばれたロコンの尻
尾だろう。顔は怒りを完璧に表し、シアオを睨みつけている。シア
オはフォルテから目を放すと

「はぁ…今日は宝物持ってきたのになぁ…」

と懐から何かを取り出した。取り出したものは何かの欠片のよう
で、不思議な模様がある。

「とりあえず海岸行くか？」

ピカチュウが思いついたように提案する。シアオはうつむいたまま

「うん…ごめんね。フォルテ、アル」

と元気のない声で謝罪した。アルというピカチュウとフォルテは
ブクリンの建物とは反対の方向に向かって歩きながら

「もう慣れた」

「モタモタしてると置いてくわよ」

と言うだけだった。置いて行かれる、と思いシアオは急いで欠片
をしまつて2匹を追いかけた。

3匹が去ったあと、物陰からズバットとドガースが出てくる。2
匹はシアオ達が行った方向を見ながら、顔に薄ら笑いをうかべた。

「おい、宝物とか言ってたよな？」

とズバットがドガースの方を向き、ニヤニヤしながら言う。その
笑いはとても不気味だった。

「ああ。きつと売ると高く売れるに違いない。追いかけてよっぜ」

とドガース。ズバツトとドガースは顔を見合わせると、3匹の後をこっそりと追いかけた。

海岸

「うわぁ！やっぱり綺麗だね」

海岸に来るとクラブ達が泡吹きをしている。泡は海と重なりあいキラキラと光っている。3匹はこの風景をいつも見に来ていた。

「ホント…何度見ても綺麗」

フォルテは先ほどの怒った顔から一変し、美しい風景を笑顔で見ている。シアオもアルも海を眺める。そのとき不意に、アルが横を見た。目についたのは茶色い物体

「あれは…？」

「？どうかした？」

アルの声に反応し、シアオもフォルテも同じ方向を見る。よく見てみると誰かが倒れているようだ。

「おい、大丈夫か！？」

それに気づくと、アルは急いでかけより体を揺する。するとその

者はゆっくりうつすらと目を開けた。

「大丈夫？あなた、此处に倒れていたのよ？」

優しい口調でフォルテが話しかける。だが、その者は目を見開きながら、信じられないような目で

「なんで…ポケモンが喋っているの…！？」

小さな声で、そう言うだけだった。シアオ達はキョトンとして固まった。シアオは首を傾げながらその者に

「何言ってるの？ポケモンどが喋られるなんて当たり前だよ？君だってイーブイじゃないか」

「…え」

シアオにそう言われ、その者は自分の体を見た。ふさふさの茶色の毛、尻尾、手足。まさに　イーブイだった。

「嘘っ…！？え…っ！？私は人間だったのに…！？なんでっ…？」

一人困惑しているイーブイ。このままではラチがあかないので、シアオがもう一度声をかける。

「あのさ…名前は？」

ビクリと体を揺らし反応してから、数秒後イーブイが口を開いた。

「……………スウィート。スウィート・レクリダ」

顔は強張り、まともにシアオ達を見れていないが弱弱しく自分の名を告げた。声は小さかったがシアオ達にはしっかり聞こえていた。

「…アンタさ、お尋ね者とかじゃないよな？」

「お尋ね者…？」

アルの質問にイーブイ、スウィートは首を傾げる。この様子ではお尋ね者ではないだろう。お尋ね者が何なのかも分かっていないようだ。

「いや、何でもない。なんで此処に倒れていたのか思い出せるか？」

そういわれて、スウィートは必死に頭の中の記憶を探る。なぜ倒れていたのか、というより何があったのか。だが、スウィートは

(あれ…?)

「…あれ…？記憶が…ない」

と呟いた。どれだけ頭の中の記憶を探っても、何も思い出せないのだ。思い出せるのは名前と人間だったということだけ。

「記憶喪失、かな…？」

スウィートの言葉を聞き、シアオが思い付いたように言う。だろ
うな、とアルが頷く。

「名前以外で覚えてることは？」

フォルテに聞かれて、スウィートは頭の中で悩む。「元々は人間だった」と言っただけ信じてもらえるのだろうか、と。スウィートは意を決して言う

「人間だったこと、だけです…」

そう言うところも驚いているようで、目を見開いていた。言わない方がよかったか、とスウィートは少し後悔する

少しの沈黙。シアオが口を開こうとしたが―

ドンッ！

「うわっ!?!」

わざとらしくシアオにズバットがぶつかった。フォルテはすぐに反応し、シアオにぶつかった相手をキツと睨むと

「ちょっとあんた達！気を付けなさいよ!!!」

とズバットに向かって怒鳴った。だがズバットは笑っていた。その隣にはドガースもいる。

「へッ。んなこと知るかよ!」

「これは貰ってくぜ!」

そう言いドガースはシアオが持っていた欠片を自分の懐に入れる。シアオはあっ、と声をあげるが遅かった。ズバットとドガースは早速で洞窟に入っていた。

「あいつら…!! 追いかけるぞ!」

「ええっ!?! ちよっ、引つ張らないでよ!?!」

アルがシアオの腕を引つ張り、追いかける。スイートはいきなりの展開についていけずオロオロしている

「貴女も一緒に来て!?!」

「えっ、あの…」

先ほどのシアオと同じように、スイートもフォルテに強引に引つ張られ、4匹は洞窟へ入っていった。

一話 始まりの出会い（後書き）

主人公が普通パートナーを引っ張るのですがアルに引っ張られましてね〜（笑）

スウィートもフォルテに引っ張られ…

二話は戦闘ですので頑張りたいです（不安になってきた…）では！！

二話 四匹の距離

シアオの宝物を盗んだズバットとドガースを追うため、洞窟に入った4匹。

「ううっ…取り返せるのかなあ…」

先程からオオオロし、弱音を吐くシアオ。

「もう引き返せないからな」

呆れ顔でアルがため息をつきながら言う。

「本当に情けないわね。力づくでも取り返すのよ！」

フォルテはやる気満々で、シアオが弱音を吐くたび「情けない」だの「意気地無し」だのと言っている

「それに宝物なんだろう？盗られたままで、お前はいいのかよ」

「そりゃいい訳ないけど…」

「それが本音なんだろ？なら弱音吐くのを止める。止めなければ今度から「意気地無し」と呼ばせてもらっつ」

「もう言いません！！」

アルに真顔で言われ、慌てて言うシアオ。そんなシアオを見てアルとフォルテが笑う。

しかし、一匹足りない。その一匹にフォルテが声をかける。

「あのだ…」

「は、はいっ…!?!」

声をかけるとその一匹、スイートがビクリと体を揺らし反応する。それに少々怖がっているような感じだ。だが、フォルテが言いたいのは何より―

「そんなに距離とって物陰に隠れなくても…」

そう。スイートは三匹から二メートルくらい離れた場所で、更に物陰に隠れながら来ているのだ。どうやら彼女はとてつもない人見知りのようだ。

「す、すみません…」

まだビクビクとしているスイート。どうしたもんかと頭を悩ませていると、シアオが近づいていった。

スイートはまたもやビクリとするが、逃げはしなかった。

「名前言ってなかったよね。僕はシアオ・フェデス。敬語は使わなくていいよ。よろしく」

「えっ…その…よろしく…?」

明るく自己紹介してくれたシアオに、おずおずと言つスイート。すると他の二匹も近づいてきて

「俺はアルナイル・ムーリフ。アルって呼んでくれ」

「あたしはフォルテ・アウストラ。フツにフォルテって呼んで
と簡単に自己紹介してくれた。」

「あ、はい。えっとシアオさんー」

「あ！呼び捨てにしなきゃ駄目よ！ー」

フォルテがズイツとスウィートに詰め寄って強く言う。スウィー
トは少しビクリとしてから

「え…でも…」

「いーのっ！あたし達も呼び捨てにするから！」

反論しようとしたが、すぐにフォルテに遮られてしまった。それ
から少し言い合ったが（ほとんどはフォルテ）、最終的にスウィー
トが折れた。

「そういえばスウィートの首にかけてるペンダント…それ、なんの
宝石？」

「この事…かな？」

スウィートは三匹に見えるよう、ペンダントの宝石を前足で持つ。
宝石は透き通った濃い青色の宝石。

「多分、サファイヤじゃないかな…」

スウィートは宝石を見ながら答える。

（大切なもの、って思うのは…前の記憶なくす前の自分がそう思ってたからなのかな…）

「確かにな…本で見たのと同じだ」

アルが宝石を見ながら呟く。本で見たというのなら、この宝石はおそらくサファイヤで間違いないだろう。

少し四匹で談笑していると、シエルダーとカプトがてできた。するといきなりタツクルで攻撃してくる。

「きゃ…!?!」

ギリギリ、スウィートも攻撃を避ける。彼女はどうすればいいのかわからなかった。

「ど、どうしたら…」

「スウィート！攻撃して！」

シアオがスウィートに向かって叫ぶ。スウィートは危なっかしいが攻撃を全て避けていつてる。

「こ、攻撃って…!?!」

「電気ショック…!」

横を見るとアルがシエルダーに電気ショックを喰らわせ倒していた。

(そっか…！技！えっと…)

カブトのタツクルを避け、すぐに体当たりを試してみる。すると一撃でカブトは倒れた。

「あう…ビツクリしたあ…」

体の力が抜けていく。スウィートは三匹に説明を求めた。

「えっとね、此処は不思議のダンジョンって場所なんだ」

「不思議の…ダンジョン？」

はじめて聞いた言葉にスウィートは首を傾げる。シアオは頷いて話を進める。

「入るとさっきみたいにダンジョンに住んでるポケモンが襲ってくるんだ。もしもダンジョン内で倒れると外に出されて、ポケは全部なくなり道具は減ってたり…とか」

(ポケ？…お金の事かな)

「またダンジョンに入るとダンジョン全体の形が変わってるんだ。理由は分からないけど。だから不思議のダンジョン。分かった？」

「うん。大体は。ありがとう」

今度から技が出せるようにしないと、と思うスウィート。元人間のため、技のだし方など知らない。今更だがようやく四足歩行に慣れてきたのだ。

「まあバトルセンスはあると思うわ。攻撃は全部避けて、更に一撃で相手を倒したんだから」

フォルテは思ったままの感想を述べる。確かに危なっかしかったが攻撃は全て避け、体当たり一撃で敵を倒したのだ。

それから敵を倒しながら、もう少し詳しくダンジョンの事を話ながら、どんどん進んで行く。

しばらく進んでいると

「にしてもあいつら、どこいったのかしら…絶対ボコッてやるんだから…」

と黒い発言を始めたフォルテ。スウィートは怖がっているが、アルはため息をつき、シアオは顔がひきつっている。

「あ、あれ…！」

スウィートが指した方向には追っていた、紫色の体をした二匹のポケモンが話していた。

二話 四匹の距離（後書き）

スウィートは人見知りが激しいです。

これが自分の考えていたキャラですよ！

一話ではあまり出せなかったので二話でハバーンと！と思ってたら
少々やり過ぎましたかね…？

でもスウィートにはこの性格でいてもらおうと思ってますよ〜
では！

三話 宝物を奪還せよ！！

「ちょっと！その紫の二匹！！」

と、挑発的な言葉でフォルテが怒鳴る。すると紫の二匹ことズバツトとドガースが（フォルテの発言のせいで）怒ったような様子で振り返る

「ほら、シアオ」

とアルが小声で言い、シアオを肘で突く。シアオは怯えたような表情をする。が、覚悟を決めたようで、二匹のほうに振り返り

「ぬ、盗んだ物を返してよ！それは僕の宝物なんだから！！」

と怒鳴った。スウィートはそんなに大きな声をシアオがだすと思っ
ていなかったようで、驚いた顔をしてシアオを見た。だが次の二匹の言葉で視線をかえる

「返すつもりなんかねーよ！返してほしかったら力ずくで取り返してみろ！」

するとズバツトとドガースがこちらに向かってきた。四匹はすぐに構える

「そうさせてもらっわよっ！火の粉！」

「電気ショック！」

一匹に向かってフォルテとアルが技を放つ。そのまま避けられるだろう、と思っていた。が

『ぐあぁっ!?!?』

『えええ!?!?』

見事に、当たった。予想外の事態にフォルテとアルも声をあげる

(弱っっ!避けられない訳!?)

(いやいや、そこは避けるよ!アホか、こいつら!?)

心の中でツッコむ。あえて口にはださないが

「ぐっ…!やってくれたな!!毒ガス!」

するとドガースの周りから紫の煙がふきだす。薄いが吸ったら毒状態になるだろう。すると何処か弱い声が洞窟内に響いた

「し、しんくうぎり!?!」

と技名を言うと、空気中から刃が出現し飛んでいく。刃は毒ガスを巻き込みながら飛んでいくのでガスはあっという間にはれてしまった

「スウィート!ありがとう!」

「え、あ…どういたしまして…?」

フォルテがその者に礼を言う。もう分かるだろうが、先ほどの声はスウィートのものだ。咄嗟にしんくうぎりをしガスを吸い込む前にはらったのだ

「ぼ、僕だつて…!」

シアオは元いた場所から一瞬で消える。おそらくでんこうせつかだろう。その事に、一匹気付いていなかった

「はどうだん」

「喰らいなさい!シャドーボール!」

『え』

「うわあっ!?!?!」

「ぐおっ!?!」

間一髪でフォルテの攻撃を避けるシアオ(代わりにズバットとドガスに当たった)。ホツとスウィートとアルが安堵の息をつく。だが本人は全然良くない訳で―

「何するんだよ!?!あとちょっとで当たってたよ!?!」

「し、知らないわよ!大体あんたがとつと攻撃してどけばいいんでしょ!?!あたしのせいにならないでよ!」

喧嘩になってしまった。勿論二人に周りなど見えている訳がない

「てめえら俺らを無視してんじゃねえよ!!」

「喰らいやがれ!!」

ズバットとドガスが喧嘩をしている二匹に向かって行く。スイートはすぐに動き、ドガスに体当たりを当てて一撃で倒した。アルもズバットに向かって電気ショックを放つが―

「なっ…!!」

「そう何度も当たると思うなよ!?!」

ズバットは電気ショックを避けそのままに引きに一直線。さすがのスイートも反応できない

ドガッッ!!

見事に体当たりが二匹に直撃した。ズバットは少し勝ち誇ったような表情をしている

「だ、大丈夫」

スイートは近寄って声をかけようとしたが、止まった。アルは怪訝そうな顔をして声をかけようとしたが、アルもズバットまでもが固まった。それは―

殺気を感じたから

「邪魔をしないで!!!!」

「私の邪魔をしないでくれるかしら!？」

「うっ…わああああ!!!」

シアオのはどうだと、フォルテの火の粉がズバットに炸裂する。殺気のため、ズバットは硬直状態になってしまったようだ

「お…怖い、怖い。お前ら、目的忘れてないか？」

とアルがのんきな口調で言う。ズバットを倒してスッキリしたのか、二匹とも普通の状態に戻っていた

「そうだ！僕の宝物返してよ!!」

シアオがドガースにむかって怒鳴る。先程の一部始終を見てしまったドガースは微かに震え

「も、元からいらねーんだよ、こんな物!!」

と言いながらドガースはシアオの宝物を投げる。シアオは地面に落ちないようキャッチする。無事なことを確認すると安心したような表情を見せる。ドガースは

「お、覚えてるよ!!」

とお決まりの捨て台詞をいい、ズバットを引っ張って逃げていった。するとその様子を見ながらフォルテが

「いらなんだったら元から盗まなきゃいいのに。ホント、腹立つ奴らだったわ」

とぶつぶつと文句を言い出した。スウィートは隣で苦笑いをして
いる。その様子を見てアルはため息をつき

「とりあえず一旦戻ろうぜ」

と提案した。三匹ともすぐに頷いた

「スウィート、ありがとね！フォルテとアルも！！」

海岸に行くとすぐにシアオがお礼を言ってきた。フォルテは「お
まけみたいに言わないでくれる？」と愚痴をはいているが

「う、ううん…私は特に何も…」

と顔を伏せる。スウィートの本音は面とお礼を言われると恥ずか
しいだけなのだ。すると愚痴っていたフォルテが会話に加わってき

「ねえ。スウィートに宝物見せてあげれば？」

と提案した。シアオは頷くと宝物をだす

宝物は何かの欠片みたいで、不思議な模様が描かれていた。

「ぼくは遺跡の欠片ってよんでるんだ。ほら、不思議な模様がある
でしょ？」

シアオの説明を聞き、スウィートはもう一度遺跡の欠片を見た。

(確かに…こんな模様見たことない…)

「僕はこの模様のなぞを解くのが夢なんだ！だからそのために探検隊になるうと思ってるんだけど…」

途端、シアオが言葉を発さなくなる。スウィートは首を傾げる。するとフォルテが

「実はこのヘタレ、14回も失敗してんのよ。ギルドに入門しなきゃいけないんだけど、門の前で終了よ」

とため息をつきながら説明してくれた。シアオはうつ、と声をあげたりしていたが

「で、スウィートはこのままどうすんの？」

いきなり黙っていたアルがスウィートに尋ねる

「え…これから…？」

(そう、だった。どうすればいいんだろう…?)

スウィートは何も言わず考えるばかり。暫くしてから、シアオが口を開いた

「もしもしよかったら、一緒に探検隊にならない？」

「え…探検隊…？」

スウィートはオウム返しのように言葉を繰り返す。シアオは期待の目をむけている

「私も、是非なってほしいわね。一匹とか嫌だもの」

「俺も。楽しそうだしな」

フォルテとアルも同じ意見のようだ。スウィートは迷ったが

(でも…行くところもないし…。知り合いは皆しかいないから…)

「うん…私が入っていいのなら…お願い、します…」

とスウィートが言うと三匹とも顔をパアツと明るくさせ

「大歓迎だよ！！ありがと、スウィート！！じゃあ、早速ギルドに
」

と大はしゃぎするして、何処かにむかおうとするシアオ。だが、
痛い一言に止められた

「じゃあ、格子の上ののっけてくれるよな？」

「(ギクツツ!)え…っ…と…」

シアオの顔がどんどん青ざめていく。その様子を見たフォルテは
黒い笑みを浮かべて

「じゃあ行きましようか。ようやくギルドに入れるわね」

そう言うと、とっとと行ってしまった。アルはため息をつきながらフォルテの後を追い、スウィートはシアオの様子を窺いながら追う。シアオは表情を固めて、後を追った

三話 宝物を奪還せよ!! (後書き)

よ、ようやく更新できたのですよ…もう少し早めに更新しようと思ってたのに…

フォルテ「つか、ヘタクソね」

うおっ!?フォルテ!?何故ここに…

フォルテ「面白そうだったからきたのよ。また暇だったら来るわね」

(こいつの事だから嫌味連発してくるんじゃない…)

フォルテ「ア〜ク〜ア〜(怒)」

な、何も言っていないって!!落ち着け!!

では皆様、この辺で!

にげるおおおおお!!!!

フォルテ「待ちなさい〜!!!!」

四話 少しの勇氣（前書き）

なんか…スウィートの言葉が長く…（汗）
そのせいで今回は短いです

スウィート「ごめんなさい、ごめんなさい…」

アル「アクアのせいだし謝らなくていいんじゃないか？」

アル、煩い！！

ちょっと予定とは違っくなっただ四話スタートッ！！

四話 少しの勇氣

探検隊になるため、四匹はギルドに続く道の怪階段の前に来ていた

「うわぁ…長い階段…」

スウィートが目の前の階段を見ながら呟く。確かに40段くらいはありそうだ

アル、フォルテ、スウィート、そしてシアオの順番に階段を上る。半分くらい上った頃に

「うぎゃっ!!」

シアオの声が聞こえた。後ろを見るとうつ伏せになっている。そんなシアオにスウィートはオロオロし、フォルテは「馬鹿ね」と呆れたような顔をしながら言い、アルはため息をついた

「いったった…」

「だ、大丈夫？シアオ…」

「な、なんとかね…」

スウィートの疑問に苦笑いしながら、シアオはゆっくり立ち上がる。そんなシアオをスウィートは心配気味に見ている

スウィートの様子を見たフォルテが

「大丈夫よ。こけるとか躓くとかよくある事だから。いちいち心配してたらキリがないわよ」

と言った。それはそれで大丈夫か、と疑問になったが考えないことにしたスウィートだった

そしてようやくギルドの前に来た

ギルドはプクリンの形をした可愛らしい建物。門は鉄格子で入れない様にしてある。その前には穴に格子がつき、誰が乗っても落ちないようにしてある。何の為だろうか、とスウィートが考えていると

「あの格子の上に乗って足型を見て、怪しいものじゃないか確認するんだ」

とアルが説明してくれた。いきなり説明されスウィートが驚いた表情でアルを見る。「顔にでてた」と苦笑して、アルは答えた

「じゃ、まずあんたからね」

フォルテが言いながら、そのポケモンを見る。そのポケモン、シアオはビクツと体を揺らす。そして一向に動こうとしない。スウィートはなんだか見ていられなくなり、声をかける事にした

「シアオ…諦める？」

「へっ………？」

先程とは違うスウィートの口調。だがシアオはスウィートの言った言葉に対してキョトンとした
しかしスウィートは構わず続ける

「このままじゃ、ううん。今のシアオじゃ、探検隊にはなれないと

思っ」

「そ、それは……」

スウィートにはつきり言われ、シアオは俯く

流石に言いすぎではないか、とフォルテが声をかけようとするが、アルがそれを阻止し「いいから見てるって」と言った。フォルテは複雑そうな顔をしたが、頷いた

「こんな所で立ち止まるのに、夢が叶えられるわけない」

「そんな事……」

「分かってる、って言いたいの？行動に表せないようじゃ、全然分かってない」

スウィートの言っていることは確かだが、シアオはそれよりも恐怖心のほうが強かった

次のスウィートの言葉が怖い。自分の夢が達成できないものだと言われたくない

シアオは顔を上げることが出来なかった。そしてスウィートが口を開いた

「だけど、それは今から変わればいいんだよ」

「……え？」

予想した言葉とは違う言葉にシアオは驚き、顔を上げる。そこに

は先程、きつい言葉を言っていた者とは思えない、いつものスイートだった

「夢を叶えたいんだよね？だったらシアオがちよつとずつでいい変わらなくちゃ。少しの勇気でいいから出してみて、ね？」

スイートが笑顔で言う。シアオはずつと言われた言葉を頭の中で復唱していた

(自分自身が変わる……勇氣……)

「……ありがとう、スイート。あと、ごめんね」

スイートの方を向き、自分の気持ちを伝えた。スイートは今更ながら……

(わ、私……とんでもないおせっかいを……。偉そうなこと言っちゃったし……！)

などと考えていた。そして勢いよく頭を下げて

「わ、私のほうこそごめんなさいっ！偉そうな事言っ……それに……」

と謝罪を始めた。シアオは頭に疑問符を浮かべながら

「え、あの……なんでスイートが謝るの……？」

と恐る恐る尋ねた。するとアルが間に割り込んできた

「あーもう謝罪はいいから。シアオ、さっき言われたとおり…」

「…うん。分かってる」

と笑顔でシアオが言った。この様子なら大丈夫だろう、とアルはスウィートとともに後に下がった

(勇気を…ださなくちゃ…!!)

シアオは格子の上に乗った。すると

「ポケモン発見！ポケモン発見！」

元気な声が穴の下から聞こえた。シアオ、そしてスウィートがビクツと体を揺らす。こういうことか、とスウィートは納得する

「誰の足型？誰の足型？足型はー」

リオル！！足型はリオル！！」

どうやら確認できたようだ。それを聞くとシアオは

「やったああああ！！」

と喜びまわっている。シアオの喜びっぷりにフォルテとアルは呆れ顔、スウィートは小さく喜んでいた。すると先程とはちがう声が聞こえた

「ん…？あと三匹いるな。乗れ」

するとフォルテが不満そうな顔をしながら

「いっぺんに乗ったら駄目なの？」

と尋ねたがアルに即、却下された

「じゃあ…私、乗るね…」

そう言い、スウィートが格子の上に乗る。するとまた同じ声が聞こえた

「ポケモン発見！ポケモン発見！」

(え…またやるの！？めんどくさっ！！！)

心の中でフォルテがツツコむ。アルは隣ではれないように、小さなため息をついた

「誰の足型？誰の足型？足型は…」

なぜか声がそこで止まってしまった。スウィートはオロオロしている

「おい！見張り番！見張り番のハダル！」

「え、エート…多分イーブイ！多分イーブイ！」

「はあっ！？なんだ、多分って！？」

「だって……こらじゃ見かけないし……分からないものは分からないし……」

足型がどうやら分からないようだ。そのせいでもめている

「あ、あう……ごめんなさい……ややこしくて……」

スウィートは先程から謝罪。フォルテは何故謝る、とツツコんでいる。シアオは中に入りたくてうずうずしている。アルはため息をついてから穴にむかって叫んだ

「あつてますから、とつとと次やってくださいー！ー！ー！」

すると向こうの言い合いもとまり、「次どうぞ！」「という声が聞こえる

アルとフォルテは問題なく確認された。そしてようやく鉄格子の門が開く

「入る、入る」

シアオは落ち着かない様子で入っていく

「あ、ちょっと待ちなさいよー！」

フォルテはすぐにシアオを追いかけ、中に入っていくアルはまたまたため息をつきながらゆっくりと追いかける。

スウィートはそんな三匹を見て苦笑しながら、追いかけた

四話 少しの勇気（後書き）

シアオ「ギルドに入ったー！ー！ー！」

フォルテ「うるっさいー！」 シアオの頭を尻尾で殴る

君らはいつも賑やかだねえ…アルが苦勞するわ

シアオ「アルはいつもため息つくよね。幸せ逃げまくってんじやないかなあ」

フォルテ「ホントにね。また今度理由でも聞いてみようかしら？」

うん。本人に聞いてきて（大半お前らのせいなんだけどな）

五話 探検隊結成!! (前書き)

フォルテ「サブタイトル…適当ね」

煩い! 思いつかなかったの!!

シアオ「でも…もうちょっと…じっくりくるものを…」

だーかーらー黙れ!!

フォルテ「あーっ! 煩いわね!!」 最大威力の火の粉

……………。 気絶(もしくは瀕死)

フォルテ「ああ!! やりすぎたあ!!」

シアオ「ちょっ、どうすんのさ!?!」

フォルテ「進めてごまかしなさい!!」

シアオ「(何その無茶ぶり!) ええっと…五話スター @ …」

フォルテ「ああ、もう! 五話スタートツツ!!」

五話 探検隊結成！！

中に入るとすぐに梯子があった。その右には「ようこそ！プクリンのギルドへ！」と書いてある、矢印の形をした看板、左には「プクリンのギルド 探検隊 心得 十か条」と書いている、四角の形の看板

(これは覚えていたほうがいいよね…)

スウィートは四角の形の看板を見ることにした。アルも気付き、看板を見る

『ひとつ！ 仕事は絶対サボらな！い！

ふたつ！ 脱走したらお仕置きだ！

みつっ！ 皆笑顔で明るい笑顔！

よっつ！ 依頼は『受ける』をした後『実行』を忘れずに！

いつっ！ 探検に行く前には道具をチェック！！

むっつ！ 探検に行く前にはれんけつ技もチェック！！』

ななっ！ 探検中は慌てず騒がず冷静に！

やっつ！ 困っているポケモンを助けるのも探検隊の大事なつ

とめ！

こここのっ！ 依頼を沢山こなして目指せ憧れゴールドランク！

とおー！ 稼いだ賞金はギルドで分けるよ！

皆、友達！友達〜〜〜！！』

最後の友達、というところが強調している。よほどのこのギルドでは大切なようだ。最後まで読むとフォルテの声が梯子の下から聞こえた

「ちよつとー!!何やってんのよ!早く降りてきて!!」

と言われた。見るとシアオもいない。もう梯子の下に行ってしまったようだ。スウィートは慌てて梯子を降りる。が

「ふえっ!!??」

ドシンツッ!!

「ス、スウィート大丈夫!？」

見事に梯子から勢いよく落ちた。心配してシアオとフォルテが近づいてくる。スウィートはいたた!と言いつつも起き上がる。周りを見ると沢山のポケモンがスウィートを見ていた。勿論、すばやい動きでシアオの後ろに隠れた

「スウィート、気をつけるよ」

続いて降りてきたアルがスウィートに声をかける。スウィートは恥ずかしそうに「ごめんなさい!…」と小さな声で言う。すると

「おい!さっき入ってきたのはお前らか!？」

と声をかけられた。スウィートはビクツと体を揺らしてから、顔だけ見えるようにシアオの後ろに隠れる。声をかけてきたのはペラツプだった

「そうですけど…」

シアオがおずおずと答える。そんなシアオの様子も気にせずペラ

ツプは気の強そうな声で続けた

「私はデイス・トラクティ 情報通であり、親方様の一の子分だ
（こいつ…自分で一番って言ったわよ…あたしこつという奴大嫌い
んだけど…）」

とフォルテが思っていたのは、本人だけしか知らない

「勧誘やアンケートならお断りだよ！さあ、帰った！帰った！」

ペラツプことデイスはどうやら勘違いしているらしい。四匹を追
い出すような事を言っている。だがそんな態度に黙っている訳がな
いポケモンが一匹

「ふざけないですよ！なんなのよ、その態度！！話し聞きなさいよ！
この鳥！！」

フォルテはアルとシアオが止める前に、喧嘩を売るような言葉を
言ってしまった。勿論デイスも怒っているような顔をしている。慌
ててアルが弁解する

「す、すみません！俺らは探検隊になりたくて来たんです！！」

「た…探検隊だつて…！！？」

探検隊、と言った瞬間、デイスが凄いでかい声をあげる。四匹は
なんなんだコイツ…的な目でデイスを見る。デイスは後ろを向き

「今時ギルドに弟子入りしたいなんて…修行が厳しくて脱走する者

も後を絶たないというのに…」

デイス自身は独り言のつもりなのだろうが…まる聞こえである。恐る恐るシアオがデイスに尋ねる

「修行って…地獄のように厳しいんですか？」

(地獄のように、とは言っていないよ…シアオ…)

スウィートは心の中でツッコむ。本人は全く気付いていないが

「はっ！？そんな事ないよ！修行はとーっても楽チンだよ」

「おい…言ってること全然違うじゃねえかよ…」

デイスの言っていることにアルがツッコむ。がスルーされた

「探検隊になりたいならそうと言ってくれればいいのに」

「あんたが話全然聞かなかったんでしょーが」

次はフォルテ。やはり機嫌はかなーり悪いようで、喋り方にも怒りが少々混じっているのが分かる。スウィートは落ち着いて、と先程から宥めようとしているが、無意味である

「ほらっ、お前達、ついておいで」

やはりスルーした。そして梯子を上機嫌で降りていく。フォルテは納得いかない様な顔をしながら「あの鳥…いつか絞めてやる…」と愚痴を吐きながら梯子を降り、これ以上注目を浴びないようにと

そそくさと、梯子を降りるスイート。シアオはウキウキしながら落ち着かないような感じで梯子を降り、アルはこの先が心配だ…と考えながら梯子を降りるのだった

梯子を降りるとポケモンは全然いなかった

「ここは主に弟子達が働く場だ。チーム登録はこっちだよ」

デイスが再び歩き出す。四匹はついていく。するとデイスはドアの前で止まった。その近くには窓があり、シアオが窓に近づく。そして――

「わあっ！スゴイ！ここ地下二階なのに外が見えるよ！」

とはしゃぎだした。それでデイスが黙っている訳もなく

「いちいちはしゃぐんじゃないよ！ここは崖の上に立っているんだから見えてもおおかしくないんだよ！」

デイスに怒られシユンとするシアオ。勿論二匹は呆れたような顔をしていた

「…ここは親方様の部屋だ。くれぐれも粗相のないようにな」

そう言つとデイスはコホン、と咳払いしてからドアを叩く

「親方様、デイスです 入ります」

デイスが部屋に入るとともに、四匹も入る。見るとピンク色のポケモン、プクリンが座っていた

「親方様。この四匹が新しく弟子入りを希望している者達です
つて、親方様？」

デイスは何を言っても反応しないプクリンにそーっと近づこうとする、と

「やあ！！僕、ロード・オルフィン！！このギルドの親方だよ？」

プクリンロードがいきなり振り返った。その瞬間スウィートは隣にいたシアオの後ろに隠れ、デイス含める四匹は小さな声、悲鳴をあげた。だがロードは全く気にせず続ける

「探検隊になりたいんだって？じゃあ、一緒に頑張ろうね！とりあえず君達のチーム名を教えてもらえる？」

勝手に進めていくロードに全然ついていけなかったが、チーム名というところはしっかり聞いた

「チーム名…考えてなかったな…。なんかあるか？」

と三匹に尋ねるアル。シアオとフォルテはうーん、と頭を悩ませる中、スウィートが小さな声で言った

「えっと…シリウスっていうのは…どうかな…？」

『シリウス？』

「う、うん。シリウスって一番光り輝いている星だから…その星のように輝けますように、って…」

スウィートは恥ずかしそうに言うが、三匹はしっかりと聞き取っていた

「いいね！僕は賛成！」

とシアオ

「あたしもいいと思うわ」

とフォルテ

「俺も。意味がしっかりしてるしな」

とアル。全員納得したようだ。スウィートは安堵する。フォルテがロードのほうを向き

「じゃあ、シリウスをお願いします」

と言った。ロードはニコニコしながら

「リーダーは誰かな？」

「スウィートです」

「え、ええっ!?!」

しっかりとフォルテが言う。スウィートは無理!と言いながら首

を横に振っている

「じゃあ登録するよ〜！登録、登録、皆登録…」

「お、お前達、今すぐ耳をふさげっ！！」

いきなりデイスに言われ戸惑った四匹だが、言われたとおりに耳を塞いだ瞬間

「たぁーーーーーっ！！！！」

『！！！！！？？？？』

ロードがいきなりハイパーボイスをくりだした。凄い衝撃波だったがすぐに止まった。耳を押さええていても凄い煩かった。スイッチトは

(ギ、ギルドが少し揺れたような…気のせい、なのか…な)

とまだキンキンとしている頭で考えたが、気のせいということにしておいた。ハイパーボイスをくりだした張本人・ロードはずっとニコニコしている。そして

「おめでとう！これで君達も立派な探検隊だよ　これは僕からのプレゼント」

渡されたのは箱。開けてみると中にはバッグ、バッチ、地図が入っていた

「まず、このバッチは探検隊バッチ。探検隊の証だよ　そのバッチ

で救助を求めているポケモンにかざすとこのギルドの前まで送ってくれるよ。あと、探検隊のランクによって色が変わるから。これはトレジャーバッグ。ダンジョン内で拾ったものはこのバッグに入ね。バッグは君達の活躍によって大きくなるからね。そしてこれは不思議な地図。とっても便利な地図だよ。」

スウィートはトレジャーバッグを開けてみた。すると色々入っていた。ロードのほうを向き、尋ねてみる

「あの、これは…」

「あ、それは身につけてね。ピンクリボン、レッドリボン、ブルーリボン、きみどりリボン。リボンはスカーフやバンドナにも出来るから好きなところにつけてね。」

少しの話し合いの末、スウィートがピンクリボン、シアオがきみどりリボン、フォルテがレッドリボン、アルがブルーリボンということになった。全員スカーフにして首に巻くこととした。うれしそうな顔をしてシアオがロードに向かって

「ありがとうございます！これから僕ら頑張ります！！！」

「あんたが一番頑張らなくちゃいけないんだけどね。」

お礼と意気込みを言ったのだが、フォルテの言葉にうつ、と詰まってしまう。ロードは頑張ろうね、とのんきに言ってからディアスのほうを向き

「じゃあ今日はもう遅いから寝よう。ディアスは部屋の案内してあげてね。」

「分かりました」

そして部屋を出る際、ロードが明るくおやすみ〜と言っていたのに、四匹はどう反応すればいいか迷ったのは言うまでもない

「ここがお前達の部屋だ 明日からはしっかり修行するから夜更か
しするんじゃないよ！」

そう言うとき、デイスは出て行った。案内された部屋は葉はベッドが
四つほど置いてあり、四匹が体を伸ばしても大丈夫ぐらいの広い部
屋だった

部屋に入るなりシアオとフォルテはベッドに飛び込んだ。スウイ
ートとアルはベッドに座った。フォルテは目を瞑りながら

「にしても…疲れたわ。修行がどうか言ってたし…もう寝ましょ」

「そうだね…私も…眠い、かも…」

と言いながらスイートが小さな欠伸をする。アルもベッドに寝
転がり

「もう寝るか…おやすみ」

「僕も…おやすみ…」

シアオもアルも寝るようだ。スイートもベッドに寝転がる。そ

して部屋が静かになり、外の音以外聞こえなくなった。スウィートはなかなか寝れず、目を瞑っているだけだった。暫くすると――

「ねえ、皆…起きてる？…もう寝てるかな…」

沈黙をシアオが破った。いきなりでスウィートは反応できず、返事が出来なかった。誰も返事しないがシアオは構わず続ける

「僕…ギルドに入つて本当によかった…。まあ、皆に迷惑かけたけど…。だけど…探検隊やってるうちに少しずつでも頑張れるように、変われるように頑張りたい…。そして、いつか…遺跡の欠片の秘密を、解きたいな。…皆にはまだまだ迷惑かけるかもしれないけど…よろしく、ね…」

それだけ言うとシアオから寝息が聞こえた。きっと寝たのだろう。スウィートは頑張れ…と心の中でシアオに言った。そして違うことを考え出す

（でも…どうして私は人間からポケモンになっちゃったんだろう？
私は…なんで記憶を失っちゃったのかな…？ちよつとずつでいいから…思い出せたらいい、な…）

スウィートは考えをやめ、意識を手放した

五話 探検隊結成！！（後書き）

アル「ん？アクアはどうした？」

スウィート「フォルテから『ちょっといけない状態だから。詳細を聞くことは許さないわ』だって…」

アル「（フォルテ…なんかやらかしたな）でも何やれっていうんだよ…」

スウィート「そうだね…」

アル「ん〜…ま、次はやつと探検隊の生活始めだよな」

スウィート「どんな事するのかなあ…」

アル「とつととアクアが更新すりゃいい話だ」

スウィート「あ、なんかアクアさんからメモきたよ」

アル「なにになに？『すんなり終わると思うなよ』…？なんだ、こりゃ」

スウィート「なんか…嫌な予感がするなあ…」

六話 朝礼とハプニング!? (前書き)

シアオ「ちょ…何このサブタイトル…」

フフフ…見れば分かるよ(笑)

スウィート(なんで笑ってるのかな???)

それでは本編どうぞ

六話 朝礼とハプニング！？

朝…スウィートは不意に目が覚めた。周りを見ると3匹はまだ寝ている。まだ寝ぼけている頭をなんとか起こして窓の近くに寄ってみる。まだ太陽は昇っていないかった

(今…何時なんだろう…？暇だなあ…)

とスウィートは呑気に考え事をする。3匹は一向に起きそうにないので暇なのだ

アルは規則正しい寝息で寝ていて、シアオは何やらぶつぶつ言いながら、顔が笑っているので幸せな夢なのだろう。フォルテは恐らくデイラの事だろうが「焼き鳥にしてやる…」などと呟いている。暫く3匹の様子を眺めていると、窓から明るい光が差し込んできた。スウィートは窓の外を見る

(凄い…綺麗…)

スウィートがちょうど見たのは朝日が昇る所だった。太陽が海の水平線からゆっくりと出てくる。太陽の光で海はキラキラと輝いていた。スウィートはその光景に目を奪われた

何分か経ってスウィートは窓の外を見るのをやめ、今度からも早起きしよう、と考えるのだった。するとムクツと誰かが起きた

「ん…？…おはよう、スウィート」

「おはよう、アル」

アルの挨拶にスウィートは微笑んで返す。アルはふああ…と欠伸

をする。顔もまだ眠そうだった。アルはまだ寝ている2匹に目を向ける。まだぐっすりと寝ていた

「あ、そうだ。スウィートに1つ忠告しとくな。フォルテを無理やり起こそうとするなよ。酷い目にあうから」

とアルに言われ、スウィートは頭に疑問符を浮かべながらも頷いておく。すると部屋に誰か入ってきた。スウィートはすぐさまあるの後ろに隠れる。そのポケモン、ドゴームはスウィートの様子を気にせず寝ている2匹を見ると、大きく息を吸った

アルは何か感じたのか「スウィート！耳塞げっ！！嫌な予感がする！！」と耳を塞ぎながらスウィートに指示をする。スウィートは迷ったがとりあえず耳を塞いだ。そして嫌な予感は、的中した

「起きろおおおおお！！朝だぞおおおおお！！！！」

「うぎゃあああああ！！！？？」

「きゃあああああ！！！？？」

ドゴームの馬鹿でかい声に続き、シアオとフォルテが叫ぶ。耳を塞いでいても煩いのに、直撃したら鼓膜が破れるのでは？とスウィートは考えてしまった。一旦、ドゴームの声が止むが2匹は起きない、起きれないようだ。ドゴームはもう一度息を吸う。スウィートとアルはすぐに耳を塞いだ。そしてドゴームが口を開いた、が

「朝だといってん d」

「うるっっさいわね！！黙れ、アホ鳥いい！！！！！！」

フォルテがいつ覚えたのだろうか、（まだ威力は低い）火炎放射を怒鳴りとともに放つ。咄嗟に反応できなかったドゴームは火炎放射に直撃し、まる焦げになった。アルがそんなドゴームを見てフォルテにむかって

「お前、何やってんだああー！」

「はっ！？ん？ああ、おはよう、スウィート、アル」

アルのツツコみは見事にスルー。フォルテは笑顔で挨拶してきた。今度ばかりはスウィートも微笑んで挨拶は出来なった。こんなことさえ無ければ出来たのだが

「お前、自分が何したのかわかってんのか！？」

「へ？何が？？」

アルの様子に首を傾げるフォルテ。自覚すらないようだ。これがアルの言っていた“酷い目”だとスウィートは納得した

アルが説明するとフォルテは苦笑いしながら

「いや、夢であの鳥が煩くって。つい」

と言った。アルは大ため息をついた。そしてまだ寝ている1匹を見る。駄目だ、コイツ的な目でアルが見るのをスウィートは苦笑しながら、その1匹を起こすことにする

「シアオ、朝だよ。起きて」

呼びかけながら体を揺する。だが一向に起きる気配は無い。する

とフォルテが叩き（ある意味暴力）起こした。シアオは渋々起きたが
そして焦げているドゴームを何とかするに時間がかかったのはい
うまでもない

「遅い！！お前ら一体何をしていた！？」

行ってみると既に9匹のポケモンが綺麗に並んでいた。そしてい
きなりディラに怒鳴られた。フォルテが心の中で愚痴っていたのは
言うまでもない

「話すと長くなりますけど…聞きます？」

アルが苦笑いをしながらディラに言う。するとディラは「…もう
いい」と諦めた様に言った

「とりあえずお前達、自己紹介しなさい」

ディラが指したのは勿論スイート達。シアオは元気よく「はー
いっ！！」と返事したがスイートは固まった

（こんな大人数の前で…自己紹介…？無理無理！！！！）

スイートは動こうとしない。するとフォルテが無理やり引つ張
り、スイートを前に立たせた。スイートはすぐさまアルの後ろ
に隠れる

「スイート…小さな声でもいいから、ね！」

シアオが気を使って声をかけてくれる。スウィートは少々泣きそうな顔をしながら本当に小さな声で

「…スウィート・レクリダです…。探検隊『シリウス』のリーダーです…。よろしくお願ひします…」

とやっとの思いで言った。言葉が全員に届いているか分からないが、スウィートは言えた、ということに満足した。そして3匹も自己紹介をする

「シ、シアオ・フェデスです！宜しくお願ひします！」

「フォルテ・アウストラ。探検隊『シリウス』の一員よ。よろしく」

「アルナイル・ムーリフです。アル、と呼んでください。宜しくお願ひします」

一通り自己紹介を済ませる。スウィートはやっと前から開放される！などと思っていたが、現実そうはならなかった

「じゃあお前らも簡単に自己紹介してくれ」

ディラが指したのは弟子達。まだあるのか…とスウィートは心の中でガツクリした

「ではわたくしから。わたくしの名前はルルル・メイリーですわ！」

「あ、あっしの名前はレニウム・コワードでゲス！」

「ワシの名前はラドン・オートン。起きてなかったら今日みたいに大声をだして起こすからな」

(……それはある意味危険なんだが)

キマワリ、ビツパ、ドゴームの順番に自己紹介をしてくれる。ドゴームの発言にアルがツツコんだのは本人しか知らない

「僕はハダル・クハードです。主に見張り番の仕事をしています。見張り穴からの声は僕の声だったんですけど……分かりました？」

「ええ。今聞けば。15回も聞いてりゃ声も覚えたわ」

ディグダの言葉にフォルテが相槌を打つ。シアオは一言余計!とフォルテに目で訴えようとしているが、フォルテは全く気付いていない

「私はフィタン・クハード。ハダルの父親だ。宜しく」

「俺はイトロ・クリファスだ!よろしくな、ハイハイ!!」

「私はアメトリィ・モライトです。宜しくお願いしますね」

「俺はシャウラ・ウエイドだ。グへへ」

順番にダグトリオ、ヘイガニ、チリーン、グレッグ。そしてようやく自己紹介が終わり列に並ぶ。スウィートはやっと……と密かに喜んでいた。そしてディラは満足そうな顔をしてから

「では、朝礼を始めるよ」

するとロードの部屋のドアが開き、ロードが前に出てくる

「親方様 一言お願いします」

とディラが言う。スイート達4匹はどんなことを言うのだろうか、と少しワクワクしていた。が、聞こえてきたのは…

「ぐう…ぐう…」

寝息。スイートは驚いてロードをもう一度見る。ロードは目を開けたまま立っていて、寝ているようには見えない。だがしっかりと寝息は聞こえる

疑問に思っていると他の弟子達が、ヒソヒソと話始めた

「（凄いよな…親方様…）」

「（実はああやって起きているように見えるけど…）」

「（目を開けて立ったまま寝てるんだもんなあ…）」

どうやらこれが日課のようだ。このギルド大丈夫か？とアルは少々気になってしまった

「ありがたいお言葉ありがとうございます 皆、親方様の言葉を肝に銘じておくだよー！」

ディラの言葉にどうやって、と疑問になる4匹。こんなに四匹の気持ち揃うのは凄い。するとやはり何事もなかったようにディラ

は進める

「それでは朝の誓い、はじめっ!!」

『はっ???』

ディラの言葉に4匹首を傾げる。これから何か始めようとしているのは分かるが、意味が全く分からない。うろたえる4匹を無視してギルドの全員は息を大きく吸った

『ひとつ！仕事は絶対サボらな！い！』

『ふた！つ！脱走したらお仕置きだ！』

『みつ！つー！皆笑顔で明るいギルド！』

「さあ、皆。仕事にかかるよ」

『おおー！ー！ー！』

スウィートとアルは気がついた。そういえばギルドの入り口の看板の『プクリンのギルド 探検隊 心得 十か条』のはじめの3つと同じということ。全く見ていなかったシアオとフォルテは何の事かわかっていないが

「で、あたし達は何する訳？」

フォルテがもつともなことを言う。するとスウィート達の様子に気がついたディラが

「お前達 そんな所でつつたつてないで来なさい」

と言い、梯子を上っていった。4匹は慌てて後を追った。梯子を上るとディラがは大きな板の前にいた。板にはたくさんの紙が貼ってある

ディラは4匹揃ったのを確認すると話し始めた

「ここは掲示板。依頼が貼ってあるんだ。最近…時が狂い始めているのは知っているよな？」

「ええ。そのせいで悪いポケモンが増えてるんでしょ？」

「あと…各地に不思議のダンジョンが広がってるんだよね」

フォルテとシアオが答える。何も知らないスイートは疑問府を浮かべながら、一生懸命考えた

(時って…時間のことだよね？狂い始めているって…どういふことなの…?)

スイートがモヤモヤしているなか、話は進んでいく

「そう。よく知っているな 説明も必要無さそうだな お前達には依頼をこなしてもらおう」

スイートはやっと考えるのを止める。依頼とはどのようなものなのか、スイートだけではなく3匹も気になっていた

「うーん…おっ、これがいいな」

ディラはシアオに紙を渡した。すぐにシアオは読み始めた

「え〜と…」わたくしバネブーと申します。実は命の次に大切な真珠をなくしてしまっただんです！それで探してみたのですがなんと！湿った岩場で真珠があったという情報が！でも怖くていけないんです…。なのでお願いしますっ！真珠をとってきて下さい！お願いしますっ！！」………「ってただの落とし物拾ってくるだけじゃん！！」

シアオは何処か不満そうな顔をする。ディラは「そうだが？」と平然と言った。アルはシアオから依頼書を取り、まじまじと見る。そして

「何が不満なんだ？シアオ」

「だって…探検とかしたかったっ」

「願望ばかり言うな。このヘタレ」

アルにぴしゃりと言われ、シアオは黙った。まだまだ不満がある、という顔だが反論できないようだ。ディラはとりあえず少々凍りついた空気で言葉を発する

「エー…まあ、依頼書どおりだ。湿った岩場に行つて真珠をとってきてくれ」

『はい』

4匹は声を揃えて返事し、湿った岩場へ向かうのだった

湿った岩場

入ってからはとりあえず順調に進んでいた。敵もそこまでレベルが高いわけでもないので苦戦せずに倒していった。今はB3階

「確か：B7階だったかしら？何もおきなればいいけどね」

とフォルテが呟く。確かに何もおきてほしくはない。このまま無事、依頼さえ達成できればよい。だが何があるかわからないので慎重にいかねばならない

「大丈夫でしょ。大体、一回目の依頼で何かおきるなんて…考えたくないよ」

シアオが笑顔でそういう。その通り、一回目で運悪く何かがおきるなどと思いたくない。もしも起こったならばどれだけ不運なんだ、とアルが考えていると、前にいたスウィートがいきなり…消えた

「えっ！！！？スウィート！？」

シアオがキョロキョロと辺りを見渡す。フォルテとアルも見渡すがスウィートの姿はない。呼んでも返事は返ってこない

「ええ！？早速なんかおこったあ！！」

シアオがうつろたえる。そしてスウィートが元いた場所に立った。するとシアオは一瞬で消えてしまった。アルとフォルテはその場所

を見る。そこには―

「ワープスイッチ……」

畏、ワープスイッチがあった。つまり、スイートとシアオは何処かにワープさせられてしまったということだ―

「嘘でしょ!?! なんて言った瞬間にこういう事がおきる訳え!?!」

フォルテが叫ぶ。確かにどうしてこんなタイミングピッタリで何がおこるのだ。誰かが仕組んだような展開だ。だがそんな事考えるよりもまずは2匹を探さなくてはならない。アルはフォルテのほうを向いて忠告する

「フォルテ。2匹を探すぞ。畏には気をつけるよ」

「分かってるわよー」

ポチツツツ

何か、嫌な音が小さく洞窟内に響いた。するといきなりフォルテの下から強風がまきおこった。アルは近くの岩にしがみついたがフォルテは咄嗟に反応できず、何処かに悲鳴をあげながら飛ばされてしまった

やっと風が止み、岩から離れる。先程のものは突風スイッチだろう。アルは状況を整理する。ついさっきまで4匹でいたはずだ。なのにこんな数分で全員バラバラになり、互いの居場所も分からなくなった。やはり、不運なのか―

アルは上を向いて小さく言葉を発した

「どろどろしてしなくなった」

アルの言葉は空しく、静かに洞窟内に消えていった

六話 朝礼とハプニング!? (後書き)

とつとと合流して下さい

アル「考えたのお前だろうが!」

フォルテ「そうよ!他人事みたいに言っで!とつとと合流したいのはこっちのほうよ!」

まあそうだけど…というか君ら運悪いよね

フォルテ&アル「煩いっ!」

…ゴメンナサイ(迫力負け)

七話 無知な奴はこれだから困る(前書き)

アル「このサブタイトルは…(汗)」

思いつかなかったんだよ…。本文を読んだら「奴」が誰か分かります

スウィート「えと…では本文どうぞ…」

七話 無知な奴はこれだから困る

(Side:スウィート)

…状況を整理しよう

まず、私達は依頼を実行するために『湿った岩場』に来た。そしてB3階までは順調に進んで。私はシアオの会話を聞きながら前を歩いて(歩かされて)た。けど、進んでるといきなりシアオ達の声が聞こえなくなつて、それに風景が変わつて。気がついたら皆がいない…っていう状況

…おかしいな。1回目でこういう事はおきないんじゃないか。たっけ？私、聞き間違えたのかもしれないなあ…

「それにしても…皆何処…？」

私はとりあえず進んでいるけど、会うのは敵ポケモンばかり。皆先に進んでるって事はないよね…？ないといいんだけど…。なんか不安…

私はとりあえず色々関係ない事を考えながらも進んでいった。

するとー

…我…し…こー…き…え…

「えっ？」

途切れ途切れな声が聞こえた。周りを見てみるけど誰もいない。もう一度周りを見てみたけど誰もいなかった

「空耳…かな…?」

誰もいないし、空耳と考えるしかない。少し気になったものの、考えていてもしょうがないし、もう何も聞こえないから進むことにした

暫く進んでいても敵ポケモンばかり。あれ…?私って…不幸なのかな?違つと信じたいけれど、それなら何でなかなか会えないのだろう?

またまた無駄なことを考えていると、黒と青の体をした何かが見えた。すぐに身構えたけどすぐに解いた。だってあれは…シアオだ!!私は駆け寄り声をかけようとする

「シアオ」

が、止めた。なぜなら…いきなりシアオが…消えたから。一瞬で。私の声、聞こえていないと思う。すぐに消えちゃったから…

「え…?どういふこと…?」

シアオがいた場所をしてみる。けれど何も無い。試しにその場所に立ってみるが何もおこらない。…どうなっているのだろうか…?

(Side:フォルテ)

「いたたた…。ったく…酷い目にあつたわ…」

あたしは少し痛むか体をなんとか起こす。飛ばされたときに強く打ち付けたようだ

にしても…誰よ、突風スイッチなんか仕掛けた奴は…。見つけたら絶対に灰にしてやるんだから…

というかあんな話をしたからかしら？1回目にしてこんなアクシデントがおこるなんて…。今頃アルが頭抱えてるのが目に見えるわね。今の状況を一言で表せれる自信があるわよ。えーっとね、最悪最低。我ながら完璧ね、うん。ってそんなくだらないこと考えてないで！

「探すか…」

あたしはとりあえず皆を探すことにした。ジツとしても意味ないしね。歩いてりゃ誰か1人くらい会えるでしょ。というか会えないと凄く困るんだけどね…

進んでいるとやはり敵ポケモンは襲ってくる。カラナクシは相性が悪いからあまり戦いたくないわね…。そんな事言っても出てくるもんは出てくるんだけど

「火炎放射が撃てるようになってるのが不思議ね…いつ覚えたっけ??」

便利だし、威力高いからフツ に使ってるけど。よく考えると不思議よね。あたしはとりあえず記憶を探ってみるが、技マシン使った覚えもないし…いきなり覚えた記憶もない。あたしは一体、いつ覚えたんだろうか？

「ん？あれは…」

あたしはちょっと遠くにいる見覚えある姿を見つけた。向こうも気付いたようで、手を振りながらこっちに近づいてくる

「フォルテー！無事だった？」

「ええ。シアオも無事そうねアルとスウィートは？」

と相手に話す。会話からして分かるだろう。近づいてきたのはシアオだ。なんか姿がほんのちょっと変わった気がするんだけど…気のせいかな

「会ってないよ。フォルテは？」

なんだ、会ってないのか。まあ、1匹見つけただけまだマシだろう。さて、シアオの質問にあたしも答える事にしよう。

「こっちもよ。会ってー…え？」

あたしは言葉をとめた。それは…喋っている最中にシアオが消えたから。ワープスイッチで消えた、あの時と同じように

あたしはすぐにシアオが元いた場所を確かめる。けれど何も無いし、立つても何にもおきない。ワープスイッチじゃない…？だとしたらなんなのだ

「やっぱりね…」

あたしはため息をついた。考えていたことが的中したから。シアオが絶対に面倒くさいことをおこす、って。流石はトラブルメーカーと言っべき存在。あたしは何故か關心していた。と、そこに

「あれ…？此処通ったかな…？」

不安そうな弱々しい声が聞こえた。振り向いてみると、オロオロしながらブツブツと何か呟いているスウィートがいた。あたしは大きな声で呼ぶことにする

「スウィート！！」

ビクツとスウィートは体を揺らしてから、恐る恐ると振り向いた。あれ…？大きな声をだしすぎたかしら…？だけどあたしを見たらパツ、と顔を明るくさせて駆け寄ったきた

「フォルテ…！！あれ？皆は？」

そういえば…スウィートが一番初めにワープしてつたから、皆バラになっちゃったこと知らないんだっけ。あたしはスウィートにこれまでの経緯を話した。勿論、畏の事もきちんと説明したわよ？

「スウィートは誰かに会わなかった？見たとか…」

とスウィートに尋ねるとスウィートは小さな声であつ、と呟いてから

「シアオを見たけど…いきなり消えちゃって声をかけられなかったんだ…」

「へ？スウィートも…？」

シアオは消えたり現れたりしてるわけ？何これ、ホラー？うわっ…考えたくない…

「フォルテも…？おかしいよね…。置じゃないと思うんだけど…」

「それはあたしも思うわ。でも…だとしたら何故、消えたのかしら…？」

あたしとスウィートは頭を悩ませるばかりだった

Side：アルナイル

探すのも面倒くさい。俺は岩に腰をかけて座って考えていた

何故こんな風に厄介事が毎回のように起きるんだ？…俺達の中の誰か、不幸を呼び寄せる奴が…。それともこれは偶然なのか？…必然というのは考えたもない

「…呪われてんじゃないのか」

ポツリと呟いてみる。返事など返ってくるはずもない。さっきから誰も来ないからな。敵ポケモンさえ来ない。それは非常に嬉しいのだが…仲間に会えないのは非常に困る
考えていたら眠くなってきた

「ふああ…眠い…。寝てたら来るか…？」

…そんな発言を試してみたが、なんか恐ろしい

フォルテに見つかったら「こんな時に何、呑気に寝てんよ！？」と怒鳴られて、叩き…いや、殴り起こされそう。シアオだと耳元で「起きて〜！〜！」などと騒ぎそうだし…。スウィートは普通に

起してくれるだろうけど。

…フォルテに見つかったら殺されかけないな。起きとくか…

でも暇なもんは暇だ。だからと言って下手に動くとすれ違いがおきそうだし…。ジツと待つとくしかなんだよなあ…

欠伸をしながら座っているといきなり、目の前にシアオが現れた。それで驚かない奴なんかいるか!?

「うおっつ!!??いきなり現れんなよっ!!心臓に悪いだろーが
!..!」

「へ!?!アル!?!??なんか知らないけどゴメンナサイー!?!..!」

落ち着け、俺!!シアオよりパニックしたらめちゃくちや恥ずかしいぞ!?

「アル、酷くない!?!」

コイツ…いつエスパーになったんだ…!!他人の心の中を読めるだど…!?!?

「…さつきから声に出してるって」

そう言いながらシアオにため息をつかれた。…コイツにため息つかれるとかめちゃくちや腹が立つんだが。一発、殴ってもいいのか?それとも電気技のほうがいいか?

俺は無意識に電気をためると、殴る準備をされていて。シアオがそれを見て青ざめた顔で「ごめんなさい、ごめんなさい!!」と一生懸命謝っている。…まあ、くだらない事だしいいか。殴らなくても(殴りたいが)

「ん…？シアオ、それなんだ」

シアオの首にまいてあるスカーフを指差す。こいつはきみどりリボンのスカーフにしてつけてたよな…？今シアオがまいているのは俺の記憶が正しければ…

「ああ、これ？なんか落ちてたからつけたんだ」

それは、ワープスカーフだ

「何つけてんだ、お前！！とっととそのスカーフはずせ！！」

「へ？なんでー」

ヒュッ…

遅かったー！ー！ー！は！ず！す！前！に！ワ！ー！プ！し！や！が！っ！た！よ、アイツ！！本気でトラブルメーカーだな、シアオは！！俺らのトラブルってシアオのせいでおこってんじゃないか！！？？

俺は内心、愚痴を漏らしていると

「あつー！ー！！いたいた、アル！！」

聞きなれている声が出た。振り返るとさっきの声の元、フォルテとスウィートがいた。探す手間が省けたのはいいが、一匹はついさつきワープしてっただぞ…

「あ、シアオ見なかった…？」

スウィートが恐る恐る尋ねてくる。フォルテは俺の返事など待たずに色々話してくる。その中に、気になるものがあった

「シアオが消えてさ…原因不明なんだよね」

「おい、フォルテ。お前原因分かるだろーが」

俺とシアオとフォルテは探検隊になる前に、道具の事を一通り学んだ。シアオは寝てたけど。フォルテは起きてたよな？ワイプスカーフの事も知ってるはず…。見た覚えが俺にはあるぞ…？が、フォルテは怪訝そうな顔をしてから

「はあ？急に消えられて罨でもないのに、原因分かる訳ないでしょ？」

…期待した俺が馬鹿でした。今度からシアオとフォルテには学習というものには期待しません。すみませんでしたね…

はあ、とため息をついてから、シアオがワイプスカーフをつけているせいで、ずっとワイプしているという事を説明した。スウィートは成る程、という風に納得していた。フォルテは「あんの馬鹿…!!」とシアオに愚痴っているが、俺はお前にも愚痴りたいが、今はシアオを探さねば

「まずシアオをどうにかしないとな」

「そうね。待ち伏せしてワイプしてきたところを捕まえる？」

どんな作戦だよ…それ。何時間かけて確保するつもりだコイツは…。俺は即、却下した。だが自分自身もいい案が思いつかないんだよな…

と頭を悩ませていると、スウィートが恐る恐る発言した

「あの…集まれ玉を使えば、早いと思うんだけど…」

『……………』

スウィートの発言に、俺とフォルテは固まった。…確かに、簡単な解決方法があったもんだな。なんで思いつかなかったんだろ…。俺も馬鹿なんだな…。フォルテとシアオほどではないが

「そういえば拾ったわね。スウィートと合流した後に。スウィートまだ持つてる？」

「うん。1個だけだけど…」

スウィートはそういうと集まれ玉を取り出した。後はシアオを確保する作戦だな

「じゃあ、スウィートが集まれ玉使ったら、俺とフォルテでシアオを捕獲ーでいいか？」

「うん」

「了解よ」

俺の提案に、2匹ともすぐに承諾してくれた。…後はシアオを捕まえるだけつと

スウィートが俺とフォルテに目で合図する。俺とフォルテが首を縦に振ると、スウィートは集まれ玉を投げた

(Side : 三人称)

ピカッッ!!

スイートが集まれ玉を投げた瞬間、光が放たれた。一瞬だが光が収まると頭に疑問府が浮かんでいるシアオが立っていた。まだワープスカーフを身に付けている

「よしっ！取るわよ！」

とフォルテが大きな声で言うと、アルとフォルテが走り、シアオの元に行く。シアオはようやく存在に気づいたようだが…今更だった

「あ、皆っつて、え！？何！？」

『大人しくしてろー！ー！！』

アルがシアオを押さえつけて、フォルテがスカーフを取る。傍観者という感じのスイートは、啞然とその様子を見ていた

「取ったー！！！」

フォルテがスカーフを放り投げる。するとアルはシアオを押さえつけるのを止めた。シアオはまだ困惑中だった

「アル、どういう事ー」

「一発、問答無用で殴らせてもらっわよ。これで反省しろっ!」

「え、ちよっ、待ー」

バツコーーーン!!!!!!

問答無用、本気でフォルテはシアオを殴ったようだ。お陰でシアオは5メートルくらいまで、ぶっ飛ばされた

「フォルテ…やりすぎ…」

アルが哀れんだ目でチラリとシアオを見てからフォルテに言う。フォルテはアルの言葉を無視して「スツキリした〜」などと言いなから体を伸ばしている。アルは大きなため息をついた

シアオはいたた…などと言いながら戻ってきて、フォルテに殴った理由を聞こうとしている…が、フォルテはシアオを睨みつけ、そっぽを向いた。シアオはアルとスウィートの「訳が分からない」という顔をしてきた

そんなシアオに対して、スウィートは苦笑いをしていて、アルは呆れた目でシアオを見ていた。そしてアルはとりあえず、シアオがワープしていた理由を簡単に話した

「ーってわけ。シアオ、お前今度から変なものを身に付けるな。つけたかったら俺かスウィートかフォルテに言ってからつけやがね。というかいつワープスカーフをつけた？」

「えーっとな。皆とはぐれてすぐ位かな。周りの風景が変わるからびっくりはしたけど。スカーフが原因だったんだ…」

「…お前のせいで俺らはめっちゃくちゃ苦労したんだけど。おかしいとか思わなかったのか？」

「全然。またワープスイッチ踏んだかな〜とか思ってたから」

アルとシアオの会話。結局はシアオの最後の言葉を聞き、アルがわざとらしい大きなため息をついて終了したが

スウィートはこの空気は不味い…と思い、発言することにした

「と、とりあえず依頼の真珠を探そう？ 私達の目的はそれなんだから…ね？」

『そつえばそうだったね（な）』

その言葉を聞き、このチーム（探検隊）は大丈夫か…と、スウィートが心配になったのは、本人しか知らない

後は問題なく（イガグリスイッチやぐるぐるスイッチなどに何度か引っかけたが）真珠の元にたどり着き、多少フラフラになりながらギルドに帰るシリウスであった……

ギルド

「ありがとつごぞいますっ！…って…大丈夫ですか…？」

『ええ…まあ…』

依頼人、バネブーはお礼を言ってからシリウスのメンバーの体を見て心配した。4匹はゲツソリとしながら答えた。体には傷がたくさんあり、様子からして全然大丈夫そうではない。が、本人達は「触れないでくれ！」的なオーラをだしているので、バネブーはこれ以上気にしない事にした

「エツト…これは報酬です！どうぞ」

バネブーが渡してきたのはタウリン、リゾチウム、ブロムヘキシン…それに2000ポケだった。スウィート以外はこれを見てから驚いた表情をした。シアオはバネブーの方を向き、大きな声で

「え！？いいの！？こんなに沢山！そして大金！」

と言った。バネブーは笑顔つを崩さず

「ええ。真珠に比べれば安いもんですよ。では私はこれで」

と行って去っていった。スウィートは何の事か分からず、ただただ首を傾げているだけだった。シアオとフォルテはハイタッチをしたりして喜んでいた。そこにディラがきた。ディラはニコニコしながら

「お前達、よくやったな えーと…お前達の分は…これくらいだな
」

と言つて渡したのは…2000ポケ。先ほどの一割だけだある

「えええええええ！！？！？こんだけっ！？」

シアオがとてつもない大きな声をだした。スウィートとアルは耳を塞ぎながら、『プクリンのギルド 探検隊の心得 十か条』の1つを思い出した

《とおー！！ 稼いだ賞金は皆で分けるよ！！》

きっとこれの通りだろう。知らないシアオとフォルテはディラに愚痴をもらして、ついにはディラに怒鳴られた。アルはあーあ…と他人事のように見てる。ディラは怒鳴り終わると梯子を降りていった

「あんの鳥…！！いつか絶対焼き鳥に…！！」

「フォルテ、いい加減にしろ…。大人げないぞ」

アルにそう言われると、フォルテはうっ、と言葉につまり何も言わなくなった（内心で愚痴を吐いているだろうが）。シアオは納得いかないような顔をしていたが

「皆さーん！！ご飯ですよ」

というアメトリイの声が聞こえると大喜びでとんでいった。残されたメンバーは同じことを思いながらシアオを追うように食堂に向かうのだった

（（シアオ…単純すぎ…））

こうして初依頼は無事終わったのだった…

七話 無知な奴はこれだから困る（後書き）

フォルテ「スウィートが聞いたあの声何？」

そのうち分かる（つか分からなきゃ困る）

シアオ「ねえ…結局「奴」って誰？」

（鈍感すぎだろ、コイツ！！）んー…考え方によっては1匹だけではないかもしれない…ね

シアオ「え〜…教えてくんないの？」

フォルテ「多分、あんたのことだと思っわよ」

（フォルテもそうだと思うけど…）

八話 謎の眩暈と声

初依頼が終わってから次の朝…。

ラドンが大声で起こしにきた。スウィートとアルは起きていたの
で耳を塞げたが、フォルテはやはり朝は機嫌が悪く、またまた火炎
放射を放った。その時シアオは寝ぼけていたので、ラドンをダンジ
ヨンに出てくる敵ポケモンと間違っ、はどうだんを容赦なく喰ら
わせたのだ。それからラドンが起こしに来る事はなかった。そのた
め次の日、シアオとフォルテは朝礼に遅刻して、デイラに何十分も
のお説教をくらったのだ。

シアオとフォルテは次からなんとか早起きする事を決めたのだった

それから数日後―

「今日はお前達にはお尋ね者を捕まえてもらおう」

いつもと違う、右の掲示板につれてこられたシリウスメンバー。

右の掲示板には沢山のポケモンの絵が貼ってあった。そこでデイラ
に先ほどの言葉を言われたのだ。スウィートは「お尋ね者」という
単語に首を傾げていた

「お…お尋ね者おおおお！！！！？？無理！絶対無理だから！！不可
能！！！」

シアオがいきなり大きな声をだして叫んだ。内容はとてもネガテ
イブなものだ。シアオらしいと言えばシアオらしいが。そんな発言
に黙っている者はいなくて―

「いきなり諦めてんじやないわよっ！！だからあんたはいつになっ

ても成長しないの！！分かる！？」

とフォルテがシアオに向かって大声で怒鳴った。ギルドではもう聞きなれたようなので振り向く者などいないが

「お尋ね者といってもまだ弱いコソドロとかを捕まえてもらうだけだから安心しろ」

「安心！？何が安心なん？」

「あんたはちょっと黙ってなさい！！」

デイラの言葉にいちいち反応するシアオを、フォルテは尻尾で殴って黙らせた。その為シアオは気絶したが。デイラもこの光景に慣れたようで、シアオに構わず話を続ける

「まあ一応準備はしといたほうがいいな……。レニウム！！いるか！？」

「は、はい！！なんでゲスか！？」

デイラが大声で呼ぶと、梯子からレニウムが上ってきた

「こいつらにトレジャータウンを案内してやれ」

「わ、分かりました！」

とレニウムが言うとデイラは梯子を降りていった。スウィートはまたもや聞きなれない単語に首を傾げている。レニウムを見ると体が微かに揺れていた。変だな、と思いつつアルが声をかける

「あ…あの…レニウム先輩？」

「うっ…すみませんゲス…つい嬉しくて…ぐすっ…」

と言いながら何故か泣いているレニウム。訳が分からずスウィー
ト達はまたまた首を傾げる

「実は…後輩が出来たのが…初めてで…ゲスッ…だから嬉しいんゲ
ス…」

つまりスウィート達に来る前はレニウムが一番下だったというわ
けだ。それだ初めて後輩が出来たので泣いている…という感じ。ス
ウィート達は成る程、と納得する

「じゃあ案内頼みます。レニウム先輩」

「了解ゲス！と…その前に…シアオの意識がないような気が…」

あつ、と声をだし、シリウスメンバー3匹がシアオの方を見る。
見事にまだ気を失っていた。スウィートはとりあえず揺すって起し
てみる。が、無意味

「仕方ないわねー…置いてく？」

「しゃーねーな…。俺とシアオは残ってるからフォルテとスウィー
トは行ってきてくれ…」

フォルテがそういうとアルがため混じりに言った。が

「はっ！！？？僕なんで気を失って…！？」

「今更起きないでくれるかしら!？」

「ちよっ！待てフォルテ！！また気絶させる気かああ！！」

シアオが飛び起きた。フォルテはまた殴りかかるうとしたがアルに静止させられた。シアオは驚いた表情をし、スイートとレニウムは苦笑いをしていた

トレジャータウン

「此処が…トレジャータウン…」

スイートは初めて来た場所なので目を輝かせながらトレジャータウンを見る。沢山のポケモンがいて建物が建っている。凄いなあ、と感心しながらスイートはトレジャータウンを見渡す

「あ、でもトレジャータウンの事なら僕らも分かるよ。何回もきたから」

シアオが得意げに話す。そして指を指して説明し始めた

「えーつとね。まずここはヨマワル銀行。ポケを預けられるんだ。あそこはエレキブルのれんけつ店。技をれんけつ出来るよ。今はエレキブルはいないみたいだけど…。あそこはカクレオン商店。道具を買ったりできるよ。で、その奥にあるのが、ガルーラの倉庫。道

具を預けることができるから、大事なものは預けてたほうがいいよ」

とシアオが説明を簡単にしてくれた。スイーツにとって多少何か分からない単語もあったが、そこについてはスイーツはあえて聞いたりしなかった

「よく知ってるゲスね。あっしがいなくても大丈夫そうでゲスね。じゃああっしは依頼選ぶのを手伝うゲスよ」

「え！？ホント！？ありがとう！」

「じゃあ、あっしは先にギルドに戻ってるゲスから。準備が出来たら出来たらあっしに声をかけるゲスよ」

シアオは満面の笑顔でレニウムにお礼を言った。レニウムは少し照れたような感じでギルドに戻っていった

「じゃあ…カクレオン商店から行くか」

とアルが言い、シアオとフォルテもついていく。辺りを見回していたスイーツは気付き、追いかけてようと振り返った。その時――

ドンツツツ！！

「きゃ…！？」

「わっ…！！」

スイーツは誰かとぶつかった。そのせいでスイーツは尻餅をついてしまった

「ごめんなさい！大丈夫!？」

話しかけてきたのはエーフィ。恐らくスウィートとぶつかったポケモンだろう。心配そうにスウィートを見て謝っていた

「ご、こちらこそ…すみません…」

スウィートは急いで立ち上がりエーフィに謝る。どこかに隠れたいが隠れる場所がなくスウィートは俯いてしまう

「ごめんなさいね。怪我とかない?」

「あつ…大丈夫です…」

気遣ってくれているのに俯いているのも悪いなあ…と思い、勇気を出して若干俯いているが顔を少し上げる。エーフィは優しい笑みで微笑んだ

「私はフィネスト・イレクレス。フィーネと呼んで。貴女は?」

「えつと…スウィート・レクリダです…」

「え…?スウィート…レクリダ…」

フィーネはスウィートの名前を聞いた途端、何か考えているような顔をした。スウィートは何も喋らなくなったフィーネに首を傾げながら声をかける

「あの…フィーネ…さん?」

「えっ。あ、ごめんなさい。つい考え事を…。かわいい名前ね。宜しく、スウィートちゃん」

「あ…はい。宜しく願います…！」

フィーネは笑顔に戻り、ニッコリと微笑んでくれた。スウィートはつられて笑顔になる。フィーネはスウィートの持っているバッチに目をむけた

「そのバッチ…探検隊なんだあ。スゴイ！最近だったの？」

「はい。つい最近だったばかりです。チーム名はシリウスっていますます」

フィーネは関心したようにスウィートを見た。スウィートは笑顔が似合うポケモンだなあ、とフィーネと話していて思った。するとフィーネを呼んでいる声が聞こえてきた

「あっ、連れが呼んでる！ごめんね！また今度！じゃあね」

「はい！また」

フィーネはブラッキーの方に走っていった。カップルかな？などと思いつつも、早速トレジャータウンで知り合いが出来たことを喜ぶスウィートだった。そして、大事な事を思い出す

「あっ！忘れてた…！皆は…」

「此処にいるよ。スウィートなかなか来ないんだもん。心配した

よ？」

といきなりシアオが現れて、スウィートは本当に小さな悲鳴をあげた。シアオの後ろにはアルとフォルテもいた。迷惑かけたなあと思いつつながらアル達が歩き出したので、今度は置いていかれないようについていく

「こんにちは。イオラさん、シルラさん」

アルがカクレオンに挨拶する。口調からして知り合いのようだ

「おお！3匹とも！1匹増えたねえ。今は仲良し4匹組かい？」

「イオラさん、いつから俺らがそんな組作っただんですか」

アルが緑色のカクレオン、イオラにツツコミをいれる。イオラは軽く笑った。スウィートはシアオの後ろに隠れ中…

「スウィート…挨拶ぐらいして…」

とフォルテが呆れたように言う。スウィートがシアオの後ろから出てきて挨拶することは無理だったが、小さな声で挨拶はできた。聞こえているかどうかは別だが

紫色のカクレオン方はシルラというらしい。イオラとシルラは双子でイオラが兄のようだ。イオラはスウィート達がつけている探検隊バッチに気付く

「それ探検隊バッチだよな？探検隊になったんだね！おめでとう！」

「よかったね！憧れの探検隊になって！」

「ありがとう！イオラさん、シルラさん！」

シアオは満面の笑みでお礼を言った。イオラもシルラも嬉しそうだ。そしてイオラが思い出したようにアルのほうを向く

「で、今日は何を買いにきたんだい？」

「えっと…オレンの実と、念のために集まれ玉で」

「ちょ！もう大丈夫だってば！ねえ聞いている！？」

アルが頼むとシアオの言う事は無視して、イオラがオレンの実と集まれ玉を持ってきた。200ポケピツタリで昨日の依頼も報酬は全て使い切った

シアオはふてくされた顔をしたが、次またシアオがトラブルを起すかもしれないので、スウィートとフォルテは買うことを反対はせず、むしろ賛成していた。そして少し談笑していると―

「すみませーん！！！」

と元気な声とともに、お店にマリルとルリリが走ってやってきた。まだ幼い子どものようなだ

「アイオ君、サファイアちゃん！リンゴかい？」

「はい！1つくださいー！」

イオラはアイオとよばれたマリルに袋を渡す。アイオがポケを手渡すと2匹とも笑顔で元気よく

『ありがとうございます！では！』

そういつて去ってしまった。スイートはえらいなあと関心している。

「あの2匹、お母さんの体が悪いから、代わりに自分達でリンゴを買いに来るんだよ」

「へえ…大変なのね…」

イオラがそう話すと、フォルテが少しだけ顔を歪めた。確かに大変だな、などと皆が思っている。

「すみませーん!!」

と先ほどの兄妹が戻ってきた。スイート達が首を傾げていると、アイオは袋からリンゴを取り出した。

「リンゴが1つ多いんです!」

「私達こんなに買ってません!」

会話の内容からすると、この2匹はリンゴが1つ多いのに気付かずわざわざお店に返しに来たのだ。その2匹に4匹はさらに関心した。

「それは私からのおまけ。2匹で仲良く食べるんだよ」

「本当!?ありがとうございます!」

ルリリ、サファイアが嬉しそうにお礼を言う。とても可愛らしかった

「ありがとうございます！サファイア、いくよ」

「あ、うん！！」

アイオが進んだので、サファイアも続いこうする、が

「きゃっ！？」

石につまずいて転んでしまった。その拍子にサファイアが持っているリンゴがスウィートの足元にコロコロ…と転がってきた。スウィートは足元のリンゴを拾って、転んでしまったサファイアの方に近づいた

「大丈夫…？気をつけてね」

多少声は弱弱しかったが、スウィートはサファイアに声をかけリンゴを手渡す。サファイアはニッコリと笑顔を向けて

「ありがとうございます！それでは」

と言ってアイオを追いかけていった。可愛かったなあ、とスウィートが心の中で思っている

「うっ…！？」

突然、強い眩暈がスウィートを襲った。スウィートは倒れまいと何とか踏ん張るが、それが精一杯だった

「偉いわね〜関心しちゃうわ」

「ホントだよ。礼儀もすごい正しかったし…」

シアオ達の会話が耳に入らない。するとトレジャータウンと景色が見えなくなり、視界が真っ黒になってきて、音も聞こえなくなってきた。その時だった

“ た…助けてー！ー！！！！ ”

(えっ……！?)

「ト…スウィート？どうかしたか？」

目を開くと心配そうにアルがスウィートを見ていた。スウィートは目を見開いた。何故なら辺りは先ほどと同じように賑わっており、さっきの悲鳴が聞こえた場所だとは思えないものだったから

(あんまり眩暈が強かったから…気のせいかな…。そうだよ…)

「大丈夫、なんでもないよ」

スウィートは笑ってみせる。するとアルは心配そうな顔をするのをやめた

「じゃ、もう行きましょ」

フォルテの声とともに、イオラとシルラに一声かけてから、スウィート達も歩き出す。するとアイオとサフィアと、鼻が長く黄色の体をしたスリープと一緒にいた。シアオは声をかけてみる事にした

「どうかしたの？」

「あつ…先程の…えつと…」

アイオは名前が分からず言葉に詰まってしまう。シアオは何故言葉を止めるか分からず首を傾げた。いつまでたってもシアオは名乗りそうにないのでフォルテが助け舟をだした

「あたしはフォルテよ。貴方達はアイオとサフィアだったかしら？」

「俺はアルナイル」

「ス、スウィートです…」

「あつ…僕はシアオだよ！で…何してたの？」

今頃シアオも気がついたようだ。全員が自分の名前を言った

「実は僕ら…落とし物を探していて…。そしたらこちらのウェーズさんが…」

「落とし物を見かけたって！それで一緒に探してくれるの！」

と嬉しそうな顔をしながら説明してくれた。フォルテはチラリとスリープのウエーズを見て

(うーん…見た目凄く怪しいんだけど…。やっぱり見た目だけで判断しちゃいけないのかしら…)

などと考えていた。ウエーズは微笑んで

「君達みたいな幼い子が困っているのに、放っておけないですよ」

と言った。その時スイートは、薄々フォルテと同じようなことを考えていた

「では僕らはこれで…」

「うん、バイバイ!!」

シアオは笑顔で手を左右に振った。そしてアイオ達が行こうとしたとき、ウエーズとスイートがぶつかった

「おっと…これは失礼」

「い、いえっ。こちらもすみませんでした!」

スイートは深々と頭をさげて謝った。ウエーズはそのままアイオ達の方向へと歩いていった。今日はよくポケモンとぶつかる日だなあ…などと考えていると

「っ!?!ま…またっ…!?!」

あの強い眩暈が襲ってきた。またスウィートの視界が真っ暗になっ
ていく

今度は映像も見えた

場所は山の頂上みたいで、サファイアとウエーズしかいなく、アイ
オがいない。サファイアは怯えて体を震わせ、涙を零している。ウエ
ーズは先程の優しそうに微笑んでいた同一人物とは思えないくらい、
悪い笑みを浮かべていた

“言うことを聞かなければ痛い目にあわせるぞ!!”

“た…助けて…!!”

「…！サファイアちゃんが…！」

「ス…スウィート？」

黙り込んでいたスウィートがいきなり声をあげたので、シアオ達
は驚いた表情をしてスウィートを見る。だがスウィートはそんな事
どうでもいい状況だった

「サファイアちゃんが危ない…。助けにいかないと…!!」

「スウィート…？本当に大丈夫？」

シアオが心配そうにスウィートを見る。スウィートはシアオを気にせず、先程の映像の事を3匹に話した。すると3匹は驚愕の表情をしたが

「でも…ウエーズさん…悪いポケモンには見えなかったよ？」

「そりゃ…見た目的には怪しかったけど…」

「疲れてるんじゃないのか？だから見えた…とか」

シアオ、フォルテ、アルの順にそれぞれの意見を述べられた。確かに悪そうなポケモンには見えなかった（見た目で疑ったが）。それに最近は探検隊の依頼などで疲れているかもしれない

（…違う…のかな…）

「レニウム待たせてるし行きましょ！ね！」

フォルテはスウィートの体をグイッと押した。スウィートは押されるがままにギルドの方にモヤモヤした気持ちで向かうのだった

ギルド

「あっ！準備できたゲスか？」

「うん！じゃあ選ばー」

「掲示板を更新します！危ないので下がってくださいー！」

シアオの言葉の途中でサイレン音がなり、声が聞こえる。4匹とも聞き覚えのある声だった

バンツツツ！！

「きゃ！？」

「ふえ！？」

「な、何！？」

「うわっ！？」

掲示板がひっくり返ったとともに、スイッチト、シアオ、フォルテ、アルの順番で小さな悲鳴をあげた。レニウムは平然としている

「あ、あの…これは…」

たじたじになりながらも、スイッチトがレニウムに尋ねる

「えっとゲスね…。掲示板の情報を更新してるんゲス。壁がひっくり返ってる間にフィタンが情報を書き換えるんゲスよ。普通に見たら地味かもしれないゲスが、フィタンはこの仕事に誇りを持っているし、とても重要な作業なんゲス」

とレニウムが詳しく説明してくれた。説明が終わったと同時に

「更新終了！危ないのでさがっていて下さいー！」

バンツツツ!!

次は4匹とも驚かなかつた。というより仕組みに関心していた

「じゃあ選ぶゲスよ」

「つ、強そうなのはやめてね…!?!」

分かつてるゲス、といつてお尋ね者を選ぶとするレニウム。フォルテはあまりの根性のなさにシアオを睨んでいた
レニウムが選んでいる間に 스위트はお尋ね者ポスターを見た
すると、信じられないものを見てしまった

「う…嘘…」

「スイート、どうした？」

「い、1番…左端…!?!」

スイートの言うとおり、掲示板と左端を見る。そこには先程会ったポケモンの似顔絵と名前が書かれていた

《お尋ね者 ウェーズ・テビイグ》

「なっ…!?!あいつ…お尋ね者だったのかよ!?!」

「急がなきゃ…!?!サファイアちゃんが…!?!」

そういつと 스위트は1番に駆け出していった。アルがその後

に続き、後からフォルテとシアオが駆け出していく

「ど、何処に行くんゲスかああ!?!」

「ごめん、レニウム! ちょっと緊急事態!」

レニウムに答えになっていない返事をしてシアオは梯子を上った

交差点

ギルドの階段を下りてすぐ、アイオがオロオロとしながらあたりを見渡していた。やはりサフィアとウエーズはいない

「アイオ君?! サフィアちゃん達は?!?!」

走ってきたため少しだけ息が切れているスイート。アイオはすぐにスイートに気付き、状況を説明してくれる

「あつ… スweetさん! じ、実は僕が目を見離した際にウエーズさんがサフィアを連れて行っちゃて…!」

「何処に行ったか分かるか!?!」

「は、はい!?! こっちはです!」

アルがそう言うとアイオはすぐに駆け出した。4匹は後を追う

(サファイアちゃん…!!無事でいて!!)

スウィートはそう願いながらアイオについていくのだった

八話 謎の眩暈と声（後書き）

今回は早めに更新できました！

アル「んな事どうでもいい！！こっちは大変なんだよ！！」

スウィート「そうです！それどころじゃないんです！」

スウィートまで…（汗）とりあえずお落ち着こっ…？

アル&スウィート『無理！！』

……（汗）

九話 秘められし力（前書き）

さて、アクアがずっと楽しみにしてました！

本編どーぞっ

九話 秘められし力

トゲトゲ山

「こ、ここです！此処でウェーズさんがサファイアを連れていっちゃったんです！」

アイオに案内された場所は、名通り地面や岩が鋭くがっている山、『トゲトゲ山』だった。此処もダンジョンで、ウェーズは此処でサファイアを連れて行ったらしい。スウィート達は移動しながらもアイオにウェーズがお尋ね者ということ伝えておいた

「アイオ君。貴方は此処で待っていてね」

とスウィートがアイオに向かって言う。が、大切な妹が攫われたというのに待っている、と言われても、すんなりと従うことが出来ない。やはりアイオにも抵抗があり「で、でも…」と口ごもってしまふ。そんなアイオにスウィートが困った顔をしていると

「お尋ね者退治に、一般のポケモンを巻き込む訳にはいかないんだ。分かるか？」

とアルが言った。厳しい言葉だったが、口調は優しくかった。アイオは少ししてから小さく頷いた

「よし！じゃあ行こう！！」

シアオの言葉とともにスウィート達はトゲトゲ山へと入っていった

「っ…強いね…。ここまで苦戦するなんてーうわっ」と！

シアオが独り言を呟いていると、ドードーがつつくと背後から攻撃してきた。それを間一髪でシアオは避ける。そしてスイッチは隙について攻撃する

「体当たり!!！」

ドードーは咄嗟に避けられず、まともに体当たりを喰らった。だが、やはりレベルが高いので一撃では倒れない。スイッチはすぐさま身を退く。そこからー

「止めだ！電気ショック!!！」

アルがドードーに向かって電機ショックを浴びさせた。流石に効果抜群なのでドードーも倒れた

「凄いね…アルとスイッチ。コンビネーション、バッチリだったよー！」

シアオが率直な感想を2匹に言った。スイッチは褒められたのに少々照れていたが、アルは呆れ顔で少しため息混じりで

「シアオ…。お前はポーっと突っ立たないでくれ。危なっかしい」

と言った。その発言のためにシアオの顔は少々ひきつつたがその頃、スウィートは全く別のことを考えていた

(あの映像と声……。場所は どう見ても此処だった。それにサファイアちゃん が連れて行かれて、そんなに時間はたっていないはず……。だとしたら私が見たのは……。未来？)

「スウィート！何ボサツとしてんの！早く先に進むわよ！」

考えごとをしていたら突然フォルテの声が聞こえた。スウィートは驚いて体を少し揺らしてしまった。そして進もうとしている3匹を慌てて追いかける

少し歩いていると、アルがポツリと言葉を漏らした

「無事だといいいんだが……」

「そうね……。相手はお尋ね者だもの。何しでかすか分からないわね」

フォルテも意見に賛同する。シアオはお尋ね者、という単語を聞いて一瞬顔をこわばらせた。その時アルとフォルテが丁度シアオを見たのでシアオは慌ててスウィートに話を振る

「ス、スウィートはどう思う？」

「私は……許せない、かな」

シアオ達は少し驚いてスウィートの表情を見てみると、少しだけ怒っているような表情をしていた。スウィートは気にせず言葉を続ける

「あんな小さな子を平気で騙して…。最悪なポケモンだと思う」

それだけ言うとスウィートは黙ってしまった。シアオ達もスウィートがそんな事を言うと思っていなかったようで、言葉を発しなかった

トゲトゲ山 頂上

頂上に行くと、そこにはサフィアとウエーズがいた。サフィアは「ウエーズさん、落とし物は何処？」

とキョロキョロと周りを見渡す。ウエーズは少し間が開いてから喋った

「落とし物は、ここにはないよ」

「えっ…？どういふこと…？」

ウエーズの言葉にサフィアは戸惑う。ウエーズの顔を見ると、先程まで優しそうな顔をしていたのが嘘のように消え、邪悪な笑みを浮かべていた。サフィアは兄の近くに寄ろうとしたが、周りを見渡しても、兄は何処にもいないのに気がついた

「お…お兄ちゃんは？後から来るよね…？」

「お兄ちゃんも来ない。実は、俺は…お前を騙していたんだ」

「えっ？」

サフィアは恐怖を覚える。ウエーズはそのまま言葉を続ける

「それより頼みがあるんだ。お前の後ろに…小さな穴があるだろう？」

ウエーズが指をさした先にはとても小さな穴があった。その穴の大きさはサフィアが入れそうなくらいの穴で―

「そこには…ある盗賊が宝を隠したといわれているんだ。だが、俺の体では穴に入れない。だからあそこに入れそうなお前を連れてきたんだ」

「ひっ…お兄ちゃん…！」

ウエーズの迫力に、サフィアの目にだんだん涙が溜まってくる

「大丈夫。言うことさえ聞いてくれれば帰してやるよ」

恐怖でサフィアの目から涙がポロポロと零れ落ちた。ウエーズは気にせず、更に脅そうとサフィアに一步近づく

「お…お兄ちゃあああん…！」

サフィアはついに恐怖からの逃げたさに、元きた道を引き返そう

と走った。だが、それに気付いたウェーズは先回りをして、サファイアの逃げ道を塞ぐ

「大人しく言うことを聞いてくれれば帰すといっているだろう!!
言うことを聞かなければ痛い目にあわせるぞ!!」

「た…助けてー!!!」

「そこまでよ!お尋ね者ウェーズ!!その子から離れなさい!!」

サファイアが叫んだ後、スウィート達4匹がでてくる。先程の声はフォルテのものだ

「探検隊だ!お前を確保する!!」

アルが探検隊バッチを見せて怒鳴る。ウェーズはバッチを見て驚いた顔をした

「な、何故探検隊が…!!どうしてここが分かった!??」

「そんな事どうでもいいから早く離れて!!」

既にスウィートも少し怒っていて、ウェーズに思いつきり叫んだ。ウェーズはまずい、という顔をしたが、シアオの体が震えている事に気がついた

「ん?お前…そうか!探検隊といっても新平の探検隊か!!ビビらせやがって!!お前らごときに俺が捕まえられるかな!??」

ウェーズは戦闘態勢をとった。スウィート達も身構える

「シアオ！怖がってたって変わらないよ！頑張って！！」

「う…うん！！」

スウィートの言葉で気合を入れなおすシアオ。それを確認するとスウィートは考えた

（まずは…相手がどういう行動をとってくるか…。それに、サフィアちゃんを安全な所に連れて行かなきゃならない…）

「アル、シアオ。とりあえず攻撃を仕掛けて。相手の気が逸れている間に、フォルテはでんこうせっかでサフィアちゃんを安全な所に連れて行って」

スウィートが作戦を言うと、3匹がまず動く

「はどうぞだん！！」

「電気ショック！！」

シアオとアルが同時に攻撃する。するとウェーズは簡単に攻撃を避けた。スウィートはそれを見てから動く。それを見かねてフォルテも動き、でんこうせっかで近づいた

「たいあたり！！」

「でんこうせっか！！」

すぐに攻撃が来るとは思わない、そう思い攻撃すると、ウェーズ

は簡単に避けた

フォルテはそのままサフィアを救出することが出来たが、フォルテの攻撃を避けようとしなかったウェーズに違和感を覚える。まるでフォルテが攻撃ではなく、サフィアを救出する事がわかっていたようなー

とりあえずフォルテはサフィアの様子を確認する

「大丈夫？怪我はないかしら？」

「は、はい……」

「そう。危ないからあそこの岩陰に隠れていて」

ニコリとフォルテはサフィアに微笑んだ。サフィアは少し安心したようで、岩陰に隠れた

その頃、スウィートは急いでウェーズから距離をとり、態勢を立て直す。簡単に避けられた原因を考えようとする、アルが気付いたように声をあげた

「特性の予知夢か……!!」

「そうさ。お前らがいくら攻撃しようが俺に攻撃はあたらな！残念だったな、催眠術！」

とウェーズはニヤリと笑うと、催眠術をシアオにかけた。シアオは急で避けられずに催眠術をくらってしまった

「あっ……シアオ！」

「カゴの実があつたはず…!!」

「させるか!!金縛り!!」

シアオを起そうとしてカゴの実をアルが取ろうとすると、ウエー
ズがアルの動きを封じた。それと同時にフォルテが戻ってきた

「ちょ…シアオなんで寝てんのよ!アルも何突っ立てるのよ!」

「フォ、フォルテ…。相手の技だよ!!催眠術と金縛りを…。相手の
特性は予知夢…」

スウィートがフォルテにそう説明すると、フォルテが納得したよ
うな顔をした

「じゃあ…どうすれば…」

「ポーっとしていいのか!?ねんりき!」

「きゃっ!?!」

スウィートとフォルテは咄嗟に動けず、まともにねんりきを喰ら
ってしまう。ウエーズはシアオとアルにもねんりきをくらわした

(まずい…。どうにかしないと!!こんな…悪党に負けるわけには
…!!…)

スウィートがそう考えた時だった

《…しゅ。あやつを倒すだけの、力が必要か?》

「えっ？」

頭に誰かの声が響いた。思わず驚いて辺りを見渡すが、誰もいない。ウエーズやフォルテは変に思いスウィートを見る

《とりあえず答える。あやつを倒すだけの、力が必要なのか？》

スウィートはどう答えるべきか迷った。がすぐに状況を理解すると、声に答えた

(…うん。必要な…。あのポケモンを倒すだけの、力がー!!)

《……承知した。ならば、力を貸そう》

スウィートは体に違和感を覚えた。懐かしいような感覚が自分を覆う。頭の中に、いろんなものが入ってくる

「フォルテ。2匹を連れて、安全な場所に行つて」

とスウィートが言うとフォルテは戸惑ったが、でんこうせっかでアルとシアオの元に行き、2匹とともに移動した
ウエーズはクククツ…と怪しい笑い方をした

「1匹だけで勝つつもりか？3匹でも一発も俺に攻撃をあてられなかったのにー」

「ちよつと、黙つて」

スウィートは低い声で、呟いた。ウエーズは先程と様子が違うス

ウィートに驚き言葉を止める

(一撃で…決める)

「…こんな事をした自分に、反省してね」

そう言うとスウィートは、一気に息を吸った

「ムーンローダー月下咆哮!!」

スウィートは高い声をだして声をあげた。するとそれと同時に紫色のはかりが波のように広がっていく。ウェーズは避けようとするが、全体攻撃で避ける場所がない

「ぐっ…!?なんだ、これは…!?」

波に当たると苦しそうにウェーズは顔を歪めた。アル達も当たったが何ともない

アルはようやく動くようになり、少々痺れる体を動かす。フォルテはカゴの実を出してシアオに食べさせる。するとシアオはうっすら目を開いた

「ん…?フォルテ…アル。はっ!?お尋ね者は…」

「あそこだ。スウィートが戦ってる」

アルに教えられ、シアオはスウィートの方を見る。シアオはスウィートの異変に気がつき、フォルテとアルに問う

「ねえ…。スウィートの目…真っ黒になってない？いつもなら茶色混じってるのに…」

シアオにそう言われ、フォルテとアルも確認する。確かによく見ると目が真っ黒になっている。本人は気がついていないようだが

「にしても…この技はなんなんだ？見たことも、聞いたこともない」

とアルが怪訝そうな顔をする

スウィートは技を放つとき、“月下咆哮”^{ムーンロアー}と言った。だがシアオもフォルテも、3匹の中で特に物知りなアルでも聞いたことのない技だった。色から見て、悪タイプの技だろう。だとすると、ウエーズにはかなりのダメージが与えられている

するとスウィートが攻撃を止めた。同時に波も消える。ウエーズはかなりフラフラとしていた。スウィートは止めの技名を口にした

「悪の波動…！」

「なっ…！！ぐああああ…！」

スウィートが放った一撃を避けられず、ウエーズは悲鳴をあげてドサリと地面に倒れた。もう立ち上がりそうにもなかった

「やった。勝った…」

ウエーズが倒れたのを確認して、スウィートはホッと息をつく。
するこ

《…我が表に出ているのは、もう限界の様だ…》

とスウィートの頭の中に、またあの声が響く。かなり辛そうでど
んどん声小さくなっていく。まだ聞きたい事があるのに…、とス
ウィートは焦る

「ま、待って…！貴方は、誰なの…！？何処にいるの…！？」

《悪いが、今は時間、がない…。1つは…答えておこう。我は、す
ぐ傍に…い、る…》

(すぐ、傍にー？どういう事…！？)

《時間の…だ。ま…会、おう…》

「ま、待って…！まだ聞きたいことがー」

体の違和感が消えた。それと同時に懐かしい感覚も消えた。スウ
イートは急に力が抜けてしまい、地面に崩れ落ちた

「スウィート！大丈夫！？」

フォルテが慌てて駆け寄ってくる。シアオはサファイアを連れてき
て、アルはウエーズを見張っていた。スウィートは小さく「大丈夫
安心して力が抜けただけ」と答えた。スウィートの目を見ると、い
つもと同じ、茶色が混じっている黒い目になっていた。するとアル
が近づいてきて

「とりあえず戻ろう。こいつに目を覚まされたら面倒だ」

と言った。こいつとはウエーズのことである。フォルテはスウィートの体を支えながら、アルとシアオはウエーズを引っ張り時々サフィアの様子を見ながら、山を降りた

山を降りると、何故かジバコイルとコイルが数匹いた

「ハジメマシテ。私ハ保安官ノ、ジバル・オフカートト申シマス。才尋ネ者、ウエーズノ確保アリガトウゴザイマス。報酬ノ方ハギルド二届ケテオキマスノデ」

とまあ、なんか挨拶する間もなく、ジバルはウエーズを連れて行った。ウエーズは多少反省しているように見えたスウィートは満足していた

「あ、サフィアー!!」

「お、お兄ちゃああん!!怖かったよう…!!」

「ごめん…!サフィア、怖い目にあわせて…!!」

感動の再会を黙ってみる4匹。すると暫くしてからアイオが4匹の方を向き

「シリウスの皆さん…本当に、ありがとうございました!」

と深々と頭を下げた。サファイアも頭を下げる。シアオは笑顔で

「いいよ、別に。僕らはやるべきことをしただけだし…。2匹はもう帰りなよ。お母さんが心配してるだろうから…」

「はい…。本当にありがとうございました。それでは!」

「シリウスの皆さん!ホントにありがとう!」

2匹はそういうと歩いて帰っていった。スウィートはそれを見送るとドツと疲れが体にでてきた。そして、そのまま近くの岩にもたれかかった

「さーて…帰るわよーってスウィート?どこか痛いの…」

何も反応せず岩にもたれかかっているスウィートを変に思い、フォルテは顔を覗き込みながら声をかけた。が、フォルテはスウィートを見て苦笑してしまった。アルは首を傾げながら

「どうした?フォルテ」

と尋ねた。フォルテは困ったような笑顔で

「疲れて寝ちゃったみたい」

と答えた。スウィートは規則正しい寝息をたてて寝ていた。あれだけ頑張ったのだから無理もないか、と3匹は納得し、アルとシアオが交代でスウィートをおぶって帰る羽目になった

ギルドに帰って報酬をディラから貰うと、たったの300ポケだ

つ
た
と
か
…

九話 秘められし力（後書き）

シアオ「で、アクアはなんで楽しみだったの？」

オリ技、とあの声だすのが楽しみで（笑）

アル「あの声…結局誰か分からずじまいだな」

ん〜。そうだね。いつかわかるよ、いつか

シアオ「アクアってそれ多くない？」

き、気のせいだよ！！

アル&シアオ（（わかりやすい……））

え〜と、また誤字があったら指摘お願いいたします！

アル「自分で確かめろよ！！」

シアオ「いい加減にしてよ！！」

十話 恐怖の依頼（前書き）

もう十話……。あと少しで始めてから一ヶ月かあ

アル「これからアクアの飽きっぱさが出なきゃいいいな」

フォルテ「そうね。これで止まったりしたら…」

さ、さて本編どうぞー！！

十話 恐怖の依頼

朝礼が終わり依頼を選ぶ為、掲示板の前にいるスウィートとシアオ。フォルテとアルはトレジャータウンに買い物中だ

「ねえ…。お尋ね者は？」

なかなか決まらないので、スウィートがシアオに提案した。するとシアオは頭をブンブンと横に振った。シアオはそれからスウィートの方を向き

「と、とりあえず簡単なのからやっていこうよ！」

とかなり焦ったように言った。スウィートはそんなシアオを見て苦笑する。シアオは掲示板をもう一度見た。すると、1つの依頼が目に入ってきた

「あ…。スウィート、見てよ。これ…報酬が凄いよ」

「え…？どれ？」

シアオは掲示板に貼つてある紙を指差す。スウィートは指された依頼の報酬に目をむけた。流石にスウィートも報酬を見て驚いた

「8000ポケ…。これなら800ポケももらえるね。確かに凄いかも」

するとその隣にも何かが書いてある。読もうとすると後ろから声がかかった

「決まったか？」

振り返ってみるとアルとフォルテがいた。どうやら買い物が終わったようだ。スウィートは依頼を手に取り、アルに見せる

「これはどうかなって」

「ん？…報酬が高いな。8000ポケだから800ポケと…勇気の石、か」

とアルが報酬を見ながら呟く。8000ポケの隣に書いてあったのは勇気の石のようだ。アルはフォルテと話しているシアオを見ながら

「…あいつにピッタリだな」

と言った。スウィートは苦笑しながら「そうだね」と答えた。これを持っていてシアオに勇気が出てくれるというのなら嬉しいのだがするとシアオとフォルテが、2匹の様子に気がつき近づいてきた

「何？決まったの？」

「ああ。報酬は800ポケと勇気の石。で…内容は…」

フォルテの問いかけに紙を見ながらアルは答える。そして、内容のところでは言葉を止めた。3匹とも首を傾げる

「どうしたの？アル」

スウィートがアルに声をかけると「なんでもない」と苦笑いしながら答えられた。そして依頼書に再び目線を落とす

「内容は紫グミを取ってくることに。じゃ、いくぞ」

そう言つとアルは梯子を上っていった。スウィート達は慌てて追いかける。場所は、とスウィートは聞きたかつたのだが、行ったら分かるか、と思いつながらスウィートは梯子を上った

「き、きやあああああ！！！！？？？」

この声は……フォルテのものだ。絶叫をあげながら火の粉を吹いたり、火炎放射を放つたりして、とても危険な状況だ。スウィートは一生懸命フォルテを宥めようとしているが、危なっかしくて近づけないのが現状

此処は『魂の墓場』というダンジョン。世間ではお化けなどがでくるといわれているダンジョンなのだ（因みにゴーストタイプばかり）。何故フォルテが絶叫をあげているか。簡単だ

フォルテはお化けやホラー（ゴーストタイプ）というものが苦手だから

アルはその事を知っていて、わざわざ場所を言わなかったらしい。本人曰く

「知ってたら逃げるだろ？だから引き返せないところまで連れてき

シアオが苦笑いでポツリと呟く。そう、今の場所はB1階。つまり、一度も階段に辿りつけていないのだ。理由は勿論フォルテが動かないから。ただそれだけである。スウィートも頭を悩ませる

「うーん…。なんとか進んでもらわないと…」

「俺らが動けばついてくるんじゃないか？1匹になろうとはしないだろ」

「…それはそれで不安」

スウィートは苦笑しながらアルに言った。すると、アルは敵ポケモンに電気ショックを放った

「じゃあ、フォルテの前のゴーストタイプを潰していくか。なるべくフォルテに見せないようにしながら」

元々そうすればフォルテが泣き叫ぶ事もなかったのでは？とスウィートは思ったが、それを言うとアルに何か言われる気がしたのであえていわない事にした

「じゃあ…フォルテ、後ろに隠れててね」

シアオが強引にフォルテを3匹の後ろに押す。フォルテが何か言っているが、パニック状態で何を言っているのやら分からない。シアオは無視しておいた

「でもスウィートは一応フォルテの隣にいてくれ。何かおこるか分からないからな…」

アルはそういつつシアオをチラリと見た。シアオもその一瞬の目線に気がつき、アルを少々睨みながら

「トラブルなんておこさないから！」

「それが本当な事を俺は願っているよ」

シアオが睨んでいるのにもかかわらず、アルは平然と答えた。スウィートはフォルテの隣につきながら、さすがアルだなあ、などと呑気な事を考えながら2匹を見ていた。そして4匹はゆっくりと歩き出した

「ス、スウィートはなんで、平気、な訳…？」

恐怖感で顔がこわばっているフォルテがスウィートに聞いた。フォルテは目は涙目で真っ赤になっている。スウィートは若干苦笑いしながら

「私は、その…お化けとかそういうの信じていないし…。ゴーストタイプは普通のポケモンだし…ね。でも、ゴーストタイプが苦手っていうなら銀行のー」

「あたしは、あの店、に近寄ったことは一度も、ないわよ」

…：そういえばフォルテはトレジャータウンにいったとき、銀行とは離れた場所を歩いてた。シアオが隣だったのでシアオを盾にしながら進んでいたな、とスウィートは思い出す

アルとシアオを見ると技を放ちながら敵を蹴散らしている。まあ蹴散らせているのは大抵アルだが

(それにしても…アルに苦手なものって…あるの、かなあ)

お尋ね者も、お化けも、ほとんど何にも怖がらない。いつも平然としていて苦手、というものがあるようには見えない

フォルテやアルは自分より前から一緒にいるからわかるかな、と思いつつスウィートはフォルテに聞くことにした

「ね、フォルテ。アルに苦手なものってあるの？」

「あ…アルの苦手なもの…？うーん…いや、聞いたことないわ…」

フォルテもゴーストタイプを見てないので普段のフォルテに戻ってきているようだ

スウィートは密かにアルの苦手なもの発見してみたいなあなどと考えつつもフォルテにマメに話しかけていた

そしてようやく目的地のB8階。フォルテは随分と落ちついていて、このまま行けば普通に帰れる。そう思いながら紫グミを探す
だが探しているものというのは、なかなかみつからない事がよくある事でー

「ないね…」

シアオがため息をつきながら話す。一生懸命探しているが全く見つからない。アルも少々げんなりしている。フォルテはとっとと帰りたいたい、という気持ちでキョロキョロとしている。スウィートも同じくキョロキョロと周りを見渡している

すると、何か紫色のものが見えた

「あつ…。あれ…」

スウィートが指をさした。3匹ともその方向を見る。そして駆け寄った

「あれだ。紫グミで間違いない」

アルが遠くからなのに分かるみたいだ。とても目がいいみたいだ。紫グミだと分かるとフォルテはすぐに3匹を抜き去り、走って紫グミを手にとった

「とった！さ、早く帰るわよ！一秒たりともいたくないわ！」

フォルテはいつもの調子を取り戻したようで、大きな声でそういった。スウィート達はまだ数メートルの場所にいた
フォルテがスウィート達のもとに行こうとするとうー

「バツツツツ！！！」

フォルテの前にいきなり黒い物体が現れた

「き、きやあああああああああ！！！！！！！！！」

フォルテは絶叫をあげて倒れた。その大声といたら朝の目覚ましのラドンに負けなくらいの声だった。スウィートは思わず耳を塞ぐ。アルもシアオもだ

その大声がやんでからスウィート達はフォルテに駆け寄った

「フォ、フォルテ大丈夫！？」

フォルテを見ると泡吹きながら倒れていた。スウィートがそんなフォルテに困っている

「あははっ！そんなに驚いてくれるなんて！あははは！！」

と笑っている声が聞こえた。その声のするほうを見ると、1匹のムウマがいた。アルが笑っているムウマに少々引きながら問いかける

「あの…あなた、誰だ？」

「あはっ、あはは…。え？ああ、うちはセフィン・エレナイト！この依頼を頼んだ依頼人」

と自己紹介してくれた。スウィート達は目を見開いた

「い、依頼人！？」

何故依頼人がこんな所にいるのか。スウィート達は疑問に思った。スウィートはそれと同時にシアオの後ろに隠れる。セフィンは全く気にしていないようで、そのまま話を進める

「この紫グミ置いたんはうちなんや。ただ誰かを驚かせたくてな、だから依頼として探検隊に此処まできてもらったんよ。で、結果的にこんなに驚いてもらえるなんて、あはははっ！！」

またまたセフィンは笑いだした。どうやらセフィンはただ驚かせたかったようだ。暫く笑ってくれたからセフィンはスウィート達をみて

「ああ、悪かったな。こんなんで依頼に来てもらうて。ほな行こう

か？ギルドに。報酬渡さなあかんしな」

スウィート達は呆然としたが、慌ててバッチをかざし、ギルドに帰った

ギルド

「ほいつ。報酬！また頼むな」

「もう二度とこんな依頼だすな…」

アルは疲れたようで、げんなりとした表情で言った。セフィンは「んな冷たいこと言うなや」とまた頼みそうな感じた。すると先程まで気を失っていたフォルテが目を覚ました

「はっ！？依頼は…」

「おっ、目覚ましたみたいやな。大丈夫か？」

フォルテの前にセフィンがいく。するとフォルテは悲鳴をあげスウィートの後ろに隠れた。スウィートは既にセフィンと打ち解けているので大丈夫らしい

「なんか避けられてるみたいやなあ…。悪かったな、驚かせて」

ペコリとセフィンがお辞儀する。フォルテにとってはそんな事ど

うでもよかった。ただ何故こんな所にゴーストタイプがいるんだ、と聞きたいのだが、声がでない

「セフィン。フォルテはゴーストタイプが苦手なんだ…。ごめんね？」

「ゴーストタイプが苦手…？へえ」

セフィンはニヤリと笑った。アルとスウィートは嫌な予感以外、何もなかった

「な、あんたんとこのチーム名なんや？」

「チーム名？シリウスだよ」

アルが慌ててシアオの口を塞いだ。セフィンは笑顔のまま

「じゃあ、また頼むな。シリウスの皆さん」

それだけ言うとセフィンは笑顔で去っていった。フォルテは体を震わせながら、叫んだ

「いやあああああああ！！！！！！」

ギルド内で、全員が耳を塞いだとか…

十話 恐怖の依頼（後書き）

セフィン「はじめまして 種族はムウマヤで」

えー…この子はポケモンを驚かせるのが大好きなポケモンです…。
これからもでてくる…かも

シアオ「フォルテがやばいんじゃないかなあ…」

スウィート「私もそう思う…」

自分も…

シアオ「アクアも言うの!？」

セフィン「ま、（誰かを驚かせることを）期待しとくわ」

…（汗）えっと、誤字のほう指摘お願いいたします！

スウィート「だから自分で確認してください…」

すみません…

十一話 見張り番（前書き）

今回は短いです！

まあ見張り番自体そんな大したイベントでもないので…

それでは本編どーぞっ！

十一話 見張り番

「さあ皆。仕事にかかるよ」

『おおー！ー！ー！』

朝礼が終わり、弟子達が自分の持ち場につく。スウィート達も依頼を選ぼうと梯子のほうに行こうとすると

「あつ、シリウス！ちょっと来てくー」

「はあ！？」

ラドンに声をかけられーそうになったが、フォルテの鬼のような形相のせいで、ラドンは思わず言葉をとめた。今日のフォルテは昨日の依頼でほとんど寝れず寝不足なため、機嫌が非常に悪かった。アルはため息をついてからラドンの元に行く。スウィート達もアルについていく。フォルテは思いつきりしかめっ面だが

「ラドン先輩、俺達になんか用ですか？」

「え…いや…。忙しいのなら、いい、ぞ…？」

アルが聞くとラドンはフォルテの顔を窺いながら答えた。フォルテは目線があうと「何見てんだ」的な目でラドンを睨みつけた。ラドンは慌ててみるのをやめる。アルは内心、面倒くせえ…と考えていた

「早く用件言つてよ」

とシアオがヒョコツと顔をだして尋ねる。怖くて言えねーんだよ！とラドンが心の中で叫んでいたのはまた別の話

「えっと…じつは僕…今日用事があつて見張り番が出来ないんです。だからー」

「私達が代わりに見張り番をやるってことですか？」

スウィートがハダルの言葉を遮つて言う。するとハダルはコクリと頷いた

「分かりました」

スウィートがそう言うと、ハダルは一礼してから穴を掘り、何処かに行つてしまった。ハダルがいなくなるのを確認すると、アルはラドンのほうを向く

「で、見張り番つて足型言う仕事ですよね？」

「あ、ああ。客が来たら足型を確かめて、大声で俺に伝えてくれ。この穴から入つて進んでいくと、光が差し込んでいる所があるから分かるはずだ」

「（あの穴からの光か…）了解。行くぞ」

それだけ言うとアルはすぐに穴へ入つていつてしまった。スウィート達もそれに続き穴に入る。中は真っ暗でよく見えなかった。アルが進もうとするとー

「うわっ！シアオ！？ちょっと突っ立たないでよ！」

「んな事言われても…わっ、スウィート!?」

「きゃっ!?!」

…とても賑やかなやり取り。というか全員全く見えてなくて、前のポケモンにぶつかっているようだ。アルはため息をついてから体内に電気を溜めて、少しでも体の中から電気をだす。すると少しだけ辺りが明るくなった。これで一位置の把握はできるだろう

「スウィート、ごめん！大丈夫!?」

「な…なんとか大丈夫…」

見るとスウィートは地面に倒れていた。シアオが謝っているところを見ると、シアオがスウィートにぶつかってそのままスウィートがこけたようだ。フォルテはスウィートを起き上げらせ「早く行くわよ」と先々行ってしまった

「なんでお前が前なんだよ。電気ないと前見えないだろ。こけても知らないからな」

とアル

「す、すみません…」

とスウィート

「また誰かとぶつかっちゃっよ?」

とシアオ。フォルテがシアオに火の粉を喰らわせたのは言うまでもない

すると光が差し込んでいる場所を見つけた。スウィート達は光のほうに駆け寄り上を見る。すると上には穴が開いており、格子があった。シアオは行きを大きく吸い込んで

「ラトーンー！ー！穴のところまで来たよー！ー！」

「俺はラドンだ！ー間違えんな！ー」

「あれ？そうだったっけ？」

ラドンが大声で訂正したのに、シアオは全く気にしていない様子。声からしてラドンは怒っている。シアオはそれに気付いていないらしい。お気楽なやつはいいよな…とアルが思っていたのは本人しか知らない

「…足型が見えたらそれを報告するんだね」

「ええ。あつ、来たわよ！ー」

上を見ると小さな足型が見えた。見た途端、シアオが大きく息を吸った

「えーつと…足型はスカンプ」

と言いかけたシアオの口をスウィートが押さえた。フォルテは疑問符を浮かべている。アルはうんざりしたような顔をしながら息を

吸った

「足型はブイゼル!! 足型はブイゼル!!」

シアオと全く違う答えだ。するとラドンから「正解だ」という声が聞こえた。スウィートはシアオの口にあてていた前足をはなす。するとシアオはスウィートに不満そうな顔をしながら

「なんでスウィート止めたのさ!」

と言った。スウィートは苦笑いしながら

「だって…違うかなって思って。それにアルが目線で「止める」って目で見てたし…」

シアオはアルをキツと睨む。が、効果なし。それどころか睨み返されてしまった。シアオは身を縮ませる。スウィートは同情の目をむけてシアオの頭を撫でた。その様子を見て

(まるでお母さんと子どものようね…)

とフォルテは考えた

それからはアルとスウィートが足型を見て、それをシアオとフォルテが大声でラドンに知らせるといふ作業になった

「来客終了 来客終了 戻ってきていいぞー!!」

暫くするとディラの声が聞こえてきた。スウィート達はゆっくりと元の道を辿って戻るのだった

梯子を上がるとラドンとディラがいた

「大丈夫か？声はでるか？」

「はい」

「大丈夫です…」

「あー…。大丈夫っぽい。というより水頂戴。のど渴いた」

「べえんぜんふあいほうふしゃなぶい…」

上から順にアル、スウィート、フォルテ…そして何を言っているのか分からないのがシアオである。原因は声の出しすぎだろう。ディラはフォルテに水を渡し、シアオのほうを向いて

「お前はアメトリイに診てもらえ。分かったな？」

「びょうふあい」

シアオが首を縦に振ったので分かった。アルはシアオを見てはあ…とため息をついた。今日何度目のアルのため息だろ？とスウィートは呑気に考えていた

「お前達ご苦労だったな 結果は…なんとパーフェクトだ 初めてのなのによく頑張ったな 報酬も特別バージョンだ」

ディラは幸せの種とカテキン、命の種、そして500ポケをシリ

ウスに渡した。シアオはそれを見て驚いた表情をし

「ぶおんはみぼらっへきぎぶお!？」

「…すまん。何言っているか全く分からん」

ラドンの言うとおり。何を言っているのか全く分からない。するとスウィートが小さな声で呟いた

「『こんなに貰っていいの?』って言ってるんじゃないかなあ…」

その呟きは全員に聞こえていて、シアオはブンブンツと首を縦に振る。どうやら当たりのようだ。アルは興味半分で尋ねた

「なんで分かったんだ?」

「えっと…口の動き…? 読唇術っていうのかなあ?」

お前…そんなもんがなんで使えるんだよ…と全員が思った。勿論スウィートは全く気付いていない

こうして無事(?) 初の見張り番と仕事が終了した

因みに…シアオの声はきちんと戻ったそうだ。スウィート曰く「治った途端煩かったみたいでフォルテに殴られた」…とか

十一話 見張り番（後書き）

シアオ&フォルテ『トリック オア トリート！！』

…いきなり何かと思えば。お菓子は無いぞ

シアオ「アクア！知ってる？トリック オア トリートっていつのは『お菓子をくれないと悪戯しちゃうぞ』って意味で…」

知ってるよ？お菓子が無いのだからしょうがない
という事で自分は逃走する！じゃあ！

フォルテ「逃がすかああああ！！」

来んなああああ！！

シアオ「あつ…いつちやった…」

十二話 初めての探検！（前書き）

あれっ？ポイントがついてるよ！

シアオ「本当だ…。ポイントを入れてくれる人がいるとは…」

シアオ…（怒）誰か分かりませんがありがとうございます…！

フォルテ「アクア！土下座しなさい！」

はっ！？なんで！？？というかやったところで見えないと思うぞ？

フォルテ「…チッ」

シアオ「フォルテが黒いよ！アクア！」

…本編どーぞ！

十二話 初めての探検！

「皆…今日は重要な知らせがある…」

いつものように朝礼が終わると思いきや、ディラが暗い口調で言った。ギルド内に緊張がはしる。そして少し間をおいてディラが口を開いた

「キサギの森の時間がどうやら…止まってしまったらしい…」

『止まった!?!』

ディラの言葉にスイートを除くギルドの全員が声をあげた。スイートは訳が分からず首を傾げる。隣を見るとシアオやフォルテ、アルさえもが驚いていた

「ああ。風は吹かず、雲はその場所から動かない。草にしていた水滴は落ちることなく…その場で佇むのみ…」

ギルド内が一気にざわめく。ただ1匹、スイートだけがついていけない

「時が止まるなんて…」

「なんで止まったんだ…?」

口々に弟子達が呟く。すると、ルチルが思いついたような顔をした

「まさか…」

「そう、そのまさかだ。キザギの森にあった時の歯車が、何者かによつて…盗まれたのだ」

『何いいいいいい!!???』

皆がまたもや大きな声をあげる。スウィートは聞きなれない単語に首を傾げるばかりだった

「ぬ、盗むやつがいるなんて…!!」

「驚きですわー!!」

「み、皆!静かに!とにかくジバル保安官から怪しい者を見かけたらすぐに連絡するように言われているから!」

ギルド全員が頷く。この時、スウィートは「ディラさん、大変だなあ」などと思った

「分かったな!!それじゃあ仕事にかかるよ!」

『お、おおー!ー!ー!ー!!!』

とりあえず朝礼が終わる。スウィートがシアオ達に先程のことを聞こうとすると

「あつ、シリウス。ちょっと来てくれ」

とディラに呼び止められた。昨日はラドンに呼び止められ、今日はディラ…。ちょっと不思議な偶然だなとシアオは思いつつ、ディラのほうに近寄る

「最近お前達、依頼を頑張っているじゃないか この前のお尋ね者のときも凄かったぞ」

ディラはいきなりこれまでの功績を褒め始めた。スウィートとシアオは顔を明るくさせ、アルは相変わらずの無表情。フォルテはといつと

(…どうでもいいから。早く依頼行きたいんだけど)

などと考えていた。褒められたら気分がよくなるものではないだろうか。それともフォルテ的にはディラの褒め言葉は興味がない…か。するとディラはそのまま笑顔で

「そんなお前達に、そろそろ探検隊らしい事をしてもらおうと思うんだ」

『探検隊らしいこと??』

シリウスのメンバーが同時に首を傾げる。ここまで息があっているのはある意味凄い。ディラが「地図を出してくれ」と言ったのでスウィートが不思議な地図を取り出し広げた。全員が不思議な地図を覗き込んでみる

「ここに滝があるだろう?」

「滝?それがどうかしました?」

ディラが不思議な地図を指(?)指す。トレジャータウンからは少々離れている所に、1つの滝があった。これが探検隊らしい事とどう繋がるのか、アルは疑問に思った

「この滝には…ある秘密があるといわれているんだ。だからお前達にはその秘密を明かしてほしいんだ 分かったか？」

「は、はい」

「了解」

「はいはい」

ディラの説明にスウィート、アル、フォルテの順で頷く。スウィートは返事をしなかったシアオを变に思い、隣にいるシアオを見た。するとシアオの体は震え、目にも涙が溜まっていた。スウィートは思わずビツクリする

「シ、シアオ！？どうしたの！？」

オロオロとしながらスウィートがシアオに話しかける。フォルテもディラも怪訝そうな顔をしているが、アルだけは呆れ顔だった。するとようやくシアオが言葉を発した

「ごめん…。つい…嬉しくって。体の震えもソレ。初めて探検隊らしい事ができるから…」

「因みに体の震えは武者震い、な。いい加減覚えろ」

嬉しさのあまり泣いているシアオにアルはいつも変わらない口調でシアオに言った。シアオはうっ、と声をあげたが

「ま、まあ頑張ってくれ」

「うん!!」

シアオは涙を拭って笑顔で元気よく返事した

滝

「うわぁ…すごい勢いだね」

とシアオが滝を見ながら呟く。確かに滝の勢いは凄い。ドドド…と大きな音をたてながら水は流れている。シアオはそーっと近づき、滝に触れた。すると

バチツツツツ!!

「うわぁ!?!」

シアオが吹っ飛ばされた。スイートが急いでシアオに駆け寄り声をかける

「だ、大丈夫!?!」

「う、うん。なんとか。スイートも触ってみたら? 凄い勢いだよ…」

シアオは起き上がるとそう言った。スイートは恐る恐る前足を

滝に近づける。すると

バチツツツツッ!!

「きゃ…!?!」

スウィートはシアオほどは飛ばされなかったが少しだけ後ろに飛ばされた。スウィートはこれは凄いな、などと考えていると

「うつ…!?!」

強いめ眩暈が襲ってきた。前にも、ウエーズの時の眩暈と同じだとスウィートにはすぐ分かった。すると視界が真っ暗になった

スウィート達がいる滝。そこには姿がよく見えないが、ポケモンらしき者がいた。そのポケモンは助走をつけて、滝目掛けて一気に走った

（あ、危ないっ…!!）

自分が飛ばされた滝に入っていくのに、スウィートは思わず目を瞑った。あれではもうペシャンコになってしまっただろう、と恐る恐る目を開けると

（えっ…?!）

そのポケモンは洞窟らしき所に転がった。どうやら滝の向こうには洞窟があるようだ。スウィートは絶句していた

「……!!」

映像が消え、元いた場所にスウィートは立っていた。見るとシア才達がどうしようかと相談しているところだった。スウィートは映像の事、どうしよう…と言おうか迷っていると

「スウィートもなんか意見ある？」

フォルテが話を振ってきた。スウィートは先程の映像の事を話すことにした

「あの、ね。滝の中にポケモンが入って…その向こうには洞窟がある映像が見えたんだけど…前のお尋ね者と同じ映像みたいなんだけど…」

スウィートがおずおず言うと、3匹ともに驚いた顔をされた。そして暫くの沈黙。その沈黙をアルが破った

「やってみる価値はあるな…」

「はあ！？滝の中突っ込むわけ!？」

アルの発言にフォルテは驚いて大きな声をだす。アルの表情から

は平常心を保っていることが分かる。アルはそのまま続ける

「スウィートの映像は恐らくあつてる。現に前のお尋ね者ときの映像が証拠だ。…俺は滝に突っ込むぞ」

フォルテは驚きを隠せないようだ。まあ炎タイプからしたらこんな勢いの強い水に突っ込むなど命取りにしかすぎないのだから。が、フォルテは少し考えるような仕草を見せてから

「…分かった」

と小さな声で言った。後はー全員の視線がシアオに向けられる。シアオは不安そうな表情を見せたが

「僕は…僕はスウィートの事、信じるよ！だから滝に突っ込む！」

と元気よく言った。スウィートは信頼してもらえていることを嬉しく思い「ありがとう」とお礼を言った。シアオはニコニコしながら「うん」と返事してくれた

「助走…つけたほうがいいよな。じゃあ行くぞ…。せーのっ！！」

アルの合図とともに、4匹は思いっきり滝に突っ込んだ

「うわっ！！」

「きゃあー！？」

「うおっ!?!」

「ひゃあ!?!」

順番にシアオ、フォルテ、アル、そしてスウィートが声を上げる。スウィート達は映像と同じ洞窟に転がった

「み、皆大丈夫?」

スウィートが確認する。アルを見ると既に立っていて、辺りを見渡していた。シアオとフォルテはというと――

「ちょ、フォルテ上からどいて!!重い!」

「なっ…失礼ね!」

シアオの上にフォルテが乗っていた。フォルテはシアオを一蹴りしてから退いた。シアオは体を抑えつつ「いたた…」といいながら起き上がった。そんな光景を見てスウィートは、苦笑する以外なかった

すると先ほどまで辺りを見ていたアルが口を開く

「本当にあつたな…洞窟。滝の裏にあるとはな。」

「この洞窟、奥がまだあるみたい。行こう?」

とスウィートが進むとアルは普通に追いかける。フォルテは少々怒りながら追いかけてシアオは慌てて追いかけるのだった

滝つぼの洞窟

スウィート達が入った洞窟の名は『滝つぼの洞窟』というダンジョンらしい。現に今、敵、コダックと戦っている最中である

「っと…手助け!!」

スウィートがコダックのひっかくを避けてから、技を発動させる。スウィートはすぐさま横に移動し、コダックから離れる。スウィートが元いた場所の後ろにはシアオがいて―

「はっけい!!」

コダックにはっけいをくらわすと、呆気なくコダックは倒れた。スウィートはふう、と息をついてアル達の方に目を向ける。丁度あちらも終わったようだったそしてまた進む

スウィートはふ、と今朝のことを思い出した。そして皆に尋ねる

「あ、あのさ…今日デリラさんが「キザキの森の時間が止まった」って言ってたけど…。あれってどういう事なの？あと時の歯車って…」

「そっいえば…スウィートは知らないよな」

スウィートが聞くとアルが反応した。アルは説明をし始める

「まず…時の歯車は、時を動かしている要因なんだ」

十二話 初めての探検！（後書き）

はい、今回はお終い。

スウィート「中途半端だよ…？」

アル「ああ。凄い中途半端だ」

ゴメンナサイ…。次に繋ぐにはこれしかないんだ…！

スウィート「えつと…読んでる皆さん、すみません」

アル「アクアのがままにお付き合ってください」

本当にごめんなさい…

十三話 知りたいこと（前書き）

初探検を終わらせようと思ったのに終わらなかった

アル「なんでだよ？」

戦闘が（下手なくせに）長くなりました

シアオ「…なんでそんなに入れたのさ？」

………。本編どーぞっ！！

十三話 知りたいこと

「まず…時の歯車は、時を動かしている要因なんだ」

「要因…」

スウィートはアルの言葉を復唱しつつ、考える。アルは一回頷くと、説明を続ける

「つまり時を動かしている原因。その原因が盗られるとどうなるか、分かるか？」

「…時が止まる、よね。それが今朝話してた『キザキの森の時間が止まった』っていう…」

「…ああ。でも盗ったとしても、その区域の時が停止するんだ。時の歯車は何個かあるらしいから、一個盗ったとしても全体の時がとまるわけじゃないんだ」

スウィートはアルの言葉が妙に引っ掛かった。考えたあと、アルの方を向き、尋ねる

「らしい、って事は…知らないの？」

「実際に見たことはない。時の歯車は見つからないように森や洞窟に隠されているらしいからな」

スウィートはそれを聞いて、更なる疑問が芽生えた。それなら何故、時の歯車は盗まれたのか、と。すると

「…時の歯車が盗まれたのはこれが初めてだ。詳しいことは分からない。だが…前言った「時が狂い始めてる」のも、時の歯車の影響だといわれている。俺が知っているのはこのくらいだ」

とアルが言った。前の時―確か初依頼のときだっただろう。その時の内容も思い出す。どうやらアルでも時の歯車については詳しく知らないようだ。きっとアルが知らないという事はフォルテもシアオも知らないだろう

「ありがとう、説明してくれて」

スウィートがお礼を言うところ「どういたしまして」と短くアルから返事が返ってきた。スウィートはクスツと小さく笑った

説明も終わり、静かになる。敵ポケモンが襲ってきたら倒し、先に進むのみ。それだけを繰り返していた。勿論、たまには話をしたりするが

そんなこんなでとりあえず進むのだった

暫くして―

「今…B7階だったよね？」

スウィートが3匹に話しかける。3匹とも首を縦に振った

「多分、あと少しだよね！頑張ってくださいもっ！」

シアオが笑顔で言う。スウィートはうん、と頷いておいた。アルは相変わらず無言で辺りを見渡しながら進んでいる。フォルテも少し余所見をしていた

……それが大惨事になることになるなんて、誰が思っただろうか
ドンツツツツッ！

「きゃっ!?!」

誰かと誰かがぶつかる音がした。見るとフォルテが倒れているので1匹はフォルテだろう。だとしたらもう1匹は?とスウィートが目線をすーっと移動させ、止まると、固まった
勿論、シアオもアルも例外ではなく、固まった

「いったあ……。ちょっと!気をつけなさい」

……同じくフォルテも固まってしまった。全員の目線の先にいるポケモン、それは――

「ああ!?!」

なんともガラの悪そうな、ゴルダックとコダックの集団……。ゴルダックは2匹、コダックは5匹くらいいる。スウィート達にたらい、と冷や汗がでた

「おい、コラ!―!俺らの縄張りに入ってきてんだあ!?!」

口調も荒い。このポケモン達の子悪党ではない事を願いたいが、恐らくいいポケモンではないし、話が分かりそうなポケモンでもない。つまり――

「全員、やっちまえ!!」

こういう事になる。スイートは来た道を戻ろうとするが、見事にふさがれていた

「や、やるしかないみたいよ!？」

「お前が余所見なんかするからだろツ!?!ってんな事言ってる場合じゃねえし!」

スイート達は身構える。コダックとゴルダックといえば水タイプだがエスパイタイプ技も使うポケモンだ。フォルテとシアオにとってはきつい相手だ

「スイート!ゴルダックは俺らで始末するぞ!」

「う、うん...!と、とりあえず手助けツ!」

スイートが技を発動させ、全員能力値を少しだけ上げる。シアオとフォルテは二人で2匹で固まり、コダックの相手。スイートとアルはゴルダックの相手になる

「食らえ!水鉄砲!!」

「っ!危なっ...」

スイートは連打で撃ってくる水鉄砲をよける。少しずつゴルダックとの距離を詰めていく。そして隙がないかを伺う

「おら！！避けてばっかりか！？」

(かなり…バトル慣れしてる…！隙が少ししかない…！！)

とスウィートは考えつつもよける。そしてゴルダックは撃ち続けで疲れが出たのか、少しだけ隙ができた。スウィートはその隙を逃さなかった

「たいあたり！！」

スウィートはたいあたりをするとすぐさま身をひく。ゴルダックはというと―

「そんなもんかあ！？」

「…！！」

確かにヒットした。技のあたりもかなりよかったはずだ。だが、ゴルダックは平然と、余裕そうな顔をして立っている

(レベルが高い…！！―筋縄じゃいかない…)

スウィートは自然に汗が出てくる。今までウエーズ以外の強敵とはあまり戦っていないからだ。それに、ウエーズに勝てたのはあの声のおかげで―

「呑気に考え事かよ！？ねんりき！！」

ゴルダックの言葉ではっとし、ギリギリでスウィートは攻撃を避ける

(そうだ…違うことを考えてる場合じゃない…。とりあえず威力は弱くても技を一発、一発当てていけばダメージにはなる…)

スウィートは体勢を直す。そしてゴルダックの方に目を向ける

「はっ！まだたて突こうってか！？かわらわり！」

「っ！？まずいつ…！」

ノーマルタイプのスウィートに、格闘タイプの技のかわらわりは非常にまずい。スウィートは急いでゴルダックと距離をとり、回避する。ゴルダックはまたもや水鉄砲を連発してきた

(格闘タイプの技を使ってくるとは思わなかった…。これじゃ迂闊には近づけない…)

スウィートは避けながら自分が使える技をいくつか思い出す

(たいあたり、しんくうぎり、てだすけ、尻尾をふる…。…駄目。強い攻撃技がない…)

スウィートは苦い顔をする。これでは倒すのは遅く、悪ければ倒すことも出来ずにやられてしまうかもしれないのだ。スウィートは諦めずに何通りもの作戦を考える

(もう…たいあたりで攻めていくしか…)

スウィートは深呼吸をする。そして距離をまた詰めていく、が

「きゃあああ！！！！？」

「！！？」

フォルテの声に反応して振り返る。フォルテを見ると体が濡れている。おそらく水タイプの技を食らったのだらう。スウィートは動きを止めてしまった。それが仇になった

「余所見してていいのかよ！？かわらわり！！」

「しまっーきゃっ！！」

スウィートはモロにかわらわりを食らってしまう。そのまま体を岩に打ち付けられる。ズキズキと痛む体をなんとか立たせる。効果抜群の技をくらってしまい、立っているのがやっとでふらついてしまう

アルもシアオも2匹の悲鳴を聞いて隙ができ、技を食らってしまう。シアオもねんりきをくらい、かなり辛そうで起き上がれていない

「くっ…！！」

（なんとか…しなくちゃ…。アルはまだいけそう、だけど…シアオとフォルテは…）

何とか2匹を逃がす策を考える。そしてゴルダックたちをうまく撒いて逃げれる策を。だがそれはあまりにも困難だ。逃げ道はゴダックにふさがれ、逃げれる場所などない。そしてスウィートを含めて3匹は効果抜群の技を食らってしまったている。アルも効果抜群ではないが攻撃を食らってしまったている

自分が囿になるうか、とスウィートが考えると

《それを、他の3匹が了解するとは思えないけど。それにあんまりいい策じゃない》

(えっ?……この声ってー)

頭に声が響いた。この感じは、前のウェーズの時と同じー

「貴方……この、前の?」

《違う。俺がでてきたのは……初めて》

確かに前の声よりは高く、少し幼い気がする。しゃべり方も違う。スウィートはさらに戸惑う。一体、何者なのかと

「貴方達は一体……!？」

《……今はそれどころじゃないでしょ。それは後。まずは、こいつらを蹴散らすこと》

スウィートはそう言われ思い出す。今はそれよりゴルダック達を倒してシアオとフォルテを回復させなければいけない、と

(貴方……助けてくれるの……?)

《力を貸すだけ。前と同じように》

頭に響く声がさういうと、スウィートはまたあの懐かしい感覚に覆われた。違和感はあるが、自然と力が湧いてくるのは事実だ

《技名はわかる？多分、前と同じようにだせるところと思うけど》

(…やってみる)

スウィートは深呼吸する。そして、技名を思い浮かべ、口に出す

「力を貸して…！！バイオレンス・サンダー魔光電磁！！」

そう言った瞬間スウィートの体から電気の細い線がいくつも出てくる。電気の線はまるでシアオ達3匹を守るかのように散らばり、ゴルダック達にあたる

「ぐあああッ！？何だ、これ!？」

ゴルダック達は避けようとしているが、無数の線からは逃れられていない。線がゴルダック達に引き寄せられているみたいだ。そして細い線がすべて散らばり終わると、ゴルダック達は全員倒れて気絶していた

《どうやら、全員無事みたいだね。よかった》

声に返事する気力がなく、スウィートはへタツと地面に座り込む。息を整えてから、頭の声に話しかけた

(…力を貸してくれてありがとう。……貴方は、誰なの?)

1番聞きたかった事。前の声は『時間がない』と答えてもらえなかった。聞いたことはただ1つ、『すぐ傍にいる』という事だけ。あれの意味さえ分かかっていない

《本当に…忘れてるみたいだね、スウィートは…》

「えっ……」

頭の声はどこか悲しそうだった。一生懸命隠そうとしているみたいだった。だがスウィートはそっちより、言葉の意味を聞き取った

(貴方は…私が記憶をなくす前の事を知ってるの…!?)

スウィートには記憶がない。目が覚めてから分かるのは名前と元人間だったことだけ。知りたくても手がかりがなくては分からない。だが、スウィートは記憶をなくす前の事を1番知りたかった

《…とりあえず、俺はレンス・ヴァー…オン》

(えっ…?ごめんなさい。最後らへんが上手く聞こえない…)

だんだん最後の方がかすれてきて、上手く聞こえなくなっていた。だが名前だけは聞こえた。レンス、と

《技使って…ザマか。やっぱ……がえいきよ……して…な》

(…聞こえなくなってきた！まさか前みたいに…)

《みたいだ……。もっと、話した…けど…む……たいだ…》

スウィートはどうしても聞きたかった。自分は一体何者なのか。そして、前の声とレンスは何なのか、と

(レンスさん…！あと少しでいいから待って…！！)

《…さん、付け…勘弁…。ごめん…だけど、無理…かな…》

すると前のように懐かしい感覚が消え去った。スウィートはレンスの声は聞こえないんだろう、と予想する

(もっと…聞きたかったのに…)

スウィートは顔を俯かせ、気を落とした。すると、前から声をかけられた

「スウィート…大丈夫？はい、オレンの実」

シアオだった。スウィートは顔をあげ、お礼を言ってから、シアオからオレンを受け取る。シアオはもう食べたらしく、平気そうだった

「フォルテは…大丈夫？」

「うん。オレンの実食べたら元気になったよ」

スウィートはそう聞いてホッと息をつく。そして受け取ったオレンの実を食べる。食べ終わるとスウィートは立って、シアオとともにフォルテとアルの方に近づく

「スウィート、大丈夫か？」

「うん。アルとフォルテも大丈夫？」

アルに聞かれてスウィートは笑顔で答えた。アルやフォルテも目立った外傷はなく、大丈夫そうだ。本人達も大丈夫、と言った

全員もう動けそうだったのでスウィートはとりあえずここから離れよう、と提案した。3匹とも頷いてくれたので、一旦場所を移動するため歩きだした

進んでいると、不意にフォルテがスウィートの顔を覗き込んできた。スウィートは驚いて目を見開いてしまった

「ど、どうしたの？」

「いや…。その…スウィートの目の色、元に戻ってるなあって思ってた」

「え？」

フォルテの発言にスウィートは驚く。一体目の色とはどういうことだろうか。と思う。そんなスウィートの気持ちを讀み取ったのか、フォルテは説明してくれた

「あのね、スウィートの目、黄色になってたのよ。スウィートが独り言を呟いた後だったかしら？」

スウィートは独り言など言っただろうか？と疑問になったが、レナスと会話していた時のことが、と納得する

「でも…もう元に戻ってるの。…見間違いだっただかもね。さっきの

は忘れて」

フォルテは笑いながらそう言った。スイートも見間違いだっただ、と結論付けて忘れることにした

十三話 知りたいこと（後書き）

またまた出てきた！だが前とは違います！そこをお忘れなく！

スイート「レンス…その次が分からなかったなあ…」
フォルテ「というかまたオリ技が…」

お分かりだと思えますが電気です！

あ、あとゴルダックは滝つぼの洞窟では出てきません！そこはスル
ーしてください！！（というか集団行動してない）

十四話 アクシデントは何処にでも

滝つぼの洞窟 奥地

奥地にたどりつくと、そこには色とりどりの宝石があった。詩アオは1番に駆け寄っていき

「すっごーい！！見てみて！！宝石がいっぱいだよ！！」

と、小さな子供のようにはしゃぎだした。シアオの様子を見てアルは

「頼むから静かにしてくれ…（疲れた…）」

と呆れながら言った。アル的には先ほどのゴルダックの事やら何やらで精神的にも、肉体的にも疲れていた。そのためツッコミにもいまいちキレがない。なくてもいいが

スウィートは宝石に近づき、宝石に触れたりしている。フォルテはシアオのようにはしゃいではないが、宝石に目を奪われて、辺りをキョロキョロしている。ゴルダック達にぶつかつたのも余所見をしていたからなのに、まだ懲りていないらしい

「あ！おっきな宝石発見！」

シアオの声に反応して、3匹はそつちを見る。すると、大きい赤い宝石が岩にはまっていた。大きさはポケモン1匹分くらい（大体アルくらい）だった

「これ持って帰ったらいいんじゃないかな!？」

「確かにいいわね。評価が上がるわね。じゃ、最初はシアオからね」

シアオの言葉にフォルテが反応し、言葉を返す。シアオはフォルテに言われたとおり、宝石を抜こうとした、が

「ぬ、ぬけない…。固く固定されてる…」

まったく動かなかった。ビクともしない。シアオはもう1回、とばかりに引っ張るが、抜ける気配は一向にない。痺れを切らしたフォルテはシアオの前にでた。そして同じように宝石を引っ張るが、やはり抜けない

「くっ…！腹立つわね…！！アル、交代！」

「いや、無理だろ。フツーに考えて」

「物は試しつて言うでしょ！スイートは？」

なんとという無茶振りなフォルテ。スイートも無理じゃないかなあ…と思いつつも断ったらフォルテが怒りそうなので、試してみる

「んっ…！…！」

前足を宝石に固定させ、一気に体の方に引っ張る。だが宝石は抜けなかった。ひとつも動きやしないのだ。スイートは首を横に振って無理、という合図を送る

「僕、もう一回試してみるね！」

トドトドトドトド…！！！！！！

音がさらに大きくなる。ポケモンは横を見た。すると、大量の水が流れてきていた。ポケモンは慌てて逃げようとしたが、間に合わずに激流にのまれた

「…！！！」

(宝石を押したら激流が流れてきちゃうんだ…！！お、教えないと…！！！)

スウィートはシアオ達の方を見る。するとフォルテがなにやら助走をつけて尻尾を用意していた。まさか、と思いスウィートはアルに尋ねる

「何を、しようとしてるの…？」

「宝石を押してみるって事になったんだと。でも普通の力じゃビクともしないから、フォルテが尻尾でやるらしい。…めんどい事にならない方がいいが」

アルは最後の言葉をポツリとこぼした。スウィートはまずい！と思いつォルテの方をむいて声をかけようとする

「フォルー」

ドドドドドドドド…!!

そんなことをしている間に、音はどんどん大きくなっていく。アールとシアオも急いで2匹の方に駆け寄り、引っこ抜こうとする。

スポツツツツ!!

「ぬ…ぬけたっ!!」

何とかフォルテの尻尾が穴から抜けた。そして4匹ともが動こうとすると

ドドドドドドドツツ!!

激流はもうすぐそこまできていた。スイート達は諦めず逃げようとしたが……時既に遅し

『きゃあああああ!!』

『わあああああ!!』

見事に4匹とも流されたのであった

「た…助かった…」

シアオが水でビチヨビチヨに濡れながら言う。激流にはもう流さ

「ここは温泉よ。とても肩こりに効くの。その下の物は何か叫び声が聞こえたから、サイコキネシスで木の葉のクッション」

スウィートの問いに、フィーネは微笑んで答えた。スウィートは下を見る。何枚もの木の葉が宙に浮いていた。つまりこのクッションが自分を受け止め、下に思いつきり落ちなくてすんだのだと理解する。感謝と同時に申し訳なさが浮かぶ

「すみません…。ありがとうございます」

「いえいえ。怪我とかはないかしら？」

「私は特に…皆は大丈夫？」

フィーネとの会話をはさんで、スウィートが聞くとアルは首を縦に振った。シアオとフォルテはというと

「僕は大丈夫だけど…フォルテが気絶してる」

視線をスーツとシアオの隣にいるフォルテに向けると、フォルテはぐったりした感じで気絶していた。「あらあら」とフィーネがいながら、フォルテが乗っているところの木の葉を地面にそつと置く。スウィートはまたお礼を言った。するとフィーネが

「ところで…3匹とも温泉入ったら？」

と言った。スウィート達は木の葉から降りて温泉に入る。とても気持ちがいい温度だった。スウィートが体をリラックサさせていると

「にしても…上から降ってくるとはのお…」

と後ろから声が聞こえた。聞きなれない声だったのでスウィートは近くにいたフィーネの後ろにすぐさま隠れる。声の主はコータスだった

「わしはヘクトル・ウアイヤ。お主ら何故、上から来たのじゃ？」

「…俺はアルナイル・ムーリフといいます。実はー」

アルはこれまでの経緯を話した。話し終わると、フィーネもヘクトルも驚いたような顔をした。「大変だったのね」とフィーネがスウィートの頭を撫でる。スウィートは

(…………子供じゃないのに)

などと思っていた。まあ、十分子供なのだが。するとフォルテが目を見ました

「ん…？」

「あつ。フォルテ起きた？温泉入ったら？気持ちいいよ〜！」

「……………は？」

シアオが誘うがフォルテには何のことやら分からない。というか此処は何処だ。滝つぼの洞窟にいたのではないのか？という疑問しか浮かんでこない。自分が温泉にいる理由も分からない

先ほどから頭に疑問符を浮かべているフォルテを見て、スウィートが声をかける

「私達、激流に流されて此処まで飛ばされちゃったんだよ」

「はっ？飛んだ？」

「うん。とりあえず温泉入ったら？」

スウィートにそういわれてフォルテは温泉に入る。入った途端、少しフォルテの顔が緩んだ。するとフィーネの近くに、前フィーネが言っていた「連れ」、ブラッキーがよってくる

「フィーネ、知り合い？」

「ええ。前話したでしょう？スウィートちゃん」

ああ、と声をあげるとブラッキーはスウィートの方を向く。スウィートはフォルテの後ろにささっとすぐに隠れた

「僕はシャオレア・レスファイ。シャオって呼んでくれればいいから。よろしく」

「は、はい…：よろしくお願い、します」

ぎこちなくスウィートが返事をする。悪いなあ…：とまたまた思うが、やはり直らないのだ。フォルテはスウィートの方をちらりと見てから、シャオとフィーネに向き直る

「えつと…：あたしはフォルテ・アウストラ。スウィートと同じ探検隊『シリウス』」

「私はフィネスト・イレクレス。フィーネと呼んで。スウィートち

やんとは最近知り合ったの。よろしくね」

「あの…フィーネさんとシャオさんは…恋人同士、ですよね…？」

スウィートが恐る恐る聞く。するとフィーネはにっこりと微笑んで

「ええ。きちんとその目印もあるわよ？」

と言い、腕を見せる。フィーネはシャオに目で合図すると、シャオも腕をみせた

見ると2匹ともリングをつけていた。フィーネは銀色、シャオは金色。よく見るとどちらにも不思議な模様が彫られていた。シャオの遺跡の欠片とは違うが

「これが目印。私はこのデザインが気に入っているんだけどね」

そういつて腕を引っ込めた。スウィートもフォルテも「見たことないなあ」と思っていた

そして空気化していたアルとシアオが話しかけてくる

「後少ししたら帰るぞ。報告しなきゃいけないからな」

「ん〜。僕としてはまだ入っていたいな…」

「ディラさんが心配するから帰らなきゃいけないよ」

スウィートが苦笑いしながらシアオに答える。そしてアルとシアオがフィーネとシャオに挨拶をし、数分話して帰るのであった

十四話 アクシデントは何処にでも（後書き）

報告までいきたかったけど、ゲーム時間もないし長くなりそうなのでここでストップします

フォルテ「じゃあ次が短くなったり…」

アル「十分ありえそうだな。コイツ（アクア）だし」

が、がんばりまーす……（汗）

十五話 報告と意外な…

ギルド

温泉から上がり、トレジャータウンに帰ったスウィート達は、フイーネとシャオと別れ、ギルドに帰ってディラに報告しているところだった

「まとめると…滝の裏にはダンジョンで、ダンジョンをぬけた奥地には宝石があり…宝石を壊したら激流がきて温泉まで流されたと…」

とディラがまとめると、フォルテが不満ありげな顔をしながら大声で

「壊したんじゃないかって押したの！！押したのに砕けたのよ！！」

「つまり壊したんだろ」

訂正しようとしたがアルにつっこまれた。フォルテはキツとアルの方を振り返るが、アルは一瞬睨み返すと、知らん顔をして前を向いた。フォルテが内心愚痴っていたのはいうまでもない

「宝石はとれなかったんだけどね…。はあ」

とシアオがため息をついてシュンとうなだれる。するとディラが焦ったように

「いやいや！！そんな事ないよ。これは凄い発見だ！」

と言った。するとシアオの顔が一気に明るくなる。シアオは本当に子供っぽい。簡単にいえば無邪気である。いいところではあるが、とアルが考えている間、スウィートは全く別のことを考えていた。あの映像の事である

(耳や体の形…あれは…親方様なんじゃ…？そう考えると…映像のポケモンとは一致する)

「あ、あの…」

スウィートが控えめに声をだす。すると皆が一齐に振り返った。見られているのが恥ずかしく、つい顔を伏せ気味にしながら恐る恐る発言する

「親方様に聞いてほしいことがあるんです…。あの場所に行ったことがあるかどうかを」

『はっ？』

全員の声がハモった。そんな皆の様子に、スウィートは少々オロオロしている。と、ディラは口を開いた

「い、いくら親方様でも一度行った場所に、お前達を行かすとは思えないが…」

「と、とりあえずお願いします。聞くだけでいいので…」

とりあえず、あの映像のポケモンが何なのかを知りたいスウィートは、ディラに必至に頼む。スウィートの必至さに負けたディラは

「わ、分かった。お前達は此処で待つておけ」
（自分の手柄だというのに……。またおかしな奴を弟子にしちゃったなあ……）

と言い後ろを向き、心の中で言ったのだろうが口に完全にだして親方様の部屋に入っていた

デイラが部屋に入ったのを確認すると、シアオ達はスウィートの方に向く。その瞬間、スウィートはビクッと体を揺らした。シアオは構わず言葉を発する

「どうしたの？急に」

「えっと…その…」

スウィートは恐る恐る口を開き、映像のことについて詳しく（じやないところ匹が納得しそうにないので）説明した。説明が終わると同時に、デイラが部屋から出てきた

「親方様はなんて？」

「……………」思い出 思い出 たあっ……！！僕、あそこに行つたことあるかも ……と仰られた。つまりスウィートの言う通り、親方様はあそこに行つた事があるみたいだ」

「え〜っ、そんなあ……」

シアオががつくりと肩を落とす。スウィートは顔を少々俯かせて、シアオを見ながら心の中で謝った。言わなければよかったか、という考えも浮かんだのだが、聞いてしまったものはしょうがない、とスウィートは顔をあげた

「とりあえずもう夕食だから、お前達は食堂に行っておけ」

デリラにそういわれ、フォルテは少々重い足取りで、スウィートとアルはいつも通りに、シアオは食堂へとんでいった

ギルドの食堂

『いただきますーすー!』

皆が声をそろえて言うと、全員凄い速さで皿にのっている木の実やグミを食べる。スウィートは最初の頃は、皆の食べっぷりにひいていたのだが最近慣れてきて、自分のペースでゆっくりと食べている

前に座っているシアオとフォルテを見ると、凄い速さで食べている。正直に言うところ、怖い

スウィートはグミを一つとって、口に運ぶ。そしてチラリと隣のアルの方を見た。するとアルは皿をジーツと見て、食べようとしていなかった

スウィートは変に思い、声をかけてみる

「アル?どうかしたの?」

「……………」

聞いていないのか聞こえていないのか、アルは返事もしないし首も振らない。体も動かさずにただただ皿を見つめているだけである。スウィートはアルが見つめているほうに視線を向ける

アルの視線があるのは、イバンの実。ただそれだけであった。不思議に思いながらもスウィートはアルにもう一度話しかける

「アル？」

「…！どうした？」

アルはようやく気がついたようで、スウィートの方を向く。スウィートのにはこちらがどうかしたのか、と聞きたいのであった

「…さつきからお皿ばかり見てるから。どうかしたのかなあって」

スウィートがそういうと、アルは苦笑いをした。スウィートが怪訝そうな顔をする

「…俺が何を見てるのか分かるか？」

「えっと…イバンの実、かな…？」

「正解。イバンの実の味ってどんなのか知ってるか？」

スウィートは不思議に思いながらも考える。そういえば今日、最初に食べたのを思い出した。とても甘く、ほんの少しだけの苦味があった木の实だ。甘いものが好きなスウィートにとってはとても美味しいものだったが

「凄く甘くて…苦味がほんのちよつとある木の实だよね」

「…そう。俺はな、イバンの実が苦手な訳」

「……………え？」

スウィートは目をパチパチして目を見開く。アルの苦手なものがイバンの実？お化けもお尋ね者も何も怖がらない、なんとというか苦手なものがないような雰囲気を漂わせるアルが？…ありえない。と
いづか想像ができない

そんな事を考えていると、アルは苦笑しながら「嘘じゃない」と
言ってきた。スウィートは恐る恐る口を開く

「……………本当に苦手、なの？」

「ああ。モモンの実とかならまだいけるんだが、イバンの実の甘さ
って凄い濃くて無理なんだ。……………小さい頃はまだ食べたんだがな」

「えっ、なんて？」

アルが最後の方に言った言葉がよく聞こえなかったため、スウィ
ートは聞きなおす。アルにはなんでもない、と言われてしまった
という事は、あるが皿、イバンの実を見つめていたのは食べられ
ないからなのではないだろうか？スウィートはそう思うとさりげな
く（スウィートはそのつもり）

「あ、あの…私、イバンの実好きだし…。そ、その…食べよっか…
？」

と聞いた。アルは小さく笑ってから

「じゃ、ちよつとだけ食べてもらっていいか？」

と言った。スウィートが自分の事を気遣って言ってくれているのだから、その行為を無駄にはしたくない。かといってスウィートに全部食べてもらうわけにもいかない、と思い三分の一だけ食べてもらうことにした

スウィートは役にたてた、という事でちよつと喜んでいた

その光景を、シアオとフォルテは見逃したのだった…

「ふー…お腹いっぱい…」

そう言いながらシアオがベッドに寝転がる。スウィートも自分のベッドに座る。アルもフォルテもベッドに座り込んだ。するとスウィートが何かを思い出したように、シアオの方に向く

「シアオ、前の依頼の報酬の…：勇気の石貸してくれない？」

「え？いいけど…どうしたの？」

シアオはバッグから勇気の石を取り出してスウィートに渡す。スウィートは秘密、と言いながら勇気の石を自分のバッグに入れた。するとフォルテが口を開いた

「そつえば、スウィートの眩暈と映像…あれって何かに触ったときにおきてないかしら？」

「……！確かに。1番始めは林檎に触れたとき。後ウエーズに触れたときや滝……そして宝石。全部触ったときにおきてる」

場が沈黙し、スウィート達は考え込む。どういう事だろうか、とするとまったく緊張感のない声で沈黙が破られた

「触れたら過去や未来が見えるんだよね！？凄いいじゃん！」

沈黙を破った者、それは勿論のことシアオだ。シアオが言い終わると、フォルテとアルが同時にため息をつく。大きいため息を。スウィートはそんな光景に苦笑する。シアオはまったく訳が分からないような顔をしていた

するとデイラが部屋に入ってきた

「お前達、親方様がお呼びだ」

『親方様が？』

4匹の言葉がハモる。一体何のようだろうか。スウィート達は不思議に思いながら、ロードの部屋に向かうのだった

「親方様、『シリウス』を連れてきました。……………親方様？起きて
m」

「やあっ……！君達、今日はご苦労様」

またもやロードはいきなり振り返り、声を発した。アルはまったく驚きもせず平然としていたが、スウィート達は小さな悲鳴をあげた

「今回来てもらったわけは、遠征についてなんだ」

『遠征？』

ロードの言葉に4匹が首をかしげる。するとデイラが説明してくれた

「遠征というのは、選ばれたメンバーで遠くまで出かけ、宝を探しに行くんだよ」

「わあっ！楽しそう！！」

シアオがパツと顔を明るくさせた。とてもわくわくしているような顔だ。アルは呆れ顔になりながら

「選ばれたら、だからな？」

「うっ…わ、分かってるって」

シアオが言葉に詰まったところを見ると、絶対わかっていなかったようだ。全員で行く、と思っていたのだろう。アルはそう思うと自然にため息がでてきた

「その遠征なんだけどね…。なんと！君達を遠征のメンバーの候補に入れることにしたんだ」

「「えっ!?!」」

スウィートとフォルテが声をあげる。アルも驚いているようだ。シアオはまたまた顔を明るくさせているが

「あくまでも『候補』だからな。遠征までの頑張り次第だ」

ディラは一応忠告をいれておく。シアオは「候補かぁ」と少し肩を落とした。スウィートは微笑みながら3匹に

「頑張ればいいんだから。ね!遠征までがんばろ!」

「そうだな。失敗さえしなきゃいいんだからな」

「そうね。なんとかなるわよ」

「よーっし!頑張るぞー!!!」

スウィートの言葉にアル、フォルテ、シアオという順に言葉を発する。ロードはその光景を笑顔で見っていた

十五話 報告と意外な…（後書き）

アル…甘い物おいしーじゃん！

アル「いいだろ、嫌なんだから。されにイバンの実って言っただろーが」

スウィート「ちょっと意外だなあ…。私は甘い物大好きなんだけどね」

という事でシリウスの苦手な物は

スウィート 知り合いじゃない人ポケモン（？）

シアオ お尋ね者やなんやら

フォルテ ホラー・お化け（ゴーストタイプ）

アル イバンの実（凄く甘い物）

…みたいです

十六話 嫌な再会

「ぎゃあああああ！！」

『！！？？』

シアオの悲鳴で3匹が一齐に目を覚ます。スウィートが起きてないという事はまだ太陽が昇っていない時間帯で、かなり早い。そんな時間に起こされたら機嫌が悪いポケモンが1匹いる訳で

「うるっつさー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「へっ！？ぎゃあああ！！？？」

二回目のシアオの悲鳴。やはりフォルテの機嫌は悪かった。スウィートやアル的にはフォルテの方が煩かったのだが。シアオは尻尾でフルパワーで殴られ、天上に激突した。かなり痛かっただろう。やった本人は何もなかったようにベッドに戻って寝てしまった。

フォルテが寝たのを確認すると、スウィートは恐る恐るシアオに話しかける。

「だ、大丈夫？」

「だ、だい…大丈夫、夫……じゃない、かも…」

シアオは苦しそうに返事をした。確かに天井に体をぶつけて大丈夫といえないのは当たり前だが。スウィートは苦笑いでシアオを見る。するとアルが近づいてきた。

「おい、何の夢見たんだ？」

とアルが聞くと、シアオはビクツと体を揺らした。スウィートとアルにジーツと見つめられ、言わなければ恐ろしいことになりそうだった。シアオは内心びくびくしながら話す。

「そ、その………対した夢でもないんだけど……」

「早く言え」

「うっ……。えつとくく僕のせいで依頼を失敗して、フォルテに殴られて、アルからは電気ショックを喰らう夢……。うう、怖かった……。きつと今日は悪いことしかおきないんだ……」

まさにフォルテに殴られたが。アルはそのことを聞くと、大きなため息をついた。スウィートは苦笑する。シアオは2匹の様子を見ると首を傾げた。スウィートは苦笑を崩さずに言葉を発する。

「あのね、シアオが大きな声だから起きちゃったの。だからフォルテに怒られ（殴られ）たんだよ？」

「だからって殴らなくていいのに……」

「お前、本気で煩かった。フォルテが怒る（殴る）のも無理ないだろ……」

アルははあ、とため息をつく。シアオは呑気にふああ……と大きなあくびをした。スウィートはベッドに戻り座る。シアオも体をおさえながらベットに寝転んだ。

数分後、ふとスウィートが周りを見ると、シアオとフォルテは爆

睡っていて、アルは眠たそうな顔をしながら本を読んでいた。アルに声をかけようと思ったのだが、窓から光が差し込んできたので、いつもどおりスウィートは窓に近寄って太陽が昇るところを見た。

「えー始めに…皆に知らせがある。近々、遠征に行くことになった」

『遠征!?!』

デイラの言葉を聞いて、弟子達が目を輝かせる。すると

「遠征なんて久しぶりですね!」

「ヘイヘイ!!楽しみだぜ!!」

「あっしは一度も行った事がないのでいってみたいゲス!」

皆がはしゃぎ始め、静かだった空間が一気に煩くなった。フォルテとシアオは少しうつらうつらと寝そうになっていたのだが、煩くなったことにより目がパツチリと覚めたようだ。

「静粛に!皆分かっているとは思いますが、遠征には選ばれたメンバーしかいけないからな!メンバーに選ばれるように頑張ること!それでは仕事にかかるよー」

『おおおおー—————!!!!』

今日の声は一段と大きく、気合が入っていた。

「さーてと、今日はどうする？」

朝礼が終わり、すっかり機嫌も直ったフォルテが3匹に問う。シアオとアルが考えていると、スウィートはバッグを見出した。そして顔をあげ全員の方を向き

「…オレンの実が足りないから、買い物と選ぶのに分かれたらどうかな？」

と提案した。アルはすぐさまその提案に賛成して、話し合った結果フォルテとシアオが依頼を選び、スウィートとアルが買い物になった。

スウィートとアルは梯子を上り、ギルドを出る。そしてトレジャータウンに向かう途中の交差点、見たことのある人物ポケモンが見えた。スウィートは少し小走りに近づき、そのポケモンに声をかける。

「…セフィンさん？」

「ん？ああ、スウィート。アルも。やつほ」

セフィンが笑顔で挨拶してくる。スウィートはこの時、フォルテを連れてこなくてよかった！などと思っていた。勿論アルも同じ事を考えていた。

「何してんだ？」

「いや、出かけようかと思ってただけ」

「…お出かけがすきなんですか？」

「全然。今日は友達に会いに行くだけや。普段はたいがい家ん中」

「あ、そうだったんですか。引き止めてごめんなさい」

「ホンマ律義やなあ。まあええわ。また依頼、頼むからそん気でお
りやー！」

そういうとセフィンは行ってしまった。アルは最後の言葉にため息混じりで「本気で勘弁してくれ…」と呟いたが、本人にはまったくもって聞こえていなかった。

その頃のシアオとフォルテというと

「だからアンタはいつまでたってもヘタレなのよ！」

「それならフォルテも同じじゃんか！」

…と口喧嘩をしていた。喧嘩の内容は簡単だ。お尋ね者にしよう、とフォルテが提案するとシアオが即却下。そんな単純な事でフォルテが怒鳴ったのだ。因みにシアオの発言は、フォルテもゴーストタ

イプの苦手を克服していない、という事らしい。

結局数分の言い合いの末、折れたのはフォルテだった。やはり自分のゴーストタイプ恐怖症の事を出されると弱いらしい。シアオとフォルテが左の掲示板に向かうと、見たことのあるポケモン2匹がいた。

「あ、あれって……」

シアオが声をあげると、あちらも気がついたようでシアオ達の方を向く。2匹、ズバットとドガースはシアオ達を見ると少し驚いたような顔をしたが、すぐに顔を戻す。シアオ達は2匹をまじまじと見ていた。すると

「フン、何だよ」

「お前ら、こんな所で何やってんだ？」

と声をかけてきた。シアオとフォルテは顔を見合わせてから、ズバット達に向かって

「えっと……」

会ったことあったっけ……？」

ズバットとドガースはドカツと音をたてて壁にぶつかった。シアオとフォルテは決してふざけているわけではない。何故かという顔が真顔。本気で頭に疑問符を浮かべているのだ。立ち直った(？)ズバットとドガースは大きな声をあげ

「会ったじゃねえか！忘れてんじゃねえよ！！」

「海岸の洞k」

「ああああー！！！！思い出したわ！大して強くもないクセにシアオの宝物を盗んで、結局あたし達にボコボコにやられた最後はお決まりの台詞で逃げていった雑魚共じゃない！！記憶に全然なくて忘れるところだったわ！！」

「なんでそこまで言われなくちゃならねえんだよ！！」

フォルテの言葉に2匹がツツコム。が、フォルテはまったく訂正する気もないらしい。そうと分かるとフォルテは2匹をただただ睨みつける。シアオもようやく思い出したようで、ああ！！と声を上げた

「なんでこんな所にいるの！？」

シアオが声を荒げて聞く。あちらの2匹は平然としながら

「ケツ、俺達は『ドクローズ』っていう立派な探検隊だぜ？少々やり方はあくどいけどな」

「え、ええええええ！！！？？」

（うつわ…自分で言ったわよ…。何？アホなの？それとも馬鹿？）

ズバットがそう言った瞬間、驚いたような顔をし声をあげた。フォルテは凄い顔（悪いものを見たような目）をしながら心の中で考えた。ドガースは薄ら笑いを浮かべながら

「あはは 何だか思わず火を吹いちゃったわ」

フォルテがドガースに向かって少し弱めの火の粉を吹いた。手加減した訳ではない。建物の中だからわざとそうしたのだ

「……僕は確かに弱虫かもしれないけど……！探検隊の修行も頑張ってるし、今ではギルドの遠征の候補に選ばれるようにまでなっただんだ！！」

「何？遠征があるのか」

シアオがそう反論する。だがズバットは遠征、という言葉聞き、何かを企んだような黒い笑みを浮かべた。はっきり言って不気味である。フォルテは顔をしかめながら

「……とりあえずあたし達より弱い探検隊さん、どいてくれるかしら？邪魔なだけけど」

とはつきり言つてのけた。コイツは遠慮というものを知らないのだろうか？と他の3匹が思っていたのは本人達しか知らない

「う、うるせえ！！あの時はアニキがいなかったからだ！！」

「「アニキ………？」「」

ズバットの言葉に眉を顰めるシアオとフォルテ。嫌な予感しかない、と2匹が考えていると、さらにドガースが付け加える

「お前らなんかアニキがいれば一捻りなんだよ！」

「あたしはアンタ達2匹の事を言ってるのよ！誰がアニキとやらの強さの事言ったのよ！？ああもう、学習能力のない奴らね！」

フォルテがついに半ギレになった。怒りで顔には青筋が浮かんでいる。シアオは表情には出さないが、内心ビクビクしていた。ズバット達は少しフォルテの迫力に言葉を詰まらせたが、負けまいと言いつ返ししてきた

「お前が「弱い探検隊」とか言うからだろ！俺達は3匹揃って『ドクローズ』なんだよ！」

「知らないわよ、そんな事！というか探検隊名からして悪趣味でしょ、アンタら！！」

「んだと!？」

もう思いつきり話がズレていつている。が、3匹は気にしていないようで言い合いを続けている。シアオはついていけずに見ていることしかできなかった

言い合いをしているとズバットが鼻でおいをかいで、勝ち誇ったような笑みを浮かべた

「この匂いは…アニキだ！」

「「匂い……?ぐっ…!？」」

ズバットがそう言った瞬間、とても強烈な匂いがした。鼻がおかしくなりそうなくらい臭い匂いで、シアオ達は鼻をおさえる。匂いはほとんど広がっていき、やがて全体に広がっていった

「きゃー！！オナラ臭いですわー！！！」

「あ、あつしがやった訳じゃないゲスよー！！！」

「んな事聞いてねえよ！ヘイヘイ！！！」

弟子達の苦痛の音が聞こえてくる。だがフォルテ達もそんな事気にしている場合ではなかった

「く…臭い…！！！」

フォルテがそう言いながら鼻をおさえていると

「邪魔だ！どけ！」

「きゃっ…！？」

突然声が出て、フォルテは吹っ飛ばされた。そして壁に思いっきり体を打ち付ける。シアオはフォルテの方を見てから、フォルテを飛ばした原因を見る。そこには、なんとも悪そうな面をしたスカタンクがいた。スカタンクはシアオを睨みつけ

「どけ！！お前もあいつのように張り倒されたいか！？」

「うっ…うっ…」

シアオはスカタンクの迫力に負けて、道をあけてしまう。するとスカタンクはズバット達の方に近づいていった

「さすがアニキだ！！！」

「やっぱり強い！！！」

「そんな事はどうでもいい。お前ら、金になりそうな依頼はあったか？」

「いえ…。ですがいい情報を手に入れました。このギルドで遠征があるそうです」

ドガスからそう聞くと、スカタンクは怪しい笑みを浮かべた

「ほう…。それはいい情報だな…。よしお前ら！帰って悪巧みするぞー！」

「へいー！！」

そういつて梯子の方に向かう。ズバットはシアオの方を向いて

「じゃあな！弱虫君よー！！」

そういつて進もうとすると 丁度スウィートとアルが帰ってきた。スウィートはスカタンクが初対面であるにも関わらず、きちんと前に立っている。スウィートはシアオをチラリと見ると『ドクローズ』と向き合った。そして

「…さっきの言葉を、訂正してください」

とはつきり言った。この時のスウィートは、怒っているのだ。アルはフォルテに気づくとフォルテの方に向かった。そちらには気にせず、ドガスは馬鹿にしたような顔でスウィートを見た

「なんで訂正なんかしなきゃならねえ？事実だろ」

「確かにシアオはまだ未熟かもしれませんが、毎日努力しているんです。それなのに先程の言葉はあんまりだと思つのですが。シアオの努力を見ていない人ポケモンにそんな事をいう資格はありません。訂正してください」

ドガースの問いにもしつかりと答えた。ドガースはスウィートの雰囲気と迫力に負けて黙つてしまう。勿論ズバツトもだ。だがスカタンクは眉を顰めてスウィートを睨みつけながら

「とりあえず退け」

「言つたでしょう。訂正してください、と。退く気はありません」

スカタンクの睨みにも動じず、スウィートは静かに返した。これ以上無駄だと思つたのだらう。スカタンクが動いた。フォルテのように張り倒そうとしたのだ。だが

「なっ…!?!?」

スウィートは既にその場にはおらず、スカタンクの攻撃は空振りに終わった。するとスカタンクの後ろから

「実力行使という手は、あまりにも卑怯だと思つのですが。仕方ありませんね」

「ぐっ!!」

スウィートはスカタンクと後ろに回りこみ、覚えたばかりのアイアンテールを食らわした。スカタンクは壁に体を思い切りぶつけた。見るとズバツトとドガースは焦げていた。おそらくフォルテにやら

れたのだろっ

「…これに懲りたらもう言わないで下さいね」

スウィートが言い終わると同時に、スカタンクは悔しそうな顔をしてからズバットとドガースを連れて出て行った。スウィートはふう、と息をつくときアオに近づいた

「…シアオ、大丈夫？」

「う、うん…。ありがとう」

スウィートはニコリを笑った。シアオもつられて笑顔になる。スウィートは笑顔を崩さずに言葉を発した

「シアオ。前にも言ったけど、変わればいいんだから。あのポケモン達の言葉なんか気にしなくていいからね」

「うん…。そうだよね」

シアオがいつもどおりの笑顔に戻ると、スウィートはホッと息をついた。するとアルとフォルテが近づいてきた

「フォルテ、大丈夫だった？」

「ええ。最後にアイツら丸焦げにしたらスッキリしたわ」

（体の事を言っただけだなあ…）

スウィートが苦笑いしながらそう考えていると、アルに小さくた

め息をつかれた。フォルテは気づいていないようだが。アルは掲示板を指差して

「とりあえず依頼選ぶぞ」

と言った。そして4匹は掲示板の前に立ち、依頼を選び始めた。シアオが今回「お尋ね者」の依頼をしよう、と言ったので3匹は驚いたが、シアオのやる気も出てきたようなので「お尋ね者」の依頼を2件こなした

スカタンクの匂いは夜になってもまだ少しだけ匂っていたので、ギルドの弟子達全員で、頑張っ^て匂いを消したとか…

十六話 嫌な再会（後書き）

えー前にも（活動報告です）お知らせしましたが明日からテスト期間なのでパソコン禁止令がです

アル「因みにそれはアクアの頭がわるいから」

言うなっ！今それを言うな！

とりあえずテストが終わるのが25日なので、それまでは絶対活動できないかと

感想などは携帯で、母に内緒でやろうと思うので大丈夫です！

シアオ「それ駄目でしょ……」

バレなきゃいいんだよ

まあそういうわけなので一週間とちょっとは更新できませんので！

十七話 遠征の助っ人（前書き）

テスト終わったあああああ！！！！

アル「テスト勉強サボってたくせに…」

スウィート「パソコンできなくても家でノートに書いていましたよね？」

ノーです。ソナナ事シテナイヨ？

アル「テストが悪い結果で帰ってくることだろう…」

スウィート「それでは十七話どうぞ」

…テストがあるからいけないんだよ（ボソツ）

十七話 遠征の助っ人

真っ白い空間。辺りは全て、白。そこから話し声が聞こえた。

「ようやく戻ってきましたわね。まあまだ完全には戻ってきてはいませんけれど。」

高いソプラノの声が呟く。声はどこか嬉しそうだった。するとその声に続くように

「もう2匹も失敗してる…。どういふ事かしら。」

先ほどの声とは違う、とても鋭い凜とした少女の声が聞こえた。少女の声には怒りが少しばかり含まれていた。

「しょうがないだろ。時間が早いし。」

「あらあら。言い訳なんて珍しいわねえ。」

ふてくされている少年の声に反応したのは、先程と違う大人びているのんびりとした女性の声だった。女性はクスクスと笑っている。

「仕方なかるう。まだ完全に戻っていない。もっとも…貴様らには分からんだろうが。」

「ああ！？喧嘩売ってんのか、お前は！？いい度胸してんじゃねえか！」

「貴方に同感したくありませんが同感ですわ！！レディに対して無礼じゃなくって!?!？」

少し古風な感じの青年のような声に反応したのは、1番始めに喋ったソプラノの声と、気の強い少年の声。静かだった空間が煩くなる。そこに

「お前ら、やめんか。言い合いしても仕方ないじゃろつ。気ままに回復するのを持つしかないのじゃ。分かったか、若者達よ。」

年寄りみたいな口調で話す女性の声で、煩くなった空間がまたもや静かになった。女性はふうう…と息をついてから

「…当分出られんだろうがのう。」

そういうと、また息をついた。その息だけが、真っ白い空間に響いた。

「何やってるの?」

朝、太陽が昇るのを見たスイートが部屋でゴソゴソと何かしている、不意に後ろから声がかかった。スイートは驚いて体を揺らしてから、後ろを振り返る。

「シ、シアオ…。おはよう。」

「おはよう〜。ふぁあ…」

珍しくアルよりも早く起きていたシアオにスウィートは戸惑ったが、一応挨拶はしておく。スウィートはバッグに作業していたものを隠して、シアオの方を改めて見た。

「早いね？」

「なんか目が覚めちゃったんだよね」

シアオがアハハ…と行って笑う。スウィートもつられて笑った。するとシアオの後ろからムクリと何かが起きた。スウィートはそちらに目をやる。

「アル、おはよ。」

「…ん？ああ、おはよう。」

「おっはよー！ー！ー！！」

「うおっ！！？」

スウィートが挨拶すつとアルはいつもどおりに返したのだが、シアオに元気よく挨拶されると思い切り声をあげた。シアオはアルの反応に少々驚いたようだ。

「シアオが俺より早く起きてる…！！？」

「ちょ…何気に酷くない？」

「天変地異の前ぶれかもな…」

「アル！？嫌味！？それは僕に対しての嫌味だよね！？」

2匹のやりとりにスイートは苦笑した。アルの言葉にシアオが何かツツコミをいれているのはよくあることなので見慣れている。まあアルがシアオにツツコミをいれる事の方が多いのだが。見慣れている光景を見て「今日も平和だなあ」などと考えているスイートだった。

「今日は皆に新しい仲間を紹介するぞ」

「なんだ？また弟子入りか？」

「どんなポケモンなんゲスかね？」

今日の朝礼、少し違った。デイラの言葉に皆ざわつく。フォルテはいつものように欠伸をかき、アルはシアオの話に付き合っている。スイートは、何故か嫌な予感がした。

(まさか…ね。ないと思うけど…)

スイートがそんな事を考えていると、梯子の方からとてつもない悪臭がしてきた。弟子達一同、鼻をおさえる。

「く、臭いっ…！！」

「だからあつしがしたわけじゃ…！！」

「だから聞いてねえっつうの…！へいへい…！！」

新しい仲間の事でざわつけば、次は臭さでざわつく。フォルテは顔を思いつき鬨めた。アルとスウィートも嫌な予感しかしくなく、顔を顰めていた。シアオは他の弟子達同様、臭さで騒いでいる。

「ではこちらにどうぞ」

デイラがそう言うと梯子から……『ドクローズ』が降りてきた。

(嘘っ…!?)

スウィートの嫌な予感が見事に当たった。新しい仲間が『ドクローズ』かもしれない、という最悪な予感が。

「ズバットのホルクス・スリンガだ。へへッ。」

「ケツ、俺はドガースのギロウ・ヴィリチだ。」

「『ドクローズ』のリーダー、スカタンクのウエズン・スディームだ。覚えしてもらおう。とくにお前らにはな。」

そういつてスウィート達の方を見た。スウィートはあまりその視線に反応はしなかったが、フォルテは凄い形相で睨みつけ、アルも不満オーラが滲み出していた。それは先輩達もだった。

(臭い…こんなポケモン達と一緒に遠征なんて…)

(というかデイラと親方様は匂わないのか？臭くないのか?)

(親方様は寝てるから匂わないんだろ。)

(というか…フォルテさんから殺気が…)

「新しい仲間といっても遠征までだ 助っ人として遠征に参加して

もらう。いきなり息をあわせて協力しろ、と言われても無理だと思
うから数日間はギルドにいてもらう 皆、仲良く」

「できるかああああ！！そんな奴らと仲良くしろですって！？
死んでも嫌だわ！虫唾がはしるわ！何で朝からこんなに臭いのを匂
わなきゃならない訳！？朝からサイコ に不機嫌よ！」

「フォ、フォルテ！落ち着いて…」

ディラの言葉を遮り大声をあげたフォルテをスウィートが宥めよ
うとする。が、無意味だった。アルは思いつきり大きなため息をつ
き、シアオはオドオドしていた。

「し、知り合い…だったのか…？」

流石にディラもフォルテの迫力に押し負けたようだ。たじたじに
なっているのがよく分かる。

「あいつらとは少し喧嘩してしましましてね…。一方的にこつちが
悪かったんで遠征の間に仲直りをしようとおもってたんですよ。」

その一言を聞くとスウィートは軽くスカタンク、ウエズンを睨ん
だ。あちらが仲直りなどする気がある訳がない。邪魔はしてくるか
もしれないが。

「誰が仲直りなんてするモンですか！嘘ついてんじゃないわよ！！
遠征に来るな、この害虫もどきが いたっ！！」

「すみません、お構いなく。」

ピタツツッ

デイラの慌てように、弟子達は渾身の力を振り絞って声をだした。するとロードは声を出すのをやめ、いつもどおり部屋に入っていた。弟子達はホッと息をついてからいつもの仕事場についた。

()()(何だったんだろう……)()()

訳の分からない4匹を残して。

とりあえず4匹は疑問を抱きつつも、依頼を選びに行った。

因みに 今回の依頼を成功させるとランクが「ノーマルランク」から「ブロンズランク」にあがったとか…

その夜

「アニキ。腹減りやした。」

「確かにあんな食事じゃ足りないですよね。」

ホルクスとギロウが愚痴を言う。確かにホルクスとギロウの腹の音がなった。

「ギルドの奴らも寝たわけだし…食料庫行くぞ。」

「へっ?なんでですか?」

「馬鹿か。食料を盗みに行くんだよ。」

するとホルクスとギロウがパアツと顔を明るくさせた。

「行きましよう、行きましよう!!」

「飯だ、飯だー!!」

「お前ら静かにしろ。バレルだろうが。」

そう言って『ドクローズ』はギルドの食料庫に向かっていった…

十七話 遠征の助っ人（後書き）

フォルテ「……………」

……………（汗）

シアオ「もう沈黙いいから。なんなの、ホント」

だってフォルテが不機嫌なんだけど！？「自分是不機嫌です」オー
ラが凄いんだけど！？

シアオ「…先が思いやられるね」

フォルテ（遠征に参加させないためには…）

……………最近フォルテが黒いです（泣）

十八話 南の名前と強運者

「で…今日は何ですか？」

朝 朝礼が終わったあとデイラに呼ばれ、アルが先ほどの言葉をデイラに投げかけた。朝礼には勿論『ドクローズ』がいるため匂いが酷い。フォルテは今日も『ドクローズ』に一言嫌味を叫んでから、今この場にいるのだった。

「今日、お前達には…食料をとってきてほしいのだ。」

『食料??』

デイラの言葉に『シリウス』が首を傾げる。デイラは頷く。どうやら聞き間違いではないらしい。アルは怪訝そうな顔をしながら

「食料って…カクレオン商店に行けばいいんじゃないですか。イオラさんがとんで喜びますよ。きっと。」

と言った。確かにカクレオン商店にいけばリンゴや木の実などは普通に売っている。トレジャータウンにあるので買ってこれば済む話だ。だがデイラは「とってきてほしい」と言った。

「いや、普通の食料ではなく…セカイイチをとってきてほしいのだ。」

「セカイイチ…?何それ。」

ディラが言った言葉にフォルテが首をかしげた。無論、他の3匹も同じような反応である。

「…食事中に親方様が頭の上のつけてクルクルまわしている大きなリンゴのことだ。あれは親方様の大好物なんだ。」

「ああ…」

ディラに言われ、アルが食事中の事を思い出す。確かにプクリンはいつも大きなリンゴを頭の上に乗せて、器用にクルクルと嬉しそうに回しているのだ。

「でも…なんでいきなり？食料はきちんと調達しているはずじゃ…？」

スウィートが恐る恐るディラに尋ねた。別に「とってこい」と言うのはおかしくはない。ただ急すぎて変なのだ。

「それが、食料がいきなり減っていて…セカイイチだけが全てなくなっていたのだ。」

「…誰かが盗み食いしたって事ですか。」

アルがそういうと、ディラは首を縦に振った。スウィートはその話を聞いてあるポケモン達が頭に浮かんだが、考えないことにした。

「で？セカイイチってというのは何処にあるわけ？」

「リンゴの森と言う場所にある。普通のリンゴより大きいからすぐ分かるはずだ。」

先輩に対する態度ではないフォルテに、ディラはいつもどおりに教えた。アルはツツコミたかったが、グツと堪えた。

「頼んだぞ！アレがないと親方様は……」

「「親方様は？」」

シアオとフォルテが見事に言葉を八もらせて聞く。ディラはそのまま黙っていた。スウィート達が首を傾げていると

「親方様は………なのだ。」

「えっ……？」

何を言ったか全く分からず、4匹は声を合わせて声をあげた。4匹が怪訝そうな顔をしているとディラは慌てたように翼をバサバサツとバタつかせ

「と、とにかく！アレがないと大変なんだ！絶対に失敗するんじゃないぞ！？これは大切な仕事なんだからな！！」

といわれた。4匹の疑問ははれなかったのだが、ディラの様子を見ると何やら大変な事になる事だけは分かった。

「じゃ、リンゴの森に行こっか！！」

そついい、ギルドの梯子を上る4匹だった。

交差点

「ん…？」

いつもどおり長い階段を下りたのだが、交差点ではいつもどおりではなかった。ソーナノとソーナンスがいて、それに見たことのない穴があった。

「何あれ？あんな穴なかったわよね？」

フォルテが3匹に尋ねると、3匹は首を縦に振って頷いた。すると向こうの2匹はこちらに気づいたようで

「あ、お客さんナノ！」

「「「「へ…？」」」」

「今日から『パッチールのカフェ』がオープンしたノ！どうぞナノ」！

「へ！？ちょ、僕達まだ何も言っていないんだけど！？」

そうして半場強引にソーナンスとソーナノに押され、穴の中に入る羽目になるのだった……

パッチールのカフェ

「…何だ此処。」

アルが入って、1番始めに口に出した言葉。穴に入るとカウンタ―が二つあり、テーブルが並べてあった。結構広く、いろんなポケモンがくつろいでいた。

「うわぁ…何か凄いな。」

シアオが率直な意見を述べる。するとポケモン達がいきなり真ん中に集まった。シアオとフォルテは興味が湧いてきたのか、その集まりの中に入っていき、アルはため息をつきながら入っていった。残念ながらそんなポケモン達の集まりの入りたいとは思わなかったスウィートは、遠くで見守ることにしておいた。不意に

「そなたは行かないでござるか?」

「!?!?!?」

声をかけられた。スウィートは全員、集まりに行ったと思っていたのでかなり驚き、すぐさま声をかけたであろうポケモンを見た。そのポケモンはテッカニン。

「そんなに驚かれるとは…すまないでござる。拙者は月影^{つきかげ} 刃^{じん}でござる。あ、月影は苗字で名前は刃でござるぞ?おそらくそちらとは反対だと思うのだが…」

「えっと、ジンさん…でいいんでしょうか…？わ、私はスウィート・レクリダです…」

(やっぱ人見知りには直せないよ…)

声が小さくなり、少々机に隠れ気味で話す。刃は一応それを察したようだ。無理に尋ねようとしてもしてこなかった。

「その…なんで名前…？」

「ああ。拙者は此処から離れた南のほうから来ているから名前が違うのでござるよ。南は昔ニンゲンがつかっていた“漢字”といもので名前をつけているのでござる。最近はニンゲンも使わなくなってきたみたいでござるが。」

「あ、そうなんですか…」

漢字より“ニンゲン”という言葉にスウィートは反応していた。少し考えていると刃が動いた。スウィートは小さく体を揺らす。

「さて、拙者はこれで失礼する。ああ、スウィート殿に助言を。」
絶望的状况でも東の奥深くに行けばいい』と…。それでは失礼。」

それだけ言うとは去っていった。先ほどの言葉は全く意味が分からなかったが、スウィートは一応、胸に刻み込んでいた。それと同時に集まっていたポケモンが散らばりだした。

「あつ、いたいたスウィート！こっち、こっち…！」

見ると3匹集まっていて、フォルテが呼びかけていた。スウィー

トはフォルテ達の方に駆け寄った。

「どうだった？」

そう聞くとシアオがカウンターの方を指差した。そして

「えっとね…左のカウンターがパッチールのドリンクスタンド。食料を渡せばドリンクを作ってくれるんだって。で右が探検リサイクルとビッグトレジャー。リサイクルは商品に対応した道具を必要な数だけ渡すとその商品が手に入るんだって。あとビッグトレジャーはクジびきけんと引き換えにくじ引きゲームができるらしいよ。」

「あ、ありがとう…」

シアオの説明は思ったよりも早く、聞くのが大変だった。スイートはニッコリとはいかずとも笑顔でお礼を言った。

「さて…何かやる？」

「はいっ！僕、くじ引きやりたい！」

フォルテが尋ねるとシアオが元気よく拳手をし答えた。目をキラキラ輝かせて、まるで小さな子供である。フォルテがスイートとアルの方に目を向けると、スイートは苦笑いを浮かべていて、アルはいつもどおりの呆れ顔でため息をついていた。

「じゃ、もつくじ引きで異論なし？」

「なし！！ね、いいよね！？」

「もうなんでもいい。」

「私は別に構わないよ……？」

そういわれるとシアオは「やったー！」「とどびはねるように喜んだ。スイッチトは本当に無邪気だなあ、と考えつつもカウンターのほうによって行った。

「くじ引きするにはどうすればいい訳？」

単刀直入にフォルテがカウンターにいるソーナノに尋ねた。するとソーナノは顔をかえずにニコニコしながら教えてくれた。

「くじびき券だと何でもいいから4個道具が必要ナノ！」

「はい、技マシンの残骸4個。」

すぐさまバッグから残骸をだした。ソーナノは技マシンの残骸を受け取ると「くじ引き券」とかいてある紙を渡してきた。スイッチトは受け取った紙をジーツと見ていると

「じゃ、スイッチトくじ引いてね。」

「……………え？」

スイッチトは固まった。なぜ自分がやらなくてはならない？ここはよりたそうに目を輝かせていた張本人、シアオにやらせるべきではないだろうか？などと考えていると、すでにフォルテによってくじ引き券はソーナノの手に。

「さあ、どうぞナノ！」

「え、あの」

「ど・う・ぞ・ナ・ノ！！」

「……………」

これ以上言っても無駄みたいなのでスウィートは恐る恐るくじをひく。隣にはくじをガン見しているフォルテ。その隣には目をキラキラさせながら見ているシアオ。後ろにはスウィートに同情の目を向けているアル。そのメンツに少々怯えながらくじをソーナノに渡した。

「くじは赤ナノ！」

「赤ナンスッ！」

そう言つとソーナンスは後ろを向く。そして首を縦に1回だけ振った。その様子を見たソーナノが疑問符を浮かべながらソーナンスに声をかける。

「どうナノ？はずれナノ……？」

するとソーナンスは首を縦に振った。

「あたりナノ？」

するとまたまた首を縦に振るソーナンス。スウィート達は何がなんだか分からずにそのやり取りを見ていた。ソーナノは思いついた

ように

「えっ…それって…大当たりナノ…?」

ソーナノが聞いたにもかかわらず、なかなか反応を見せないソーナンス。ソーナンスをしばらく観察しているといきなり振り返り

「ソオオオオオー…ナンスッ!」

バゴンツツツ!!!

ソーナンスの声をともに、店の壁が打ち破られた。スイート達を見ると、店の壁の穴からルンパツパとキレイハナ4匹がでてきた。勿論客の注目はそっちにある。スイート達も論外ではない。

「オーイエー!!!」

ルンパツパがそう言うと、キレイハナがルンパツパを囲むように並ぶ。そして 踊り始めた。

(((何!?)))

スイート達4匹が軽くパニックに陥っているのにも関わらず、ルンパツパ達は踊り続ける。

キレイハナが回ったり、ルンパツパは真ん中で踊っている。いつ

のまにか曲が流れ、ルンパツパとキレイハナ達がリズムよく踊っている。見ると、パッチールもふらふらと踊っていた。ルンパツパとキレイハナが回って決めポーズをとった瞬間　白い光が辺りを包んだ。

「きゃっ！？」

「え、何！？」

「何なのよ、一体！？」

「この光なんだ…！？」

スウィート、シアオ、フォルテ、アルが順に声を上げる。店の客も声をあげ、手で目を隠していた。そして光が収まり、目を開けるとソーナノとソーナンスが嬉しそうな顔をしていた。スウィート達はすぐに反応出来なかった。

「おめでとうナノ！これ、大当たりの景品ナノ！！」

そういつてソーナノが渡してきたのは、金色のリボンだった。スウィートはマジマジと見て、シアオ達に見せる。

「これ、何なの？」

「それは…金のリボンじゃんっ！！それすっごく高く売れるんだよ！！」

シアオが嬉しそうに目を輝かせる。スウィートはもう一度リボンに目を向けると、バッグにいれた。なくしたら怒られるだろうかなどと思いつながら。

「さて…もういいか？あんまり待たせると怒られるぞ。」

「あつ、そういえばそうだったね！急がなきゃ！！」

アルが言うとシアオが思い出したように言った。スイートはシアオの発言に、忘れていたのか？と疑問に思ったがあえて聞かずにスルーし、リンゴの森へと向かうのだった。

十八話 南の名前と強運者（後書き）

刃「何処でござるか、此処は」

…新キャラの月影^{つきかげ} 刃君^{じん}です。コイツめちやくちや書きにくい。

スウィート「不思議な喋りですよね」

シアオ「語尾が“ござる”って…。言いにくそう」

刃「慣れたらそうでもないでござるぞ?」

あー、書きにくい…。なんでこんなキャラにしたんだろう…

十九話 セカイイチと謎の…（前書き）

もう二ヶ月…。早いなあ…

シアオ「早いねえ。」

クリスマスまでには目標のトコまでいきたいけど…無理かもな、コレ

アル「早速諦めた、コイツ…」

……それでは十九話どうぞ！

十九話 セカイイチと謎の…

リンゴの森

「もぐもぐ…此処のリンゴ美味しいね！」

「アンタそれ何個目よ……」

シアオは入ってからずっとリンゴを食べている。フォルテの質問には「えーっと…3個目？」と答えているが、もう4個は普通に食べている。

「シアオ…太るよ？」

「大丈夫だよ！沢山動いたらいいだけだし」

スウィートがさりげなくもう食べるのをやめたほうがいい、と忠告したが、シアオは全く気にしていないようだった。これ以上は無駄だと思い、スウィートは言うのをやめた。

リンゴの森、名前の通りリンゴが沢山ある森だ。中には小さいのや大きい、甘いのも酸っぱいものなどさまざま。そして何より虫・草タイプのポケモンが多い。つまり

「火炎放射ッ！！」

フォルテが有利である。先ほどからフォルテは絶好調で敵を倒していつている。時々森まで燃やしそうで恐ろしいが。

「そっいえば…親方様がどうしたんだろうね？」

スウィートがギルドでのディラの事を思い出し、3匹に聞いてみた。シアオ達にも分からないみたいで、進む中ロードがどうなるのか考えながら進んでいった。

リンゴの森 奥地

リンゴの森の奥地。そこには大きな木が一本聳え立っていた。木には

「凄い、スゴイ!!! 沢山セカイイチがあるよ!!!」

シアオの言うとおり、セカイイチが沢山生っていた。スウィート達は木を見上げる。沢山あるのはいいのだが……高すぎる。

「ね……どうやって取るう?」

スウィートが3匹に問う。シアオとフォルテは勿論、アルまでもが考えていた。少しするとアルが顔を上げて

「なあ、スウィートのしんくうぎりあそこまで届くか?できるだけ小範囲で」

「うん……出来ると思う。けど」

スウィートはアルの問いに答えた後、セカイイチが生っている木の方に目を向けた。いや、睨みつけた。そして思いきり息を吸い込んで

「そこにいるのは分かってるの！しんくうぎり！！」

ヒュンツツツ！！

「ぐああ！！」

「うっ！？」

スウィートが放ったしんくうぎりの音とともに、木の後ろから呻き声もれた。シアオ達は驚き、急いで木の方を見た。そこからは

『ドクローズ』がでてきた。

「な、なんでアンタ達がいんのよ！？」

フォルテが『ドクローズ』を睨みつける。『ドクローズ』は「イテテ…」などと言いつつ木の前に出てきた。ウエズンとギロウが前に出て、ホルクスは後ろに下がっている。

「何をしにきたんですか？その様子じゃ…邪魔をしに来たようですが。」

「ククツ…。よく分かってるじゃねえか…」

ウエズンが怪しく笑う。スウィートは戦闘態勢にはいる。アルも身構えている。ウエズンとギロウは笑みを全く崩さない。すると2匹は一步後ずさり、木に近づくと

「避けれるモンなら避けてみな！」

「喰らえ、俺とギロウの毒ガススペシャルコンボ！！」

『！！！？？』

ウエズンがそう言うと同時に、スウィート達の視界が紫色の煙に包まれた。スウィート達は“毒ガス”と聞いて何とかしようとするが、範囲が大きすぎる。

「くっ…！！」

体が動かなくなっていく、意識も朦朧としてきた。スウィートが回りを見ると3匹とも倒れていた。何とか踏ん張ったが毒ガスがはれる直前、スウィートは意識を手放した……

「ククツ、あんな大口叩いてたのにこの程度か！」

ウエズンは倒れている4匹を見ると鼻で笑った。その笑いが4匹に届くはずはない。

「アニキ〜！もう1つの方も上手くいきやしたよ！！」

「よっしゃ！完璧ですね！」

ホルクス言葉を聞いて、ギロウが嬉しそうに声を上げる。ウエズンも満足いったように笑った。

「よし、例の物も持ったな？」

「ハイ！持ちました！」

ホルクスがバッグを見せる。中に何が入っているかは分からないが。

「よし、ズラかるぞ。もう用はねえ。」

「へっ！じゃあな、弱い探検隊！！」

ギロウがスイート達に向かってそう言つと、満足そうに『ドクローズ』は踵を返そうとした　　が

「おいおい…何勝手に帰ろうとしてやがんだ…？このまま無事に帰れるなんざ思つてねえだろうな！？」

とてつもなく荒い口調の声に止められた。『ドクローズ』は驚き後ろを振り返つた。3匹は目を見開いてそのポケモンを見た。

「お、お前なんなんだ！？」

「ああ！？黙れ、このくそ野郎どもが！俺様は今ためーらのせいで不機嫌なんだよ！覚悟は出来てんだろうなア！？」

ホルクスの震えた声にそのポケモンはイライラしているのか、適当に叫んで返した。ウェズンはギロウに耳打ちをし、ホルクスに顎で後ろに下がるよう命令した。ホルクスはすぐに後ろに下がる。

「俺達は此処で時間くつてる訳にはいかないんだよ！！もう一度だ、毒ガススペシャル」

「くたばれ！！ファイバニキス火焰念動！！」

ドツゴオオオオオオンツツ！！

激しい音がし、黒い煙が辺りを覆う。そしてはれてきて様子が見えると、そこには……焦げた『ドクローズ』の姿が。

「へっ、呆気ねえな。」

鼻をフン、とポケモンが鳴らす。するとそのポケモンの脳内に

《…手荒ですわね。起きたときに怪しまれるでしょう？》

高い女性の声が響いた。とても呆れたような感じだった。そのポケモンは

「なんか文句あつか！？」

《この方達の後始末をするのもわたくしなのですよ？もう少し考えてほしいものですわ。》

「うつせえ！！じゃあ最初から俺様じゃなくてテメーがやりやがれ！！」

《貴方が先に出たのでしよう！？わたくしがやりたかったですわ！》

ポケモンと声はぎゃあぎゃああと揉めだす。すると声の方はふう、

と息をついた。すると、『ドクローズ』の体が宙に浮き、森の奥まで運ばれていった。

《今回だけですわ。ありがたく思いなさい。わたくしは先に戻っておりますわ。》

すると声は脳内から消えた。ポケモンはチツ、舌打ちしてから倒れこんだ。

「ト…スウィート…！」

「う……………」

誰かの声がし、スウィートはうつすらと目を開く。最初はぼやけて上手く見えなかったが、だんだんはつきりしてきてフォルテだという事が分かった。

「フォルテ…。あつ、『ドクローズ』は…」

バツと体を起こしてスウィートは辺りを見回すが、いるのはシアオとアルとフォルテだけ。他は誰もいなかった。だが、木の近くに一部、焦げた跡があった。

「あ…あれって…？」

「え？あ、あの焦げ跡？…分からない。僕達が起きたらもうこうな

つてたから……」

シアオがこげた部分を見ながら話してくれた。だが、だとしたら誰かが此処に来たのだろうか。そうスウィートが考えているとシアオが笑顔で

「そんな深く考えなくて良いって！ どうせフォルテが寝ぼけてたとかそんななんだって！」

「アンタはあたしに喧嘩売ってるわけ？ 買っわよ？」

スウィートは苦笑いで2匹を見た。シアオは顔がひきつっていてフォルテはいつも使う黒い笑みを浮かべていた。だが重いため息によつて中断させられた。そのため息は、勿論アルのもの。

「どうすんだよ……。セカイイチは全部腐ってた。おそらくあの毒ガスのせいだと思うが……これじゃ不味いんじゃないか？」

「えっ……腐って……？」

スウィートが一本の簀え立っている木を見る。セカイイチは紫色に変色し、ベトベターフードになっているものも。スウィートは顔が青くなるのを感じた。

「ディラ、さんが……」

「絶対怒られる。何があつても」

アルは困ったような顔をしていた。それはシアオやフォルテも論外ではない。スウィートが顔を青白くしながら

(ど、どうしよう…。これって絶対絶命的な…)

などと考えていると、不意にあのポケモンの言葉が頭の中で再生された。

ああ、スウィート殿に助言を。『絶望的状况でも東の奥深くに行けばいい』と…。

「東の奥深くツー!」

スウィートがいきなり声をあげたので、シアオ達は驚いてスウィートを見る。スウィートは皆に見られると顔を赤くし顔をふせ謝った。

「あつ、あの…ちょっと東の方に行ってみてもいい…?」

スウィートが恐る恐る聞く。3匹は顔を見合わせ、それぞれの意見を述べる。

「もう早めに帰ったほうがいいんじゃないかな…? どうせ怒られるだけだし…」

「きつともう見つからないわよ…」

「……………少しだけ、行ってみるか」

シアオ、フォルテは反対の意見をのべたのだが、アルだけは賛成した。シアオとフォルテは目を見開いてアルを見た。

「なんだ、その目は…」

「だって…アルだったら『時間の無駄だ』とか言っと思ってたのに…」

「しょうがないだろ。ディラさんのあの様子を見ると呑気に帰ってられるか。少しの可能性にかけてみるしかないだろう」

アルのその一言を聞いて、スウィートの顔が明るくなる。シアオとフォルテはまたまた顔を見合わせてから、頷いた。そしてシアオがリーダーっぽく一歩進めた

「じゃあとつとと行っちゃおう！」

「そっちは西方向で反対だけだな」

が、やはりお馬鹿なシアオだった。シアオがピタッと動きを止めたのを見ると、アルは大きなため息をつきながらシアオが行こうとしていた方向とは真反対、東の方に進んでいった。

リンゴの森 奥地の東

「す、い、い…」

スウィートは目の前の光景に絶句した。それはシアオ達も同じだった。目を見開いて見ている。その訳は

「こんなに沢山、セカイイチがあるなんて…」

そう、フォルテが呟いた通り目の前には　セカイイチの木が五本ほど聳え立っていたのだ。中には下に何個か落ちている。

「これで…足りるよね！何個かとって早く帰ろう！」

シアオがせっせと落ちているセカイイチを拾い始める。するとフォルテも拾い始めた。だが 스위트 は動けずただ考えていた。

(刃さんって…一体…。どうして分かったの…！？)

「スウィート？大丈夫か？」

声をかけられ 스위트 は我に返る。かけたアルは怪訝そうな顔をしていた。

「な、なんでもない。大丈夫。それよりセカイイチは…」

「沢山とったわよ！スウィートの言うとおりだったわね！さ、帰りましょ！」

フォルテの手にはリングゴが1つ。シアオはバックに何個入っているのか…とりあえずバッグの形が違つものになってポコポコしていた。

スウィートはバッチをかざし、ギルドに戻った

ギルド

「ディーラさーんツッ!」

シアオが大きな声でディラを呼ぶ。ディラは顔を不安そうに歪ませながらやってきた。理由はセカイイチの事だろう。

「どうだった…? 取ってこれたのか…?」

少し声を震わせながらディラが聞く。シアオのバッグを見たら一目瞭然なのだが、ディラはそれほど恐れているようだ。シアオはバッグを開く。するとゴロゴロとセカイイチが出てきた。

「これでいいですか? 一応取れるだけ取ってきたのですが」

「よくやった、お前達! これでアレを喰らわなくて済む! ご苦労だったな」

スウィートの言葉を遮りそういうと、ディラはセカイイチを全て持ってどこかに行ってしまった。スウィート達はあまりの速さに呆然とディラの後ろ姿を見ていた。

「さーと! 部屋行くわよ! 夕飯までまだまだあるんだから!」

「そうだな。疲れたし」

フォルテがさっさと部屋に向かい、アルは重い足取りで部屋に行った。スウィートとシアオは急いでついて行く。そして部屋に入る

と

「さて、セカイイチ食べるわよ！1個隠してたんだから！」

『え？』

フォルテの手にはセカイイチが1つ。フォルテは3匹をほつてとつとセカイイチを4つにキレイに割った。

「いったただつきまーす！！」

「じゃあ僕も！いただきまーす！！」

フォルテとシアオは手を合わせると、セカイイチにかぶりついた。スウィートとアルは顔を見合わせて苦笑してから、セカイイチを食べた。

因みに『ドクローズ』は夕飯前に、少し焦げた体でギルドに戻ってきたとか…。それを見てフォルテが馬鹿にしていたのは、言うまでもない。

十九話 セカイイチと謎の…（後書き）

フォルテ「はっ、いいザマじゃない！アイツら！」
スウィート「あの方達は誰ですか？」

読者様の何人かは気づかれた…かも。

スウィート達はまだまだ気づかないって！

スウィート「一人称が凄くなかったですか？」

フォルテ「俺様……。きつとナルシストなのね」

ええ。きつとナルシストだよ（笑）

二十話 散歩（前書き）

スウィート視点でとりあえず…！

思いつきです。オマケみたいな番外編みたいな…

それではどーぞっ！

二十話 散歩

「どつする？アル…」

スウィートが困ったような顔をしてアルに尋ねる。アルははあ、とため息をついてから

「…どつするこつするも、アイツらなあ…」

アルがチラッと目をやる。スウィートもそちらに目をやった。そこには

「お前達は何度言ったら分かるんだ！これで二度目とはこのギルドで初めてのことだぞ！？」

「うう…足、痺れてきたあ…」

「早く終わらせなさいよね…。長いのよ…」

フォルテとシアオが仲良く(?)ディラにお説教を喰らっているからである。理由は…寝坊である。シアオとフォルテというと、一度説教をうけている。

「仕方ない…。そこら辺、ブラブラしてきていいぞ、スウィート。まだ此処に慣れてないだろ？」

「えっ、いいの？」

スウィートが驚きの目でアルに尋ねる。確かにスウィートはまだ慣れていない。だが探検隊の仕事があるので自由に探索など出来なく、ゆっくり見れていない。

「ああ、あの様子じゃまだまだかかりそうだしな。終わったら呼びに行くから、安心して行って来い」

「あ、ありがとう。じゃあお願いね…?」

そう言つとアルは頷いた。スウィートは少しウキウキしながらギルドの梯子を上るのだった。

(Side・スウィート)

「まず…トレジャータウンをゆっくり回るのかな…」

いつもはゆっくり見ている暇なんてないしなあ…。せつかくアルもああ言ってくれた事だし、いろいろ見て回るう！そう思いながら私はトレジャータウンに足を運ぶ。

「まあ見て回るっていつでも、特になんにもできないしなあ。」

そう独り言を呟きながら歩いていると

「あら、スウィートちゃん?」

「あつ、フィーネさん、シャオさん。おはようございます」

声をかけてきてのはフィーネさん。隣にはシャオさんもいる。私

はペコリと頭を下げ、挨拶する。フィーネさんはクスクスと笑っていた。

「あの…?」

「ああ、ごめんなさい。スウィートちゃんって凄いい儀だなあって思ってた。」

「確かにね。敬語も使わなくていいのに。」

フィーネさんとシャオさんの言葉に「うっ」と詰まってしまう。私だって意識している訳じゃない。無意識にやっちゃうんだよね…。シアオ達には大丈夫なだけ…。というか律儀って前誰かに言われた気がする…。

「そつえば今日は探検隊の依頼は?」

「あつ、シアオとフォルテが寝坊してしまっ、て今お説教を喰らうるところで…。私はトレジャータウンをブラブラと…」

「そ、そうなの…。大変ね。」

シャオさんの質問に私が答えると、フィーネさんが苦笑いをしていた。まあ、確かに大変ですけどね…。するとフィーネさんのお腹が鳴った。

「…ごめんなさいね…。昨日色々あって夕食を食べていないの。」

フィーネさんは顔を赤くして伏せてしまった。そんなに恥ずかし

がらなくても…。シアオなんて夕食前にはいつもお腹鳴ってますよ？

「今から朝ごはんとして食べようと思ってたんだ。」

「そ、そうなんですか。引き止めてごめんなさい。」

私はまたしても頭を下げてお辞儀した。顔を上げるとフィーネさんが飛びつきりの笑顔で

「じゃあまた今度、またね」

「は、はい。」

そう言うつとフィーネさんはシアオさんと一緒に行ってしまった。やっぱりフィーネさんは笑顔が綺麗だなあ…。って、時間なくなっちゃっ！

私はトレジャータウンより奥の方に足を進めた。そこには先客がいらっしやいました。あれは

(フィタンさん…?)

確かハダル先輩の父親…だったはず。海を見つめてジツとしている。…どうしよう。これはばれないように撤退するべきかな…。などと私が考えていると

「海よー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「！！？？？」

いきなりフィタンさんが叫びだしたのもうビックリ。思わず私

は飛びあがってしまいました。幸い、フィタンさんは気づいていないようでまだ叫んでいる。私はそそくさとその場を後にした。

パッチールのカフェ

「ふう…結構回ったかな…」

私はパッチールさんに白いグミでジュースを作ってもらい、そのジュースを置いてあるテーブルでゆっくり飲んでいる。パッチールさん曰く「極上の出来」らしい。甘くてとつても美味しい。

その後、トレジャータウンの不思議な置物みたり、お世話屋ラッキーのリネーノさんの育て話を聞いたり、交差点の水飲み場の意味を考えてり…。それでもアル達がまだ来ないのでギルドの階段の段を数えてみたり…。そして今に至ります。

「まだかかっているのかな…お説教。」

デリラさん、怒ってたもんなあ…。二度目だしやっぱり時間がかかるのかも。そうおもいながらジュースを飲んでいると

「あれっ、スウィート！お久！」

「へっ…。あ、セフィンさん。と…刃さん？」

声をかけてきたのはセフィンさんでした。その隣には昨日会った刃さんもいた。…あれ？知り合い??

「それでスウィート殿、昨日の助言は役にたったでござるか？」

「えっ、あ…はい。とつても。ありがとうございました。でもなんで…」

あの助言がなければ完全にディラさんに叱られていた。セカイイチなど取れているものか。私は感謝しているが、だが何故あんな助言をしたのか理解できなかった。

「刃はな、占い師の仕事やってんねん。裏では情報屋。秘密やで？」

「う、占い師に情報屋…！？」

裏つてなんですか！？とツツコミたいですが止めておきましょう…。きつと深い理由があるはず…。でも確か情報、といえばディラさんがギルドの情報通だったな。

「拙者の占いも外れる事はあるでござるから、あまり自信がないんでござるよ。」

「でも当たってましたよ？」

だから助かったんですけど…。自信を持って全然大丈夫だと思っるのは私だけですか？するとセフィンさんは私の隣に座り、刃さんは私達の前に座ってジューズを注文。

「で、スウィートは何やってんの？仕事は？」

「シアオとフォルテが寝坊してディラさんにお説教を喰らってます。アルは…付き添い…ですかね？」

付き添いというか…見ていただけけど。シアオ達のお説教、いつになったら終わるのかな？

「そういえばギルドでは今、遠征メンバー選抜をしていたでござるな。大丈夫なのでござるか？」

「……多分。寝坊ぐらいでは大丈夫だと思いますがー…」

そういえば今、遠征のメンバー選抜中だった…。これで落とされる事はないと思うけど…。だってセカイイチの仕事はきちんと成功させたし…ね。

「『ドクローズ』が参加するそうでござるが…気をつけた方がいいでござるよ？悪い情報なら漂っているでござるからな。」

「ああ、アイツらか！うち依頼頼んだことあるわ！勿論、驚かせるためやで？あのズバットがめっちゃビビリやって面白かったわ。フォルテには負けるけどな。」

「そ…そうですか。気をつけます。」

『ドクローズ』までもに依頼を頼んで驚かせたって…。そして悪い情報が漂ってるってどれだけ…？刃さんが情報屋って事は確かみたいです。

「あつ、スウィート！終わったよ〜！」

「げっ！！あたし外に出てるわね！？」

声が出た方を振り返るとそこにはシアオとフォルテ、そしてアル。フォルテは逃げようとしてるみたいだけどアルに掴まれてる…。

「あ、セフィン！ やっほ〜」

「やっほ、シアオ。久しぶりやなあ。フォルテもアルも。」

シアオとセフィンさんは仲がいいみたいで、とても会話が弾んでいるみたいで。フォルテは相変わらず逃げようとしているみたいで…賑やかだなあ。

「で、そっちは…？ スウィート、知り合いか？」

アルが言っているのは刃さん。なんで分かるか？ だってアルの目が完全に刃さんの方に向いてるんだもん。

「拙者は月影 刃。南の方からきた者でござる。セフィンとは幼馴染でスウィート殿とは昨日知り合っただけでござる。」

「ああ、そうか。俺はアルナイル・ムーリフ。探検隊『シリウス』のメンバーだ。んでこっちはフォルテ・アウストラ。ゴーストタイプが苦手だから逃げようとしてるだけだから。よろしく。」

「僕はシアオ・フェデス！ よろしくね！」

フォルテは逃げようとしているが、アルは手を緩めない。流石アル…。刃さんはシアオ達に一礼した。

「シアオ達には教えてもええよな。刃は表は占い師、裏で情報屋やっとな。なんかあったら頼み。因みに秘密やで？」

「情報屋！？占い師！？じゃあ今日の運勢も占えるの！？」

「シ、シアオ…。声大きいよ…」

誰も見てないから良いけど。秘密って言われたんだから小声じゃないと…。シアオは1回頭に疑問符を浮かべてからぎこちなく頷いた。…理解したのかな？

「おいコラ、シアオ。今日はお前らのせいで時間減ってたから、んな事してる場合じゃない。とっとと行くぞ。スウィートももついいか？」

「え、うん。大丈夫。」

私はジュースを飲み干してグラスを返す。するとセフィンさんがいきなり声をあげた。…嫌な予感がする。

「な、仕事やる気あらへん？次は“闇の館”っていうダンジョンで！報酬は10000ポケで！」

「10000ポケ！？やろつよ、やろつよ…！」

フォルテの事をすっかり忘れてる…？というかダンジョン名からしてフォルテが無理そうな感じなんだけど。セフィンさんはわざと？フォルテは勿論激しく首を振っている。でも10000ポケって…。どこからそんな額がでてくるんだろ？不思議なんだけど…。

「セフィンさん、そんな額出しちゃって大丈夫なんですか？」

「勿体無いな。じゃあまたね、セフィン、刃！」

「それでは。」

私達が店を出ると、アルが呆れ顔でフォルテを見ました。フォルテは「今日は大凶よおお！」とか叫んでいて…。もうなんともいえない状況でした。私的にはトレジャータウンの事やセフィンさん、刃さんの事を知れてよかったんだけどね？

因みに…お説教の時間は25分かかって、シアオの足が痺れて動けなかったから、5分程度かかったみたいです。そして今日の依頼ではフォルテが罫に2回、シアオが3回もひっかかって…今日は大変だったなあ…（アルが）

二十話 散歩（後書き）

スウィート「…ホント遊んでるじゃないですか、コレ」
アル「ちゃんとやれよ、アクア」

だって刃の前の予知について説明いつしよっ…って考えてたら思い
ついたんだもん！しょうがないじゃん！

アル「言い訳し始めたぞ」

スウィート「アクアさん、言い訳はいけません。」

言い訳!?

というかアルはともかくスウィートまで酷くなってきてない!?

スウィート「え、そうですか…?（自覚なし）」

二十一話 遠征メンバー決定！（前書き）

ちよつと（？）短いです。

ちよつとでもないかも…

それではスタート

二十一話 遠征メンバー決定！

「できた…！」

スウィートはそう呟いて笑顔になる。とても満足したような笑みだ。太陽はもう昇ったので、そろそろアルが起きるくらいだろう。そうスウィートが考えていると、丁度アルが起きた。

「おはよう、アル。」

「ん…おはよう、スウィート。ふぁ…！」

アルは挨拶するとすぐに眠たそうに欠伸をした。これもいつものおりだ。あとはシアオとフォルテが起きるかどうかなのだが、気持ちよさそうにスヤスヤ寝ていて起きる気配は全くない。

「え…つと…はい、アル。」

「…？何だ、コレ」

スウィートが渡したものは黄色の石がついたペンダント。アルは不思議に石を見ていた。スウィートは恥ずかしそうにおずおずと

「そ、それ“滝つぼの洞窟”に行った時に拾ったの。アルの分は、それ。」

（多分、それシトリンっていう宝石で「ストレスを癒す」っていう効果なんだけどね…）

などと考えながら説明した。石の意味はスイートが「アルはま
とめ役だし、いつもため息ついたり呆れ顔になってることあるから
ストレスが溜まっているんじゃないか」と考えたからこの石にした
のだ。

アルはまじまじと見てから首にペンダントをつけた。

「ありがとう。」

「ど、どういたしまして／＼」

面と向かってお礼を言われて照れてしまったスイートは顔を俯
かせながら返事をした。あとシアオとフォルテの分もあるのだが、
毎回こうお礼を言われてしまっただけは照れてしまふなあ、と考えるス
ウィートだった。

因みにシアオには前の依頼で貰った「勇気の石」をペンダントに
し、フォルテにはマラカイトという濃い緑色の宝石。効果は「邪悪
なものから身を守る」。決してゴーストタイプから身を守る、とい
う訳ではないと言いつけるスイートだった。

2匹が起きたのは朝礼に行く寸前で危なかったのだが、なんとか
ペンダントを渡したスイートだった。（勿論お礼を言われた。）

「さて…それでは遠征メンバーの発表を行う！」

「い、いよいよですわね…」

「緊張するゲス…」

ディラがそう言うと一気に弟子たちが騒ぎ出す。遠征に行くと言表されてから、全員が頑張ってアピールしてきたのだ。つまりセカイイチの依頼を成功させたからといって、遠征のメンバーに入るとは限らないのだ。スウィートはドキドキしながらディラの言葉を待った。シアオ達もそれは同じだ。

「親方様、メモを。」

ロードは無表情でメモを渡す。寝ているのか起きているのか全く分からない。

「呼ばれたものは前に出るように。それではまず

「
ラドン
」

「よっしゃあ！！まあわしが選ばれるのは当然だがな、ガハハハ！
」

(よく言っ…)

(よく言うゲスね…)

(てか凄い煩いんだけど…)

ラドンはすぐに前に行く。そのとき、先ほどの発言のせいで他の弟子からは冷ややかな目で見られていた。ディラは構わず続ける。

「次

スウィート シアオ フォルテ アルナイル
」

『えっ???』

スウィート達がキョトンと目を見開いて声を見開いて声を短く上げた。弟子達は皆、スウィート達の方を向いている。少しの沈黙の後

「やったあああ!!僕ら選ばれたんだよ!」

とシアオがぴよんぴよん跳ねて喜んだ。スウィート、フォルテ、アルはついていけてなかったが、シアオの喜びようを見て、ハツとした。

「やった!遠征に行けるんだ!」

「よっしや!」

「…とりあえず前に行ってくれ。」

スウィート、フォルテが喜んだあと、アルが少し呆れた声で言った。スウィートはそう言われ顔を赤らめながら前に行き、フォルテは『ドクローズ』に向かって鼻で笑ってから前に行った。シアオはルンルンで前に行き、アルは嬉しいんだかなんだか分からない気持ちで前に行った。

「次…ルチル」

「きゃー!!!選ばれましたわー!!!」

若干(めっちゃくちゃ)はしゃぎながらルチルが前に行く。少々煩いかもしれないだろう。

「エート次…おお！？レニウム！」

「ええ！？あつしでゲスか！！！？？」

レニウムが目を見開いて驚く。だが全く前に出ようとしないう。デ
イラは首を傾げながら声をかける。

「おい、レニウム？前に来い。何やってるんだ？」

「あ、足が…感動のあまりに足が動かないゲスよ…ゲスッ。」

レニウムを見ると目に一杯の涙を溜め、体は誰が見ても分かる
おり震えていた。デイラはその様子を見てためらってから

「…とりあえずほつとくぞ。次 イトロ」

「よっしやああああ！！！」

誰よりも大きな声で歓喜の声をイトロが上げた。その瞬間、ロ
ド以外のポケモン達が耳をふさいだ。イトロは気にせず前にでる。

「えーとこれで遠征のメンバーの発表は って…」

デイラが終わろうとした瞬間、メモの端っこにまだ何か書いてあ
った。デイラは渋い顔をして

(こんな隅っこまで何か書いてある…。親方様の字は汚いから読み
づらい なんて言ったらエライ目にあうからここは我慢して)

考えていたようだが口に出していたのは全く気付いていない。そ

のため弟子達の視線がディラに大注目したのだが。

「あとは……アメリイ フィタン シャウラ ハダル ……つて！！全員じゃないですか！？」

「うん、そうだよ？」

ディラが勢いよくロードの方に向かって振り返ると、ロードはニコシしながら答えた。ディラは脱力しそうになったが何とか力を入れる。他の弟子達はポカーンとしていた。

「全員つて選んだ意味ないじゃないですか！？さらに留守番いないし、泥棒が入ったらどうするんですか！？」

「大丈夫 ちゃんと戸締りはしていくよ それに泥棒なんて入らないって、ね」

ロードの答えに、ついにディラは脱力した。そんなディラを見ながらフォルテは

（そんなに心配なら一匹で残りやいいのに。別にいなくても困らないんじゃない？）

などと考えていた。そんなフォルテの思考は誰も読み取れるわけがない。すると『ドクローズ』のリーダー、ウエズンが前に出てきた。

「親方様、私も思うのですが。メンバーが少し多すぎるのでは？」

「うん……。ともだちにそう言われると困るなあ……」

（ ）（ ）いつから“ともだち”になった!?!?（ ）（ ）

ロードに全員が心の中でツッコんだ。ロードは全く気付いていない。ウエズンはあと少し、と思いもう一言付け加える。

「それに、全員で行く意味などあるのですか？」

「えっ、そりゃあるよ!皆でいった方が楽しいでしょ？」

「……………は？」

ロードは顔をニコニコさせながら答えた。ウエズンは口を開いてポカーンとしている。それはホルクスもギロウもだった。

「僕、ずっと楽しみだったんだ〜 皆、遠征思いつきり楽しもうね!?!」

『お、おおおおおおお!?!』

ロードが弟子達の方を振り返ると、全員嬉しそうな顔をして声を上げた。ロードは満足そうにしていた。ディラはため息をついてから渋々

「じゃあ遠征のメンバーは（全員だけど…）説明を行うから、遠征の準備をしてから此処にもう一度集まること。それでは一旦解散!」

と言い、弟子達は散らばり始めた。

交差点

「準備、準備……。何を準備すればいいんだろう？」

シアオが交差点でスイート達に聞く。スイートは困った顔をして首を傾げ、フォルテは知らん顔、アルはまともに答えた。

「木の実やリンゴはいるんじゃないか？あと種とか……。いらぬものを倉庫に預けて、あとカクレオン商店にも寄らなきゃな。」

アルの答えに頷くと、『シリウス』はトレジャータウンに向かった。

ギルド

「全員揃ったな。では説明するぞ。今回行くところは“霧の湖”という所だ。皆、不思議な地図を広げてくれ。」

デイラの言葉に全員が不思議な地図を広げる。デイラは全員広げたのを確認すると、そのまま説明を続ける。

「東の方にあるのだが……。そこは霧でおおられており、故に誰も確認

されていないらしい。噂では、とても美しいお宝がねむっていると
いわれている」

デリラが説明しながら指指した場所は、ここからかなり遠い、雲
に覆われている場所。行くとしてもかなり時間がかかりそうだ。

「だがギルドからはかなり遠い…。そこで、途中であるベースキャ
ンプまでは、グループに分かれて行ってほしい。今からそのグルー
プを言うからよく聞け！」

と言うと、騒がしかったギルド内が静まり返った。

「まず1グループ目は…ラドン ルチル ハダル レニウム」

「お前ら！わしの足を引っ張るなよ！」

「それはこちらの台詞ですわ！」

「な、仲良くしましょうよ…」

「なんか心配ゲス…」

ラドンの言葉にルチルが反論する。それを何とか宥めようとする
とハダルと不安そうなレニウム。このグループはとてつもなく仲が
悪そうだ。

「2グループ目、フィタン アメトリー シャウラ イトロ」

「いいメンバーだ。」

「皆さん、よろしく願いします！」

「グヘヘ。よろしく。」

「1番目指すぜ！ヘイヘイ！」

このグループは1グループ目とは違って仲が良さそうだ。

「3グループ目は、スウィート シアオ フォルテ アル」

「変わらないね。」

「『シリウス』って言えば簡単なのにね？」

「あ、それあたしも思った。」

「お前らな……。」

スウィートはポツリと眩き、シアオとフォルテがディラに対して素直な意見を述べる。アルは呆れ顔でまたため息をついた。

「『ドクローズ』の皆さんは単独でお願いしますね。」

「クククツ、承知しました。」

『ドクローズ』のリーダー、ウエズンは怪しい笑いを含めて返事をした。

「あと……親方様とワタシで行って」

「えええ！？ディラと2匹だけ！？つまんなあい！！」

小さな子供のように反論するロード。ディラはぐったりとしながら

「これは大切な作戦なんです。ワガママを言わないで下さい。」

「……………ケチ。」

ロードはすねたような顔をしながら呟いた。その呟きは弟子達全員に聞こえていたのでおそらくディラにも聞こえているだろう。ディラはスルーして全員の方を向いた。

「では皆、はりきっていくよ……………！！」

『おおお……………！！』

二十一話 遠征メンバー決定！（後書き）

きつと誰が誰だかわからなくなったはず…。

六話を見れば分かります！まあ全員行くから分からなくてもいいか…

スウィート「何をブツブツ言っているんですか？」

いや、何でもないです。

さて遠征スタートです！！1月までには終わらせたいなあ…

アル「アクアが死ぬ気で頑張ったら出来ると思うぞ。」

シアオ「いや、無理でしょ？」

頑張るけど死ぬ気はヤダね。

フォルテ「絶対無理だと思っわ。」

酷っっっ！！???

二十二話 遠征の始まりと出会い（前書き）

シアオとフォルテが煩いです。つまり…アル君の溜息数が増えるわけ…。それではどうぞッ！！

二十二話 遠征の始まりと出会い

ギルドを出て少し歩いたところ、『シリウス』では

「だーから、絶対左!!」

「何言ってるの!迷った時は右でしょうが!」

フォルテとシアオが言い合いをしていた。理由は簡単。右と左に穴があり、分かれ道になっているのだが、それでどちらに行くか、という事である。シアオは左、フォルテは右で主張している。両者、一歩もひく気などないようだ。

「アルはどっちだと思う?」

「...どっちでもいいから黙秘しとこうと思う。」

スウィートが聞くと、アルは疲れたように答えた。その様子を見て、スウィートは黙ってシアオフォルテを見ることにした。言い合いはとまっていない。

「左の方が絶対正解だから!」

「何を根拠に言ってるのよ!?絶対右!迷った時には右って決まってるの!!」

「それはただの迷信でしょ!!」

「アンタの直感よりはマシだし、迷信なんかじゃないわよ!!」

あの言い合いが終わるかどうか本気で分からなくなってきたアルは、シアオとフォルテの方に歩み寄り、言い合いをとめる。

「…ちよつとストップ。これじゃ決まらないだろーが。」

「「うっ…」」

シアオとフォルテは言葉に詰まる。アルは2匹を交互に見てからため息をついた。そしてスウィートの方を見ながら

「コイントスでいいだろ。裏か表。はあ…くだらない。」

「あたしは表！」

「僕は裏！」

キーン

アルは何処から取ったのか、コインをはじいた。コインが落ちると全員がコインを見る。コインは 表。

「やった！あたしの勝ち！」

「まけたああああ！！」

（（コイントスするほどの事じゃないでしょ（だろ）…））

フォルテが勝ち誇った顔で悔しがっているシアオを見ている中、少し冷めた目でスウィートとアルが2匹を見ていた。

沿岸の岩場

「つと、メロメロ！ からたいあたり！！」

スウィートはトリトドンの攻撃を避けてからメロメロで相手をメロメロ状態にし、そこからたいあたり一撃で倒した。特性の「てきおうりよく」で威力が上がっているおかげでとても楽だ。

「こつちは終わったよ きゃっ！」

近くにいるアル達に声をかけようとしたら後ろから水鉄砲が放たれる。スウィートは気配を感じてギリギリで避けたが、水鉄砲を放ったポケモン、タマザラシが今度はアイスボールを放った。

「つ…冷たつ…！しん、くうぎり！！」

アイスボールが腹に当たったのだが、スウィートは態勢を立て直し、しんくうぎりを放つ。そこでタマザラシが怯んだうちにアイアンテールを打ち込むと、タマザラシは倒れた。

「冷たかった…」

スウィートは当たった部分を暖めながら呟いた。そしてシアオ達の方を見ると、フォルテが水タイプの攻撃を避けながら、一生懸命戦っていた。スウィートは一応「手助け」を発動させた。

「アリガト、スウィート！そして…調子にい…のるな…！シャドーボールッ…！」

フォルテがスウィートの方を振り返ってお礼を言うと、その笑顔が嘘のようになり、鬼のような形相になってシャドーボールを連打で打ちまくった。すると先程までフォルテに攻撃していたトリトドンとクラブは倒れた。

「はんっ、バーカ！」

「お前な…。大人気ないぞ。」

「どうせまだ子供だからいーのよ！」

フォルテが2匹を鼻で笑うとアルはすかさずツッコんだが、本人は気にしている様子も見せなかった。そしていつものように溜息をつくアルだった。

「…あれ？皆もう終わってたの？」

やはり遅いシアオだった……。

ツノ山 入口

「…結構進んだね。どうする？」

「野宿？わあ、楽しそう！」

何も言っていないのに喜ぶシアオ。スイートとアルは疲れ果てた表情でシアオを見た。まあ、全く気付いていないが。といっても野宿はベットもないので、地面で横になって寝なければならぬのだが。すると何も言わなかったフォルテが

「野宿反対ッ！！絶対嫌！！」

「…という意見の奴も出てきたんだが。どうするんだ？」

文句を言い始めた。アルはげんなりとしながらシアオとスイートに意見を求めた。スイートは苦笑して、シアオは口を尖らせた。嫌な予感しかないスイートとアル。勿論それは見事に当たった。

「もう遅いじゃんッ！そんなに急がなくていいでしょ！？」

「嫌！！絶対に野宿だけは嫌！それだけはぜーったいに反対！！」

((また始まった……………))

本日二度目のシアオVSフォルテの言い合いが始まった。アルは勿論、今回は珍しくスイートまでもが溜息をついた。それが、第2ラウンドの開幕。

そして10分後。

「で？分かれ道があるんだが。」

4匹の目の前にあるのは“沿岸の岩場”で見たようなものと同じ、

右と左に分かれている穴。

さっきの言い合いは結局フォルテがまた勝った。理由は「あたしが朝起きれなくてベースキャンプ行くの遅れても知らないわよ!？」。それを聞くとアルがフォルテに加勢したのだ。スウィートはうつらうつら、とうたた寝していたが。

「ここは勿論」

フォルテとシアオが声を揃えて言う。その瞬間、スウィートとアルにまた嫌な予感がよぎった。

() (また言い合いになる　!!)

スウィートとアルは耳を澄ましてよく聞く。2匹が同じことを言うように、と願いながら。すると

「右でしょ。」

「…ホッ。」

スウィートとアルは同時に安堵の息をついた。これ以上時間を口にする訳にもいかないので、とりあえず安心した。他2匹は首を傾げているが。

「じゃあ、行くか。夜になったら困るからな。」

パニックになっている。

「なんでそんなに苦手なの？」

何故こんなに苦手なのか。スウィートは気になってしょうがなかった。聞いてみた。

「む、昔…クモ（アリアドス）の巣に…引っかけたことがあってね…。んで」

「もういいから…。急ぐぞ、まだまだ出てくるぞ。」

「それだけは嫌ーーーーーッ!!」

「煩いッ!!」

シアオが思い切り叫ぶと、フォルテが思い切り尻尾でシアオの頭を叩いた。スウィートは久々だなあ、このやりとり…などと思いつつ前から進んだ。

スウィートはこっそりシアオが何回叫んでいたか数えていたとか…（本人曰く、8回）

ベースキャンプ

「もう夜…。1つのダンジョンだけでどれだけ時間かかったと思ってる。シアオとフォルテは苦手を克服しろ…?」

「「うっ……」」

アルが殺気を込めた目でフォルテとシアオを睨みつけた。2匹は顔をひきつらせている。“ツノ山”をやっとの思いで抜けたのはいのだが、時間は七時くらい。ダンジョン内で一時間は軽くいたということだ。スウィートは苦笑いしながら3匹を見ていた。

「ん……？テントがある、あれじゃないか？」

アルが指を指した方を見ると、テントがいくつもあった。スウィート達が近寄ってみるとそこにはプクリンの形をしたテントが……。誰がこんなものを作ったのだろうか？さらに目立ちすぎである。

「……す、凄いな。分かりやすい……」

「ちょっと悪趣味な気がするのはあただけかしら？」

「……かなり悪趣味じゃないか？」

シアオ、フォルテ、シアオがそれぞれ感想を言う。まあ確かに悪趣味な感じはする。暫くテントを眺めていると

「ん？『シリウス』か？」

「あつ、ディラ！『シリウス』だよ」

テントから出てきたディラが声をかけてきた。シアオはヘラツとしながら答える。

「早かったな、一番乗りだ 今日はまだ遅いからテントに入って寝なさい」

それだけ言うと、ディラはまたテントに戻っていった。フォルテは早速テントに入って行き、アルも疲れたような顔と足取りで入っていった。シアオも入ろうとするが、スウィートの様子が変な事に気がつく。

「スウィート？」

(ここ…懐かしいような…。見たこと、来たことがあるような気がする…。いつ…?いつ来たことが)

「スウィートってば!!」

「ッ!？」

スウィートが我に返ると、シアオが心配そうに顔を覗き込んでいた。つい考え事をして何も聞いていなかった。

「ど、どうしたの？」

「それはこっちの台詞だよ。さっきからボーっとして。フォルテ達はまだテント入ったみたいだから僕達も入る？」

「う、うん……」

シアオはスウィートが返事したのを聞くと、すぐにテントに入っていた。スウィートは不思議な感覚のことを考えながらも、テントに入った。

「ん…。今、何時だろ…?」

スウィートは不意に目が覚めて、テントから出る。あたりはまだ薄暗いが、少しずつ明るくなってきている。だがいつもよりは起きた時間が早いようだった。スウィートはもう一度寝る、と選択肢も考えたのだが、これ以上寝れそうにないのでやめた。

(寝るところが違うからかな…? 落ち着かないのかも。)

スウィートはそう考えながら、この時間をどうやって過ごそうか、という事も考えていた。

「…! そうだ、この辺りの近くを探索してみよう。」

(そんなに遠くに行かなくていいよね。それに…この感覚のことも知りたいし。)

そう思いながらスウィートは森の中に入っていく事にした。何か記憶の手がかりがあるように、と願いながら。

そして暫く経った頃

「とくに何にも手がかりないなあ…。ただの思い過ごし…?」

スウィートはブツブツ独り言を呟きながら、森の中を進んでいた。

だが何もないし、進んでも同じ風景があるだけ。スウィートは溜息をついた。

(戻ったほうがいいかな……。とくに何も無いと思うし。)

と、来た道をたどるため体を振り向かせ、一歩踏み出すと

「キャッ!?!」

目に前に、1匹のポケモンが転んだのか、倒れこんできた。スウィートは驚いて一歩後ず去った。そのポケモン、アチャモはなんとか体を起き上がらせた。

「いたた……。ん?」

「あつ……」

そして、目がバツチリとあつた。スウィートはなんて言っているのか分からず、オロオロするだけだった。するとアチャモはバツと身構えた。

「も、も、もしかしてお尋ね者ツ!?!」

「えっ……!?!あ、あの……」

その逆でお尋ね者を捕まえている探検隊なのだが。なんとか誤解を解こうとするが、アチャモは勝手に話を進めていく。

「つ、捕まえなきゃ……!?!えつと」

「…え？ え!？」

完全にお尋ね者、と認識されてしまったらしい。一応探検隊バツグとバツチを持つているのだが、気付かないのだろうか。アチャモは攻撃を仕掛けようとしていた。スウィートはパニックになっている頭で一生懸命考えるが、全く説明の仕方が見当たらない。

そんなことをしている間に、アチャモは火をためていたようだ。

「ひ、火の」

「ッ!？」

スウィートは火の粉だと思い、しんくうぎりの準備をする。つまり、全て避けるつもりだ。アチャモの口からは火が見える。スウィートは身構えた。が

「粉!！」

「一体何をやっているのですか。」

「ふえっ?って、きゃッ!！」

突然伸びてきた蔓によつてアチャモはまた転んだ。スウィートは驚いて身構えをとく。蔓が伸びている方を見ると、フシギダネが1匹、立っていた。そしてアチャモの方を見てから溜息をつき、スウィートの方を見て

「…本当にごめんなさい。」

と謝ったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1967x/>

輝く星に 時の誘い

2011年12月9日02時16分発行